

# 自己点検・自己評価報告書

令和7年度



学校法人

昭和医科大学



## 自己点検・自己評価報告書の刊行にあたって

このたび「令和7年度 自己点検・自己評価報告書」を刊行することとなりました。

本学の自己点検・自己評価に関する活動は、平成6年の自己評価委員会設置に始まりました。昭和医科大学年報に基づいて自己点検・自己評価を行い、その内容を取りまとめた自己点検・自己評価報告書を平成7年度分から作成してまいりました。その後、大学基準協会の評価基準に準拠した内容に改め、平成12年には同協会の相互評価を受審しました。平成20年度からは日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価を受審しており、報告書には日本高等教育評価機構の評価基準に準拠した評価項目を取り入れております。また、令和元年度より新たに改正された日本高等教育評価機構の評価基準に合わせて評価項目の見直しを行っております。

さらに本学では、「アドミッション・ポリシー」「カリキュラム・ポリシー」「ディプロマ・ポリシー」のいわゆる3つのポリシーに基づく教育活動の点検・評価も重視しており、学生の受入れ方針、教育課程の編成・実施方針及び学位授与方針のそれぞれについて、達成状況の検証と改善を継続的に行っております。

本報告書は、「現状の説明」「現状の説明に対する評価」「評価に対する進展計画」の構成になっており、昭和医科大学自らが点検・評価を行い、改善・改革に向けた具体策を講じております。点検・評価を継続的に行うことにより、本学の質保証機能の向上、教育・研究活動の充実、個性・特色の伸長に向けて邁進していく所存です。

諸賢のご高覧、ご指摘を賜れば幸いです。

令和8年5月

昭和医科大学  
学長 上條 由美



# 自己点検・自己評価報告書

## 令和7年度

### 目 次

#### 1. 教育

##### 【学部】

##### 1-1 医学部

ア. 単位認定、卒業認定、修了認定	1
イ. 教育課程及び教授方法	2
ウ. 学生の受入れ	3
エ. 学修成果の点検・評価	4

##### 1-2 歯学部

ア. 単位認定、卒業認定、修了認定	5
イ. 教育課程及び教授方法	7
ウ. 学生の受入れ	10
エ. 学修成果の点検・評価	12

##### 1-3 薬学部

ア. 単位認定、卒業認定、修了認定	14
イ. 教育課程及び教授方法	16
ウ. 学生の受入れ	19
エ. 学修成果の点検・評価	21

##### 1-4 保健医療学部

ア. 単位認定、卒業認定、修了認定	24
イ. 教育課程及び教授方法	25
ウ. 学生の受入れ	26
エ. 学修成果の点検・評価	28

##### 1-5 富士吉田教育部

ア. 単位認定、卒業認定、修了認定	29
イ. 教育課程及び教授方法	30
ウ. 学修成果の点検・評価	31

##### 【研究科】

##### 1-6 医学研究科

ア. 単位認定、卒業認定、修了認定	32
イ. 教育課程及び教授方法	34
ウ. 学生の受入れ	36

エ. 学修成果の点検・評価	38
1-7 歯学研究科	
ア. 単位認定、卒業認定、修了認定	40
イ. 教育課程及び教授方法	41
ウ. 学生の受入れ	43
エ. 学修成果の点検・評価	44
1-8 薬学研究科	
ア. 単位認定、卒業認定、修了認定	45
イ. 教育課程及び教授方法	48
ウ. 学生の受入れ	51
エ. 学修成果の点検・評価	53
1-9 保健医療学研究科	
ア. 単位認定、卒業認定、修了認定	56
イ. 教育課程及び教授方法	57
ウ. 学生の受入れ	58
エ. 学修成果の点検・評価	59

## 2. 学生

2-1 学修支援	61
2-2 キャリア支援	62
2-3 学生サービス	64
2-4 学生の意見・要望への対応	65

## 3. 教育・学修環境

3-1 校地、校舎、運動場、体育施設の整備と適切な運営・管理	67
3-2 附属病院の教育施設としての整備と適切な運営・管理	68
3-3 情報サービス施設の整備と適切な運営・管理	69
3-4 図書館の整備と適切な運営・管理	71

## 4. 研究

4-1 研究環境の整備と適切な運営・管理	73
4-2 研究倫理の確立と厳正な運用	74
4-3 研究活動への資源配分	76

## 5. 教員・職員

5-1	教学マネジメントの機能性	78
5-2	教員の配置・職員開発	80
5-3	職員の研修	84

## 6. 経営・管理と財務

6-1	経営の規律と誠実性	86
6-2	理事会の機能	87
6-3	管理運営の円滑化と相互チェック	88
6-4	財務基盤と収支	89
6-5	会計	90

## 7. 内部質保証

7-1	内部質保証の組織体制	93
7-2	内部質保証のための自己点検・評価	94
7-3	内部質保証の機能性	95

## データ集

資料-1	志願者・合格者・入学者数、学生定員、在籍学生数	(医学部)
資料-2	〃	(歯学部)
資料-3	〃	(薬学部)
資料-4	〃	(保健医療学部)
資料-5	〃	(医学研究科)
資料-6	〃	(歯学研究科)
資料-7	〃	(薬学研究科)
資料-8	〃	(保健医療学研究科)
資料-9	〃	(助産学専攻科)
資料-10	国家試験結果	(医学部)
資料-11	〃	(歯学部)
資料-12	〃	(薬学部)
資料-13	〃	(保健医療学部)
資料-14	〃	(助産学専攻科)
資料-15	国際交流の促進状況	
資料-16	公開講座の実施状況	



## 1. 教育

### 【学部】

#### 1-1 医学部

##### ア. 単位認定、卒業認定、修了認定

###### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

###### <効果が上がっている点への発展計画>

①6年次は全員が卒業し、国家試験に全員が合格すべく、模擬試験や特別講義の方略を変更し、早期からフォローアップする体制を構築します。

⇒6年次は全員が無事に卒業することができたものの、国家試験においては受験者123名中7名が不合格となり、全員合格には至らない結果となりました。

②今後も評価の透明性および客観性を維持しつつ、全学年において全員が進級・卒業できるよう、学修内容と評価の質的向上を図ります。

⇒1年生は全員が進級し、6年生も全員が卒業した一方で、他学年では留年・休学・退学が生じました。

###### <改善を要する点への発展計画>

①2年次は前期の成績により、修学支援を導入し早期から勉強法などについて介入することにより、留年者数を減らします。

⇒2年次では令和6年度に比べて留年者数は減少し、令和7年度は休学1名を含め6名にとどまりました。

②卒業試験および臨床総合試験における出題基準については、医師国家試験の過去問に加えて新作問題にも対応できるよう、新問の出題比率を高めます。

⇒新問の出題比率を高めました。国家試験で新卒者7名が不合格、5年次臨床総合試験でも1名が不合格となりました。

③臨床実習Ⅳ（全科実習）におけるワークシートの提出を厳格化し、提出遅延や未提出は欠席とみなし再実習を課すことにします。

⇒ワークシート提出の厳格化により提出遅延は減少し、学修状況の把握とフィードバックの質向上につながりましたが、一部で再実習対象者が生じました。

###### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①令和6年度の改善により卒業率維持や留年者減少の成果は見られましたが、国家試験不合格や他学年の課題が残存しました。

###### 「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

①早期支援とフォロー体制により6年次全員卒業や2年次留年者減少が達成され、学修管理の向上も認められました。

「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①国家試験全員合格に至らず、新問対応力不足や他学年の留年等から支援の個別化が必要であります。

「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①指導担任・修学支援による早期介入型支援とフォロー体制を強化し、学修管理とフィードバックの質向上を図ります。

「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①新問対応力強化と問題演習を充実させ、個別指導の徹底により不合格や留年の抑制を図ります。

イ. 教育課程及び教授方法

「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

- ①臨床実習V-B（診療参加型臨床実習 選択型）の期間が3か月から6か月に延長されることに伴い、学外や海外での臨床実習、研究希望の学生を増加させます。

⇒臨床実習V-Bの期間延長により、学外・海外実習や研究志向の学生が増加し、多様な進路選択と主体的学修の促進が図られました。

<改善を要する点への発展計画>

- ①臨床実習におけるワークシートや提出物の状況を3か月ごとに把握し、早期の段階で学生に対して省察と行動改善を促す体制を整えます。

⇒提出物の定期的確認体制の整備により、早期から省察が促進され、学修態度および臨床能力の向上が認められました。

- ②医学部の初年次の早期臨床体験実習において、実習内容を附属病院における臨床体験にします。

⇒初年次実習を附属病院での臨床体験とした結果、医療現場への理解が深まり、学修意欲の向上が認められました。

「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①臨床実習の充実により主体的学修は促進されましたが、学生間で到達度や省察の質にばらつきが認められます。

「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①長期実習により臨床参加機会が増加し、実践的能力の向上とともに進路意識の明確化が進んでいます。

**「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」**

- ①提出物の質や省察の深さに個人差があり、継続的な指導体制と評価の標準化が十分とはいえません。

**「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」**

- ①長期実習の利点を活かし、学外・海外実習や研究活動の機会をさらに拡充し、主体的学修の定着を図ります。

**「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」**

- ①省察支援体制を強化し、定期的フィードバックの徹底と評価基準の明確化により、学修の質の均てん化を図ります。

**ウ. 学生の受入れ****「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」****<効果が上がっている点への発展計画>**

- ①山梨県に限らず地域枠を設定している各県と協力して受験生へのオンライン説明会を実施します。  
⇒各県と連携したオンライン説明会を実施し、地域枠志願者を維持することができました。
- ②一般選抜Ⅰ期の実施時期について他大学医学部の入試との日程の重なりを避けるため入試実施日の日にち固定を検討します。  
⇒他大学との日程重複回避に向け検討を進めた結果、受験機会の確保と志願者数の安定化に寄与しました。
- ③地域枠で入学した学生への面談等によるサポートを各県に依頼するとともに協力体制を強化します。  
⇒各県との連携強化により面談等の支援体制が充実し、地域枠学生の留年者が減少しました。

**<改善を要する点への発展計画>**

- ①令和9年度一般選抜Ⅱ期の実施時期、出願期間を検討するとともに、学力試験について共通テスト利用も含めて検討します。  
⇒実施時期や出願期間は継続的に検討しています。共通テスト利用については導入を見送ることになりました。

**「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」**

- ①一般選抜Ⅰ期の志願者数は概ね現状維持で推移し、Ⅱ期では志願者が約300名増加するなど広報強化の効果がみられました。

「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①Ⅱ期は志願者が大幅に増加しており、本学への関心の高まりが示された点は評価できます。

「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①Ⅰ期志願者数が横ばいである点については引き続き検討が必要であります。

「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①広報活動を継続的に強化するとともにⅡ期で得られた志願者増加の要因を分析し、Ⅰ期への波及を図ります。

「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①Ⅰ期志願者の増加に向け、入試日程や選抜方法を継続的に見直し、志願者確保とさらなる増加につなげます。

エ. 学修成果の点検・評価

「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

- ①新カリキュラムの完成年度として、診療参加型臨床実習（選択型）における学修成果の達成度や評価を検証し、新カリキュラム全体を評価します。  
⇒選択型臨床実習における学修成果の達成度と評価の検証を通じて、新カリキュラム全体の妥当性と課題が明確化されました。

<改善を要する点への発展計画>

- ①医学部 IR 委員会に担当者を置き、客観的データの収集体制を確立し、その結果を基にカリキュラムを見直すことで、学修成果の向上を図ります。  
⇒IR 委員会に担当者を配置し、客観的データの収集体制を整備した結果、根拠に基づくカリキュラム改善が進展しました。  
②Microsoft 365 の導入を契機に、教育現場での活用を促進し、学修成果や評価に関するデータ収集の効率化と利便性の向上を図ります。  
⇒Microsoft 365 は導入されたものの教育現場での活用は限定的であり、学修成果および評価データの収集効率や利便性の向上には至っていません。

「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①データ収集体制は整備されたが、Microsoft 365 の活用は限定的であり、学修成果の可視化と効率的運用には課題が残っています。

「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①IR機能の整備により客観的データの収集は進み、学修成果の把握と教育改善に向けた基盤が強化されています。

「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①Microsoft 365の活用不足によりデータ収集の効率化が進まず、指標の統一や運用面での課題が残されている。

「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①IR機能をさらに強化し、収集データの分析と活用を推進することで、教育改善の質と継続性の向上を図ります。

「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①Microsoft 365の活用促進と運用ルールの明確化を図り、データ収集の効率化と学修成果評価の質向上を推進する。

(医学部長 小風 暁)

1-2 歯学部

ア. 単位認定、卒業認定、修了認定

「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

- ①5年次の総合試験内容を、学生が臨床実習中であることを踏まえ、実習の理解にも繋がるよう、臨床実地問題を多く取り入れます。  
⇒今年度より5年次の総合試験を必修問題と臨床実地問題に限定して出題することで、基本的な内容の復習とともに臨床実習で得られた知識の確認、定着をはかりました。
- ②国家試験形式の新作問題に触れる機会を増やすため、6年生全員が卒業試験の再評価試験を受験するようにします。  
⇒今年度より6年生全員が卒業試験の再評価試験を受験したことで、学生それぞれの弱点を年明け時点でも把握でき、歯科医師国家試験直前まで細やかな修学支援体制が維持できました。
- ③6年生への修学サポートの一環として、決まった時間に各科の担当者を一堂に集め、質問や疑問にその場で対応する機会を設けます。  
⇒学生の利便性を考慮し、集合型の質疑応答ではなく各講座、部門に窓口となる教員を配置し、学生が質問をしたいときに随時対応できるサポートを実施しました。

＜改善を要する点への発展計画＞

- ①2年次の修学支援対象学生を、前期の定期中間試験の成績により決定することで、専門科目への対応が難しい学生の抽出を促します。  
⇒2年次の修学支援対象学生を、前期中間試験の成績により決定する運用としました。その後も学年の成績動向をモニタリングし、前期定期試験の結果でさらに修学支援対象学生を増やす対応としました。
- ②4年次のCBT再試験に向けた対策として、CBT本試験後に学生アンケートを行い、希望のあった科目や、難易度の高かった科目について補習の講義を設定します。  
⇒4年次のCBT再試験に向けた対策として、CBT本試験後に学生アンケートをもとに補習講義を設定することで、CBTの合格率は昨年度より改善しました。

「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①5年次の総合試験導入により、臨床実習で得た経験を知識として取り込むことで、国家試験での臨床実地問題への対応も見据えた教育体制としています。
- ②2年次の修学支援だけでなく、3年次以降も定期試験等の成績を通年でモニタリングし、修学支援が必要と思われる学生には学年の途中からでも支援することで各学年の進級サポートを充実させています。
- ③公的化されたCBTの合格率向上のため、CBT対策講義の時間数増加と従来CBT後に行っていた進級試験の実施時期を前倒しすることで、CBT前に十分な知識の担保ができるよう、4年次の時間割を変更しています。
- ④卒業再評価試験を6年生全員に受験させることで、歯科医師国家試験への意識を持続させるとともに、より精度の高い卒業判定が実施できています。

「3. 令和7年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

- ①5年次の総合試験により、臨床実習中にも技能と共に知識の定着がはかれ、6年スタート時点での学生の基礎学力が向上しました。
- ②4年次の進級試験の実施時期の前倒しとCBT対策講義の時間数増加により、年度末の学力が担保され、CBTの合格率が向上しました。
- ③卒業試験ⅠとⅡで卒業要件を満たした学生のうち下位学生は、国家試験までの勉強方法に悩むことが多いため、修学支援制度を国家試験まで継続することで、全国平均よりも高い国家試験の合格率を維持できました。

「4. 令和7年度の現状に対する評価＜改善を要する点＞」

- ①教養から専門課程への変換点となる2年次で、一定数の学生が対応できていない状況は続いており、修学支援の提供時期や指導方法について継続的に検討します。

②CBTにおいて実際の症例に対する診断能力が問われることもあり、4年次での臨床に即した知識の定着方法について検討します。

#### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

①5年次の総合試験内容を、参加型臨床実習の理解にも繋がるよう、臨床実地問題を中心とし、技能とリンクした知識の更なる定着をはかります。

②CBTの前に進級試験を実施して、基本的な知識量の確保を継続するとともに、CBTの対策講義の充実をはかり、さらなる合格率の向上を目指します。

③6年生全員の卒業再評価試験受験は継続するとともに、学生のモチベーション向上のために再評価試験結果の席次への反映や、成績による歯学部独自の表彰制度の導入を検討します。

#### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

①2年次の修学支援対象学生を前期定期試験の成績により決定運用しますが、その後の成績次第で入れ替えも行うことのできるフレキシブルな対応とします。

②CBTにおける症例への診断能力向上のためCBT対策講義の内容の一部に基礎科目と臨床科目の統合教育を導入します。

### イ. 教育課程及び教授方法

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

##### <効果が上がっている点への発展計画>

①アセスメント・ポリシーによる評価検証として、進級率の推移を分かりやすくした分析を検討します。

⇒各学年の進級試験結果は得点率グラフを作成し、学年の全体成績を可視化し、分かりやすくしました。

②D2 修学支援教員の後期追加補充ならびに支援体制は引き続き行います。

⇒後期定期試験で再試験になった学生で修学支援教員がついていない学生に対して追加で担当教員を配置し、各学年の留年生数は減少しました。

③プロフェッショナル重点ユニットではプロフェッショナルリズム教育を行う講義時間を増やすなど、さらに徹底します。

⇒D3「在宅医療を支える基本技能」が学部連携実習となり、プロフェッショナルリズム重点科目に追加し、態度教育科目を増やしました。

④D6 支援内容はD6 チューター会議で共有し、支援体制の推進を図ります。

⇒卒業試験の成績などから、科目担当チューターからの報告を共有し、支援体制を強化した結果、第119回歯科医師国家試験でも好成績を収めました。

⑤D6 学生の大学院生サポートやアドバイス内容を多くの学生へも共有します。

⇒大学院修学サポート体制も2年を経過し、大学院生と学生との国試対策が充実

してきました。

＜改善を要する点への発展計画＞

- ①アセスメント・ポリシーによる評価検証に入試分析を加え、入試区分別の成績推移の分析を検討します。  
⇒令和6年度は入試結果を評価に加えましたが、令和7年度は入試区分による成績と進級結果の評価も検討します。
- ②D2 修学支援教員を後期定期試験後に補充する時期を早めるよう検討します。  
⇒10月に実施される後期中間試験の結果を検証し、早期に修学支援教員を追加補充できるよう検討します。
- ③D4 共用試験(CBT)の対策講義を見直し、不到達者を減らすよう努めます。  
⇒学生の希望科目を調査し、対策補習を早めに開講した結果、不合格(不到達者)は令和6年度より減り、2名でした。
- ④D6 留年生の対策を丁寧に指導支援し、休学者を出さないよう検討します。  
⇒支援状況はポータルサイトに記入できるようになり、学生対応が共有できるようになりましたが、チューター会議でも相互に共有できるよう検討します。

「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①アセスメント・ポリシーの検証では科目単位の詳細な検証は行えておりません。
- ②D2 修学支援教員の追加補充は継続しており、支援体制を強化した結果、留年者数は減少しました。
- ③プロフェッショナル重点ユニットについて、学部連携実習となったD3「在宅医療を支える基本技能」を追加しました。
- ④共用試験 CBT 対策講義として、学生の希望を聴取し、講義科目を構成しました。

「3. 令和7年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

- ①1年次初年次体験実習はコロナ禍以降、歯科病院見学実習として実施してきたため、科目名を地域連携歯科実習Ⅰから歯科診療基本実習Ⅰに変更しました。
- ②令和6年度に続き、プロフェッショナル重点ユニットでの留年はありませんでした。
- ③2年次前期中間試験後に修学支援教員の追加補充を行ったことで、令和6年度より早めに行い指導体制を開始した結果、留年者数は減少しました。
- ④CBT 本試後に再試験対象者に対策講義を行った結果、令和6年度より不合格者数は減りました。

**「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」**

- ①2年次から学ぶ基礎系歯科専門科目は、学修範囲が広く学生の苦手意識は継続しており、再試者数は特に減少はしていません。
- ②授業アンケートの回答率が2~3割程度しかないため、授業の改善点については全体の意見として反映されているのか、不明確な点があります。
- ③臨床実習期間に行っているD5「学部連携病院病棟実習」はプロフェッショナル重点評価ユニットではなかったため、欠席する学生がいました。
- ④CBT再試験者と不合格者は令和6年度より減少しましたが、まだ2名が不合格のため留年しました。
- ⑤D6総括演習では講義の復習試験である問題演習のほか、予備校模擬試験も行っていますが、自宅受験する学生が多く、真の学力を測ることが出来ませんでした。

**「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」**

- ①1年次から歯科病院での先端的歯科臨床を見学することで歯科医師へのモチベーションが高くなっておりますが、より効率的な配属との連絡を検討します。
- ②アンプロフェッショナルな行動をとる学生は減少していますが、プロフェッショナルリズムの重要性を継続して指導します。
- ③D2修学支援担当の追加補充は継続して行い、前期中間試験の成績から対処できるよう検討します。
- ④令和8年度からCBT対策講義は、基礎科目と臨床科目を統合したD4「統合歯学」というユニット名として、連問対策などを強化した科目として開講します。

**「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」**

- ①2年次の基礎系歯科専門科目の苦手意識を克服するため、令和8年度新新カリキュラムでは早期から学習することを目的として1年次後期から開講します。
- ②授業アンケートの回収率が上がらないため、回収方法や通知に関して対策を検討します。
- ③D5「学部連携病院病棟実習」をプロフェッショナル重点ユニットに加え、臨床実習におけるプロフェッショナルリズムの重要性をさらに指導します。
- ④CBTでの連問の対策がこれまで弱かった点を強化するため、CBT対策講義である「統合歯学」では、基礎系科目と臨床系科目の連携を図ります。
- ⑤D6総括演習では学内試験だけではなく、外部予備校模試の結果を正しく検証できるように学内講義室で実施するよう指導します。

## ウ. 学生の受入れ

### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

#### <効果が上がっている点への発展計画>

- ①志願者数をさらに増加させるために魅力あるオープンキャンパスなどを開催し、受験生に対して本学の特色をアピールします。  
⇒年2回のオープンキャンパスを継続的に実施しました。4月のオープンキャンパスでは、学部・入試説明会と診療科の見学会の2部構成で実施し、歯学部の特色をより身近なものとして受験生に紹介しました。
- ②選抜Ⅰ・Ⅱ期、大学共通テストの入学辞退者数を減少させるための方策について検討します。  
⇒入試説明会の出席者や入学者を対象としたアンケート結果を分析することにより、本学の志願理由をより客観的に把握し、広報活動に活用しました。
- ③総合型入試における模擬授業の実施方法や面接評価方法を改善します。  
⇒模擬授業の評価試験の得点分布に関する解析から、評価試験の難易度の調整が行われました。また、面接においても評価項目についての見直しがなされました。

#### <改善を要する点への発展計画>

- ①指定校の数を増やすためにデータ収集と解析を行います。  
⇒過去の高校別の志願者数、合格者数および入学者数に関するデータ解析が行われ、新規の指定校の認定に活用されました。
- ②入学者の定員超過を防ぐために、過去の実績に基づいた検討を行います。  
⇒入試区分別の合格者数と入学者数の割合が算出され、適正な追加合格者数の決定に活用されました。
- ③入試当日から合格者決定までのプロセスを見直し、時間的に無理のない入試判定資料の作成を行います。  
⇒Ⅰ期入試における合格判定までの期間を前年度よりも延長することにより、時間的に余裕を持った、無理のない合否判定プロセスを遂行することができました。

### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①予備校の主催する説明会（メルリック）、指定校を中心とした高校訪問および土浦日本大学中等教育学校（茨城県）および星陵高等学校（静岡県）の出張講義を継続的に実施しました。
- ②4月および7月に実施されたオープンキャンパスでは、高校1年生から3年生にわたる幅広い学生の参加を得ることができました。
- ③推薦型入試（指定校）においては、推薦枠を各高校1名から2名に拡大するこ

とにより、志願者数が大きく増加しました。

- ④一般選抜入試においてはⅡ期入試において大幅な志願者の増加が認められましたが、一方、共通テスト利用入試については入学手続き者が減少する予定です。

### 「3. 令和7年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

- ①高校訪問、模擬授業、予備校の説明会およびオープンキャンパスを継続的に実施することにより本学の知名度が向上し志願者の増加に繋がっていると考えられます。
- ②推薦入試（指定校枠）の高校あたりの推薦枠を1名から2名に増やしたことで、当該区分における志願者数の増加につながったと考えられます。
- ③総合型入試においても志願者数の増加により高い競争率を保つことができます。

### 「4. 令和7年度の現状に対する評価＜改善を要する点＞」

- ①推薦入試（公募枠）の志願者数があまり増えていません。
- ②共通テスト利用入試の入学者数が減少する予定です。
- ③推薦入試（指定校枠）において、推薦される学生の質に高校間での格差があるように思われます。

### 「5. 評価を踏まえた発展計画＜効果が上がっている点への発展計画＞」

- ①高校訪問やオープンキャンパス、特に歯科病院見学を継続実施することにより、他校との差別化をはかります。
- ②推薦入試（指定校枠）の志願者数は増加したので、推薦資格となる評定平均の見直しを行うことにより、より質の高い学生の出願を促したいと考えます。
- ③総合型入試における模擬授業の評価テストの成績と入学後の成績との相関を検証し、模擬授業の内容のブラッシュアップに役立てます。

### 「6. 評価を踏まえた発展計画＜改善を要する点への発展計画＞」

- ①推薦入試（公募枠）の志願者数の増加につながるよう高校訪問における丁寧な説明を行います。
- ②推薦入試（指定校枠）における、高校あたりの推薦枠を一律2名とせず、適正数を再検討致します。
- ③志願者数、入学者数や入学後の成績分析を継続的に実施することにより、より適正な募集定員数の設定を行います。

## エ. 学修成果の点検・評価

### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

#### <効果が上がっている点への発展計画>

- ①講義後確認小テストを導入した効果を評価するため、各科目の平均点や再試人数等の動向について、調査評価します。  
⇒各学年の各科目の分析は終了していませんが、最終的な留年生数は減少しました。
- ②D5 総合試験の実施による効果と国試合格率との相関を分析します。  
⇒総合試験を実施して3回目になりますが、第119回歯科国試では新卒合格率は94.6%と3年連続で非常に高い合格率を維持しております。
- ③歯科医師国家試験の合格率は高くなりましたが、各講座科目における正答率の推移を分析評価します。  
⇒科目単位での正答率の分析は継続しておりますが、2年連続で特定の科目が低いことが分かり対策を始めました。

#### <改善を要する点への発展計画>

- ①D4 共用試験 (CBT) の得点を向上させるため、対策講義や補習講義を増やし対策を図ります。  
⇒CBT 再試受験者に対して、苦手科目を聴取し、対策補習講義を速やかに実施しました。
- ②各学年の進級率の向上を目指し、定期試験の成績は学年担当教員と随時共有を図ります。  
⇒歯学部定例教授会において各学年主任から学年の状況と留年生の現状を報告し、教授全体で共有しています。
- ③国試臨床実地問題の対応に繋がる D5 臨床実習での取り組みを検討します。  
⇒これまでよりも積極的に外来での実習に参加するよう促し、国試問題にも対応できるような指導を行っています。
- ④電子ポートフォリオを使用した臨床実習の課題集計による自験数の動向を調査し、診療参加型実習の充実が進んでいるか、調査検討します。  
⇒令和7年度の自験数調査では令和6年度よりも自験数の報告は約2倍に増えました。

### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①卒業時アンケートの結果、学修成果である各コンピテンシーの自己評価の全体平均点は4.4ポイントであり、令和6年度よりも0.2ポイント増加しました。
- ②ほぼすべての講義後に確認小テストを導入した結果、各学年の最終的な留年者数は減少しました。

③D5 総合試験を3年間継続した結果、第119回歯科国試では新卒合格率は94.6%と3年連続で非常に高い合格率を維持しております。

④校名変更に伴い、3つのポリシーとコンピテンシーを見直しました。

### 「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

①卒業時アンケート調査の結果、プロフェッショナリズムとチーム医療の自己評価は4.5ポイントであり、多職種連携教育の効果が確認されました。

②歯学部IR委員会によるAIによる分析結果から、歯科医師国家試験不合格リスクを押し上げている成績パターンが特定出来ました。

③全学年オリエンテーション時に3ポリシーを丁寧に説明しているため、学生の理解が深まり、卒業時アンケートの調査結果から良好な達成度で示しています。

### 「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

①授業アンケートから各科目の授業内容を見直し改善を行っていますが、学生の回答率は低いままです。

②診療参加型臨床実習の充実を促しておりますが、ポートフォリオ集計結果から自験数が令和6年度よりも約2倍に増えた理由を分析する必要があります。

③共用試験OSCEは全員が合格しましたが、CBT再試は2名が不合格となり、進級試験を受験することが出来ずに留年しました。

### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

①専門的実践能力の自己評価は4.3ポイントであったが、プロフェッショナリズムやチーム医療(4.5)と同等の評価を得られよう臨床実習を充実させます。

②社会的貢献、自己研鑽の自己評価も高い到達度ではあるが他のコンピテンシーに比べやや低いため、同評価となるよう検討します。

③AIを使った国家試験分析を進め、今後受験する学生の重点支援項目をAIで予測し、学生支援に活用します。

### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

①授業アンケートは集計システムが同時アクセスに対応出来ずに学生の回答が、後回しになっていることが分かりました。別の手段で実施可能を検討します。

②診療参加型臨床実習における自験数の集計を正しく分析して、電子ポートフォリオへの提出方法を丁寧に説明し、提出後も相互確認できるよう努めます。

③令和8年度はCBT対策講義を見直し、基礎科目と臨床科目を統合した科目として、総合的な学力向上を目指します。

(歯学部長 馬場 一美)

### 1-3 薬学部

#### ア. 単位認定、卒業認定、修了認定

##### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

###### <効果が上がっている点への発展計画>

①定期試験において平均点が今後も70点前後となるように、適正な作問と採点後の自主的な補正の実行を推進します。

⇒今年度も全学年の定期試験の平均点が約70点の難易度になっていることを確認しました。

②卒業試験による卒業判定では引き続き卒業生の90%以上が薬剤師国家試験に合格できる学力を担保します。

⇒薬剤師国家試験の新卒における合格率は85.71%と、若干90%を下回りました。

③卒業延期となった学生への修学支援をさらに充実させ、学力を担保します。

⇒前年度卒業延期となった学生6名のうち、4名が卒業しましたが、うち薬剤師国家試験に合格したのは3名でした。

④進級時の学力担保として妥当な評価となるように、進級試験問題の出題形式や難易度について検討を続けます。

⇒進級試験問題の出題形式や難易度の指針について教育委員会において議論し、各出題者に周知しました。

###### <改善を要する点への発展計画>

①定期試験および進級試験において各学年の試験委員長が果たすべき役割を明確にして、適切な試験が実施できる体制を構築します。

⇒各学年の試験委員長を中心とする試験実施体制の構築には至りませんでした。

②正答率や識別指数より、卒業試験および再評価試験の難易度について検討し、より適切な問題作成に取り組みます。

⇒卒業試験、再評価試験の多くにおいて補正を行う問題は少なくなりましたが、まだ多数の問題が補正対象となりました。

③2、3年次の進級試験問題の難易度を検証の上、CBTに準じた問題作成を行うよう改めて科目責任者に周知し、適切な問題作成に取り組みます。

⇒2、3年次の進級試験問題作成については、CBTに準じた問題作成を行うよう改めて科目責任者に周知し、科目間の出題レベルの差を小さくすることができました。

④4年次の進級試験の問題難易度、合格基準について検証し、進級試験までの試験に合格した学生のCBT全員合格を目指します。

⇒CBT不合格者は昨年度よりも減りましたが、本年度もCBTで2名が不合格となりました。

**「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」**

- ①定期試験は科目毎に平均70点の難易度になるように実施できました。
- ②6年次学生171名のうち卒業試験(再評価試験含)合格者は168名(卒業率96.74%)、うち144名が薬剤師国家試験に合格しました(新卒合格率85.71%)。
- ③前年度卒業延期者6名のうち、薬剤師国家試験合格者は3名でした。
- ④5年次進級試験で不合格の学生はおりませんでしたが、4年次で進級試験不合格の学生が1名、また進級試験に合格したにも関わらず、共用試験 CBT 不合格の学生が2名おりました。
- ⑤2年次進級試験再試験で不合格の学生はおりませんでしたが、3年次では2名不合格でした。

**「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」**

- ①定期試験、進級試験および卒業試験は平均点が70点前後となり、今年度も目標とする難易度の試験を実施することができました。
- ②進級基準を明確にすることで6年次まで進級する際の学力担保レベルを上げ、6年次の留年生を少数(3名)にとどめることができました。
- ③2、3年次進級試験において、科目間の出題レベルの差を小さくすることができ、また不合格者を少数にとどめることができました。

**「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」**

- ①定期試験および進級試験において各学年の試験委員長が果たすべき役割が明確にされていません。
- ②卒業試験、再評価試験および進級試験において難易度の高い問題は少数とはなりましたが、未だあり、補正が必要となっています。
- ③薬剤師国家試験の新卒における合格率が90%を下回りました。
- ④前年度卒業延期者6名のうち、1名が再度留年し除籍となり、1名が休学し、さらに薬剤師国家試験に合格したのは3名でした。
- ⑤4年次で進級試験までの試験に合格したにも関わらず、共用試験 CBT に不合格となった学生が本年度も2名おりました。

**「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」**

- ①定期試験において平均点が今後も70点前後となるよう適正な作問と採点後の自主的な補正の実行を推進します。
- ②正答率や識別指数より卒業試験および再評価試験の難易度について検討し、より適切な問題作成に取り組みます。

- ③進級時の学力担保として妥当な評価となるように、進級試験問題の出題形式や難易度について検討を続けます。

#### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①定期試験および進級試験において各学年の試験委員長が果たすべき役割をさらに明確にして、適切な試験が実施できる体制を構築します。
- ②卒業生の90%以上が薬剤師国家試験に合格できる学力を担保できるように、卒業試験による卒業判定について検討します。
- ③卒業延期となった学生への修学支援をさらに充実させ、学力を担保します。
- ④4年次進級試験の問題難易度、合格基準についてさらに検証し、進級試験までの試験に合格した学生のCBT全員合格を目指します。

### イ. 教育課程及び教授方法

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

##### <効果が上がっている点への発展計画>

- ①令和7年度の2年次から、薬学教育モデル・コア・カリキュラム(令和4年度改訂版)に準拠した新カリキュラムを適用します。  
⇒本年度の2年次から新カリキュラムを適用しました。
- ②2年次において、形成的評価およびそのフィードバックを繰り返し実施するとともに、自己学修を促すシステムを構築します。  
⇒2年次で実施した新カリキュラムにおいては、時間割に自己学習のための時間を確保しました。
- ③2年次において、9月はじめに特別補講を導入し、前期科目から後期科目への橋渡しをはかります。  
⇒2年生231名のうち、進級試験受験資格を喪失し留年となったものが34名おりました。
- ④令和4年度に開始した、4年次後期から6年次前期まで約2年間にわたって臨床能力を高める教育プログラムの検証を進め、さらに充実したものとします。  
⇒症例研究実践コースを選択した学生全員が発表会での研究発表を行うのに加え、10名以上の学生が学外の学会でも研究成果の発表を行いました。
- ⑤6年次で終了する「薬学研究実践プログラム」では、学外の学会における研究成果の発表を奨励し、発表数のさらなる増加をはかります。  
⇒延べ36名の学生が学外の学会でも研究成果の発表を行い、日本薬学会第145年会で学生優秀発表賞を受賞するなど、5名の学生が表彰されました。

＜改善を要する点への発展計画＞

- ①令和 6 年度入学生から適用した新カリキュラムについて、導入する授業方法や内容に関するアンケート等によって、その効果を検証します。  
⇒アンケートについては実施に至りませんでした。
- ②令和 8 年度以降の 3 年次、9 年度以降の 4 年次の、改訂薬学教育モデル・コア・カリキュラムに準拠した新カリキュラムの詳細について、策定を進めます。  
⇒令和 8 年度以降の 3 年次、9 年度以降の 4 年次の新カリキュラムを策定しました。
- ③1～4 年次において、補講等の導入に加え、自己学修を促すシステムを構築します。  
⇒2 年次の補講に加え、1 年次において専門科目の補講を実施しました。
- ④5～6 年次における応用薬学演習、6 年次における集中講義の実施方法についてこれまでの教育効果を検証し、より効果的な方法を構築します。  
⇒6 年次における集中講義の実施方法を変更し、オンデマンド講義を一斉配信することとしました。
- ⑤授業方法（遠隔授業、対面授業、アクティブ・ラーニング）の最適化に向けて、検証を進めます。  
⇒新カリキュラム策定に向け、授業方法の検証につとめました。

「2. 令和 6 年度の改善結果を踏まえた令和 7 年度の現状の説明」

- ①令和 7 年度 2 年次から、薬学教育モデル・コア・カリキュラム(令和 4 年度改訂版)に準拠した新カリキュラムを開始しました。
- ②令和 8 年度以降の 3 年次、9 年度以降の 4 年次に適用する改訂薬学教育モデル・コア・カリキュラムに準拠した新カリキュラムを策定しました。
- ③6 年次における集中講義の実施方法について検証し、集中講義におけるオンデマンド講義を一斉配信することとしました。
- ④6 年次で終了する「薬学研究実践プログラム」において、延べ 36 名の学生が学外の学会でも研究成果の発表を行い、うち 5 名の学生が表彰されました。

「3. 令和 7 年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

- ①令和 7 年度 2 年次から、薬学教育モデル・コア・カリキュラム(令和 4 年度改訂版)に準拠した新カリキュラムを導入することができました。
- ②令和 7 年度 2 年次における改訂薬学教育モデル・コア・カリキュラムに準拠した新カリキュラムにおいては、4 期制ならびに新たな進級判定基準を導入することができました。

- ③令和8年度以降の3年次、9年度以降の4年次の新カリキュラムを策定することができました。
- ④6年次で終了する「薬学研究実践プログラム」において、「基盤研究実践コース」だけでなく、「症例研究実践コース」、「臨床研究実践コース」においても多くの研究成果が得られ、学外の学会において多数の学生が研究成果の発表を行いました。

**「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」**

- ①令和6年度1年次から導入された、薬学教育モデル・コア・カリキュラム(令和4年度改訂版)に準拠した新カリキュラムについて、未だ検証できていません。
- ②2年次において留年・退学・休学者数が未だその数が多く、3年次では増加傾向です。
- ③低学年で自己学修を促しましたが、多くの学生において未だ自己学修が不十分です。
- ④5～6年次における応用薬学演習、6年次における集中講義の配信動画を、多数の学生が受講していないことが明らかとなりました。
- ⑤オンデマンド配信動画および対面講義で実施しているアクティブ・ラーニングの教育効果について検証できていません。

**「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」**

- ①令和8年度の3年次から、薬学教育モデル・コア・カリキュラム(令和4年度改訂版)に準拠した新カリキュラムを適用します。
- ②2年次に加え、3年次においても、形成的評価およびそのフィードバックを繰り返し実施するとともに、自己学修を促すシステムを構築します。
- ③2年次に加え、3年次においても、9月はじめに特別補講を導入し、前期科目から後期科目への橋渡しをはかります。
- ④令和4年度に開始した、4年次後期から6年次前期まで約2年間にわたって臨床能力を高める教育プログラムの検証を進め、さらに充実したものとします。
- ⑤6年次で終了する「薬学研究実践プログラム」では、学外の学会における研究成果の発表を奨励し、発表数のさらなる増加をはかります。

**「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」**

- ①令和6年度入学生から適用した新カリキュラムについて、導入する授業方法や内容に関するアンケート等によって、その効果を検証します。
- ②令和9年度以降の4～6年次における、改訂薬学教育モデル・コア・カリキュラムに準拠した新カリキュラムの実施について、さらに詳細な検討を進めます。

- ③1年次からの低学年において、補講等の導入に加え、自己学修を促すシステムを構築します。
- ④5～6年次における応用薬学演習、6年次における集中講義の実施方法についてこれまでの教育効果を検証し、より効果的な方法を構築します。
- ⑤授業方法（遠隔授業、対面授業、アクティブ・ラーニング）の最適化に向けて、検証を進めます。

## ウ. 学生の受入れ

### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

#### <効果が上がっている点への発展計画>

- ①本学の特徴などに関わる広報活動について、さらにその効果や手法を分析し、より効率的な広報を実施して、志願者の増加に努めます。  
⇒広報活動の効果や手法の分析・改善を推し進め、学校推薦型選抜入試の志願者数は増加しましたが、一般選抜Ⅰ期入試、Ⅱ期入試等、その他の入試の志願者数は減少しました。
- ②WEBダイレクトメールについては、より魅力的なコンテンツを作成し、本学の特徴や他大学との違い、優位性についてアピールします。  
⇒WEBダイレクトメールによる積極的な広報を推し進めました。
- ③高大連携をさらに推し進め、特に包括連携協定を締結した高校とは密に連絡を取りつつ相互関係を醸成し、本学への関心を高めます。  
⇒昭和女子大学附属昭和高等学校をはじめ、特別協定校・包括連携協定校での出張授業を数回にわたり実施し、さらに連携の強化を図りました。
- ④オープンキャンパスでは、本学での学びについてさらにわかりやすい企画、新たな視点からの企画を作成し、幅広い学生に興味を持ってもらえるようなコンテンツを作成して本学への志願者を増やします。  
⇒オープンキャンパスでは、これまで実施してきた病院見学ツアーやVR体験等に加え、新たにアナトマージテーブルを用いた体験実習を実施しました。
- ⑤オープンキャンパスなどにより、本学への関心が高く、本学の方向性をよく理解している学生に積極的に受験を勧め、本学への志願度の高い受験生を増やします。  
⇒学校推薦型選抜入試の志願者数は増加しましたが、総合型選抜入試の志願者数はやや減少しました。

#### <改善を要する点への発展計画>

- ①指定校からの受験生数を1名から複数名とし、指定校からより多くの受験生が志願できるように工夫します。

⇒指定校推薦入試での志願者枠を1校あたり2名に増やしましたが、指定校からの受験生数は14名から10名に減少しました。

②オープンキャンパスの広報の方法を見直し、さらに効率的に幅広い年齢層に関心を持ってもらえるようにします。

⇒サマーオープンキャンパスでは、82組の高校3年生、44組の高校2年生に加え、19組の高校1年生の参加がありました。

③アンケートなどで入学前準備教育について詳細に解析し、関係予備校と本学教員とでさらに内容のブラッシュアップに努めます。

⇒アンケートなどで入学前準備教育について詳細に解析し、担当している富士学院と本学教員とで内容のブラッシュアップに努めました。

## 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①鷺沼キャンパスについて、高校への説明やオープンキャンパスで広く周知し、本学に対する認識を高めることができました。

②LINEによる積極的な発信を行うとともに、WEBダイレクトメールは引き続き、閲覧率の高い高校低学年への発信を行いました。

③昭和女子大学附属昭和高等学校をはじめ、特別協定校・包括連携協定校での出張授業をさらに強化するとともに、昭和女子大学附属昭和高等学校における科目等履修生制度の導入について具体的な議論を始めました。

④年3回のオープンキャンパスでは、アナトマージテーブルを用いた体験実習など、初年次から高学年にわたって実際に行われる本学での学びを体験できるようなイベントを実施しました。

⑤令和8年度入学者数は207名で、区分毎の内訳は総合型選抜20名、学校推薦型43名、卒業生推薦2名、一般選抜Ⅰ期99名・Ⅱ期37名、医学部併願4名、共通テスト利用2名でした。

## 「3. 令和7年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

①ダイレクトメールの閲覧率は昨年引き続き高く、高校生低学年へのアピールは十分にできていることが確認できました。

②包括連携協定については高校側からの積極的なアプローチがあり、本学と提携することへのメリットが認識されていることがわかりました。

③オープンキャンパスの内容については、アンケートの結果からも好評で、本学の教育について受験生にも伝えることができました。

④選抜入試合格者の入学率は高く、受験生の本学志願度が高いことが確認されました。

**「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」**

- ①公募推薦入試以外の入試の志願者数がいずれも減少し、志願者増加のための方策が必要です。
- ②指定校推薦入試では募集人数が25名のところ、志願者は10名に留まり、方策が必要です。
- ③オープンキャンパスへの評価は高いものの参加者数は増加していないため、本学に関心を高めてもらうためにも参加者を増やす必要があります。
- ④年内入試合格者に対する入学準備教育について、十分なフィードバックができていないため、プログラムの妥当性や有効性を検証する必要があります。

**「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」**

- ①WEBダイレクトメールについてはより魅力的なコンテンツを作成し、本学の特徴や他大学との違い、優位性についてアピールします。
- ②高大連携をさらに推し進め、特に包括連携協定を締結した高校とは密に連絡を取りつつ相互関係を醸成し、本学への関心を高めます。
- ③オープンキャンパスでは、本学での学びについてさらにわかりやすい企画、新たな視点からの企画を作成し、幅広い学生に興味を持ってもらえるようなコンテンツを実施して本学への志願者を増やします。
- ④オープンキャンパスなどにより、本学に関心が高く、理解している学生に積極的に受験を勧め、本学への志願度の高い受験生を増やします。

**「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」**

- ①新たな入試選抜システムを導入し、より受けやすい入試を実施することで、志願者数の増加をめざします。
- ②指定校の数を増やすとともに、指定校推薦入試の受験者数が増加するように努めます。
- ③大学院以外の本学附属病院での見学型オープンキャンパスを実施する等、オープンキャンパスの実施方法を工夫し、さらに効率的に幅広い年齢層に関心を持ってもらうようにします。
- ④アンケートなどで入学前準備教育について詳細に解析し、担当している富士学院と本学教員とでさらに内容のブラッシュアップに努めます。

**エ. 学修成果の点検・評価****「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」****<効果が上がっている点への発展計画>**

①6年次進級試験の合格基準を65%に上げたことで、6年次の学力担保に繋がっているか、卒業試験の合格者数や薬剤師国家試験の合格率を指標に引き続き検証します。

⇒卒業できずに留年したものは3名と前年度より減少しましたが、薬剤師国家試験の新卒における合格率は85.71%と前年度の合格率を下回りました。

②次年度は「学修技法とスチューデントデベロプメント」の完成年度にあたるため6年次にも開講し、在籍期間における自己学修に対する省察を行う時間を確保し、成長を促します。

⇒「学修技法とスチューデントデベロプメント」を6年次でも開講し、前年度の学修を振り返る機会を設けました。

③次年度2年生は新薬学教育モデル・コア・カリキュラムが適用され、4期制カリキュラムに再編成されるため、Web上での問題演習の導入などを行います。

⇒2年次に、新たにWeb上での問題演習を導入しました。

#### <改善を要する点への発展計画>

①薬学の基礎専門科目が、将来、臨床薬剤師へ繋がっていることを示す機会を入学時早期に設定し、6年間のカリキュラムの全体像を示すことで学修へのモチベーションを高めます。

⇒入学時すぐに行うオリエンテーション等で、6年間のカリキュラムの全体像を提示し、薬学の基礎専門科目が、将来、臨床薬剤師へ繋がっていることを示しました。

②令和7年度第2学年は薬学教育モデル・コア・カリキュラム（令和4年度改訂版）に基づく新カリキュラムが適用されるため、早期から担任との面談や学修方法を提示します。

⇒2年次開始してすぐに担任と面談する機会を設け、早期から面談を実施しました。

③第4学年で開講する各科目の平均点、得点分布、進級試験の平均点、得点分布、合格者数などの教学データを解析し、現カリキュラムにおける適切性について検証します。

⇒第4学年で開講する各科目の教学データを解析しました。

#### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①卒業できずに留年した学生は3名と前年度の6名より減少しましたが、薬剤師国家試験の新卒における合格率は85.71%と前年度の合格率を下回りました。

②卒業試験後の再評価試験の受験対象者数が多い状況が続いています。

③2年次に新たな4期制カリキュラムを導入しました。

- ④ポートフォリオの質的・量的解析をさらに早めに解析して提示することで、カリキュラム改編に繋げる時間をより多く確保する必要があります。

### 「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①6年次で「学修技法とチュードントデベロプメント」を開講したことで、ポートフォリオを用いて各学生が前年度の学修を自己省察する時間を確保し、成長を促しました。
- ②2年次に4期制カリキュラム、進級判定基準を導入しました。
- ③2年次に新たなWeb上での問題演習コンテンツを実施し、学生の自己学修に対する意欲を高めることができました。

### 「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①薬剤師国家試験の新卒における合格率が90%を下回ったことから、新たな対策が必要です。
- ②2、3年次の留年生が未だ多いことから、引き続き2、3年次における学力担保や学ぶモチベーションを維持するための対策が必要です。
- ③薬学共用試験(CBT)不合格による留年生が近年増加傾向であるため、過去の定期試験得点分布の解析や進級試験の難易度の見直し等の継続が必要です。

### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①2年次に加え、3年次に4期制カリキュラム、進級判定基準を新たに導入します。
- ②3年次においても、Web上での問題演習コンテンツを実施します。
- ③2年次だけでなく、3年次においても早期から担任との面談や学修方法を提示します。

### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①6年次までの学力担保がきちんと行われているか、卒業試験の合格者数や薬剤師国家試験の合格率を指標に引き続き検証します。
- ②4学年次で開講する各科目の教学データ、進級試験データの解析を継続します。
- ③各々の薬学専門科目がいかに将来の臨床薬剤師につながっていくかを示す機会を1年次だけでなく、2年次や3年次においても設定します。

(薬学部長 原 俊太郎)

#### 1-4 保健医療学部

##### ア. 単位認定、卒業認定、修了認定

###### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

###### <効果が上がっている点への発展計画>

①兼任・兼担教員所有の情報が科目責任者である学部専任教員に集中するための体制構築を図ります。

⇒年度当初に、科目責任者である学部専任教員から科目担当者である兼任・兼担教員への連絡を行うことを義務付けました。

###### <改善を要する点への発展計画>

①全教員を対象とする問題作成ワークショップを前期・後期に1回ずつオンラインで開催します。開催に当たっては統括看護部、統括リハビリテーション技術部等臨床教員配置の各部局との調整を行います。

⇒今年度も問題作成ワークショップの開催ができませんでした。

###### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①年度当初に、科目責任者である学部専任教員から科目担当者である兼任・兼担教員への連絡を行うことを義務付けたため、兼任・兼担教員との情報交換がより円滑になりました。

②今年度も全教員を対象とする問題作成ワークショップが開催できませんでした。全教員が問題作成に関する知識を有することが必要です。

###### 「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

①科目責任者である学部専任教員と科目担当者である兼任・兼担教員との情報交換がより円滑になりました。

###### 「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

①今年度も問題作成ワークショップの開催ができませんでした。

②国家試験指導に関する情報の共有化はさらに進められましたが、国家試験の結果は非常に芳しくないものでした。

###### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

①科目責任者である学部専任教員と科目担当者である兼任・兼担教員との情報交換を定期的に行うようにします。

###### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

①臨床教員も含めた全教員を対象とする問題作成ワークショップを開催します。

- ②国家試験指導の体制を根本的に見直します。具体的には、国家試験対策委員会、教育委員会、教育推進室と新学科・新専攻も含めた各学科・各専攻の代表者から構成されるチームを組織して指導体制および内容等を検討、修正します。

## イ. 教育課程及び教授方法

### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

#### <効果が上がっている点への発展計画>

- ①臨床教員のさらなる増員のために、統括看護部、統括リハビリテーション技術部等臨床教員配置の各部局と連携して広報活動を展開します。  
⇒統括看護部および統括リハビリテーション技術部と連携して臨床教員増員に関するアピールを行いました。
- ②リハビリテーション学科言語聴覚療法学専攻、同視覚機能療法学専攻における附属病院での臨地実習体制の構築のための準備を開始します。  
⇒臨地実習プログラムの構築を行うと共に、臨床教員候補者の大学院進学を推奨しました。

#### <改善を要する点への発展計画>

- ①言語聴覚士、視能訓練士である臨床教員が非常に不足しているため、大学院進学者をさらに増やすための広報活動が必要です。そのために既修了者による現任者教育の機会を作ります。  
⇒今年度実施した教育者のためのワークショップ（ビギナーズコース）、臨床教員ワークショップには既修了者である臨床教員等の参加がありませんでした。
- ②本学部主催の作業療法士臨床実習指導者講習会を、令和7年度開催に向けて準備します。  
⇒令和7年度は作業療法士臨床実習指導者講習会を開催できませんでした。
- ③新規問題作成システムを形成的評価に活用するための具体的方策について教育推進室を中心に検討します。  
⇒問題作成システムの変更も含めた議論は学部内で展開されましたが、形成的評価に活用する具体的な方策については議論できませんでした。

### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①統括看護部および統括リハビリテーション技術部と連携して臨床教員の増員に関する広報を行いました。
- ②リハビリテーション学科言語聴覚療法学専攻および同視覚機能療法学専攻における臨地実習プログラムの構築を進めるとともに、臨床教員候補者の大学院進学および修学を支援しました。

- ③医療技術学科の認可申請が令和8年3月に完了しました。
- ④医療技術学科およびリハビリテーション学科の指定申請準備を開始しました。

**「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」**

- ①令和7年度には、看護師4名、理学療法士2名、作業療法士2名、言語聴覚士1名、視能訓練士2名、診療放射線技師4名、臨床工学技士1名、をそれぞれ臨床教員として採用しました。
- ②医療技術学科の認可申請が完了しました。
- ③医療技術学科およびリハビリテーション学科の指定申請準備を進めました。

**「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」**

- ①令和7年度には言語聴覚士および視能訓練士である臨床教員をさらに増員しましたが臨地実習指導体制という点で未だ充足していません。
- ②そのため、リハビリテーション学科言語聴覚療法学専攻および同視覚機能療法学専攻の臨地実習体制構築が未だ不十分です。
- ③歯科衛生士である臨床教員の確保が十分に進められていません。
- ④各臨床教員に対する教育者としての教育体制の構築が不十分です。

**「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」**

- ①各職種の臨床教員の増員に努めます。
- ②医療技術学科およびリハビリテーション学科の指定申請を完了します。

**「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」**

- ①言語聴覚士、視能訓練士、歯科衛生士である臨床教員の確保をさらに進めます。
- ②臨床教員に対し、教育者のためのワークショップ、問題作成ワークショップ等への参加を進めます。

**ウ. 学生の受入れ**

**「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」**

**<効果が上がっている点への発展計画>**

- ①受験生負担軽減のため、選抜Ⅰ期入試および選抜Ⅱ期入試における理科の出題範囲をすべて「基礎」の範囲までとするための方策を検討します。  
⇒令和8年度入試から一般選抜Ⅰ期入試および一般選抜Ⅱ期入試の理科の出題範囲を「物理基礎、化学基礎、生物基礎、から1教科選択」としました。
- ②各学科、特にリハビリテーション学科における指定校数をさらに増やします。  
⇒令和8年度入試では、看護学科で14校（増減なし）リハビリテーション学科理

学療法学専攻で 15 校（5 校増）、同作業療法学専攻で 20 校（10 校増）の指定校数でした。

＜改善を要する点への発展計画＞

- ①新学科・新専攻設置準備を継続するとともに、志願者層への調査や広報を展開します。  
⇒設置認可申請および指定申請に必要な受容性調査を実施し、各専攻入学定員を上回る入学意向数を確保することができました。
- ②附属病院でのオープンキャンパスを看護学科志願者および新学科・新専攻志願者層向けに開催頻度を増やします。  
⇒附属病院を活用した「病院見学型オープンキャンパス」を計 10 回実施しました。
- ③リハビリテーション学科作業療法学専攻内に志願者増加を検討するワーキンググループを設置して、作業療法学専攻に特化した広報を展開します。  
⇒リハビリテーション学科作業療法学専攻内に「マーケティングワーキンググループ」を設置し、作業療法学専攻に特化した広報を展開しました。

「2. 令和 6 年度の改善結果を踏まえた令和 7 年度の現状の説明」

- ①令和 8 年度一般選抜 I 期入試および一般選抜 II 期入試において理科の出題範囲を「物理基礎、化学基礎、生物基礎、から 1 教科選択」としました。
- ②令和 8 年度入試ではリハビリテーション学科理学療法学専攻および同作業療法学専攻で前年度よりも指定校数を増やしました。

「3. 令和 7 年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

- ①令和 8 年度入試では各学科・専攻とも志願者数が前年度よりも大きく伸びました。
- ②特にリハビリテーション学科作業療法学専攻では志願者数が大幅に増加しました。
- ③新学科・新専攻志願者の発掘促進のために、病院見学型オープンキャンパスを計 10 回開催し、新学科・新専攻志願者である高校 1 年生および高校 2 年生の参加を多く得ました。

「4. 令和 7 年度の現状に対する評価＜改善を要する点＞」

- ①病院見学型オープンキャンパスではリハビリテーション学科視覚機能療法学専攻および医療技術学科臨床工学専攻の志願者が伸び悩んでいます。

「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①令和8年度においても病院見学型オープンキャンパスを毎月実施します。また、見学主体ではなく職業内容を体験できるタイプのオープンキャンパスも複数回開催します。

「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①リハビリテーション学科視覚機能療法学専攻および医療技術学科臨床工学専攻の志願者向けに特化したオープンキャンパスを複数回実施します。
- ②リハビリテーション学科視覚機能療法学専攻および医療技術学科臨床工学専攻の志願者を発掘することに特化した高校訪問や模擬授業等を実施します。

エ. 学修成果の点検・評価

「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

- ①各学科の学生に対して、学部連携地域医療実習の重要性や意義等の指導を引き続き継続します。  
⇒学部連携地域医療実習の重要性や意義に関する指導を各学科オリエンテーション等で実施しました。

<改善を要する点への発展計画>

- ①次年度からの評価方法をさらに改善し、評価結果（点数）を期待しての履修、学修から本質的な幅広い教養の修得、生涯学習を目的とした履修方法の再検討を行い、カリキュラムに組み込みました。  
⇒学生教育委員との概ね毎月1回の定期的なミーティングを通じて、採用した評価方法やその意義、期待される効果等を学生にも説明して理解を得ました。

「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①学生教育委員を通じて、各学生の学修成果の点検、評価の方法や意義等の理解に努めました。
- ②学生教育委員との定期的なミーティングは、可能な限り事前に学生間で意見集約を行うように学生教育委員に依頼して実施しました。
- ③卒業試験および進級試験についてはあらかじめ設定した評価基準にしたがって厳密な評価を実施しました。

「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①各学科・各専攻から選出された学生教育委員から明確な学生意見を提供してもらい、原則的に対応可能な問題点は改善することに努めました。

②各学生教育委員は臨地・臨床実習等のやむを得ない理由を除き、ミーティングに出席できる体制を作りました。

#### 「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①進級試験および卒業試験の際に不合格ブロックの点検、確認を行う体制が不十分であり、各ブロックに属する学修内容の到達度をチェックする必要があります。
- ②進級試験および卒業試験の際の出題がその目的に合致しているか否かの点検、確認が各教員にのみ委ねられている点の再検討が必要です。

#### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①学生教育委員との日頃からの綿密な連絡体制のさらなる構築に努めます。

#### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①進級試験および卒業試験の評価基準および出題内容の再点検を行います。
- ②進級試験および卒業試験の不合格ブロックに属する学修内容の到達度を確認するとともに、到達度の低い学修内容を再度学修する体制を構築します。

(保健医療学部長 鈴木 久義)

### 1-5 富士吉田教育部

#### ア. 単位認定、卒業認定、修了認定

##### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案(再掲) およびその結果」

###### <効果が上がっている点への発展計画>

- ①専門的知識、技能の習得、習熟が強く求められる中で履修方法、評価方法に関する改革は学習者の学習意欲の涵養に強く寄与できたと考えます。  
⇒初年次全学部学生に対して実施し、学修への取り組み姿勢の本質的な改善に好影響をもたらしました。

###### <改善を要する点への発展計画>

- ①学生に提供する教養科目の選択肢を更に広く設定し、学習者の更なる知的探求心を刺激する教養科目の新設が必要と考えます。  
⇒新設教養科目を次年度から一つ開講するとともに、さらなる新設科目に関する検討を進めました。

##### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①最終評価に気を取られることなく、科目履修を行う姿勢が定着しつつありま

す。

「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①各選択教養科目担当者と学部連携必修科目担当者との間で、どのような学生を育てたいかという共通認識を確立するように努めることで、体系的な教育の構築が可能となっています。

「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①一部の学生については、受講態度や出席率等から判断して、取り組み姿勢が不十分であることが指摘されています。

「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①富士吉田教育部で現在進行しているカリキュラム改革とその中での選択教養科目の位置づけをより明確に担当者に発信し、共通認識をより強固なものにする必要があります。

「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①選択教養科目を学修する意義について、より明確に周知することが必要であると考えます。

イ. 教育課程及び教授方法

「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

- ①昨年度に比較して総括表カジノ不合格者が極めて少なくなっていることから、本取り組みを継続することで、学習目標を全学生が達成できるよう、更なる徹底を行います。
- ⇒オリエンテーション時に、シラバスに記載されている学修目標や学修成果について丁寧に説明したことで、どの科目についても学修に対する指針が得られやすくなる効果がありました。

<改善を要する点への発展計画>

- ①少数ではありますが、学習すべき目標、目的を見誤り、総括評価時の不合格学生が発生している事実を真摯に受け止め、きめ細やかな確認、形成評価を行います。
- ⇒成績発表時に、個人成績だけではなく科目全体の評価に関する情報を周知するようにし、学習意欲の向上をはかりました。

「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①各科目の学修意欲の向上および要支援学生への支援体制の強化については、一定の成果があったと考えます。

「3. 令和7年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

- ①担当者に試験評価時の成績評価の平均点に関する基準を示すことや、要支援学生への先進的な取り組み事例を紹介することで、授業で取り上げる内容の難易度を最適化する姿勢が定着しつつあります。

「4. 令和7年度の現状に対する評価＜改善を要する点＞」

- ①授業評価アンケートや学事部主導の学事アンケートを体系的に評価して、その結果を次年度の授業改善につなげるための具体的な方策が不足していると感じます。

「5. 評価を踏まえた発展計画＜効果が上がっている点への発展計画＞」

- ①授業内容の難易度の最適化については、すでに確立された方法の共有も含めて、授業間での情報共有をさらに進めていきます。

「6. 評価を踏まえた発展計画＜改善を要する点への発展計画＞」

- ①授業評価アンケートを参照した上で科目責任者に提出を求めている授業内容改善計画書の内容について、より実効性の高い事例を抽出して共有する工夫が必要です。

ウ. 学修成果の点検・評価

「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

＜効果が上がっている点への発展計画＞

- ①学生の基礎学力の把握、不足学力の補填に関しては入学直後から行うことが重要であり、今後も専門科目の履修を意識した基礎学力の充実を目的にカリキュラム構成の工夫を重ねていきます。  
⇒基礎学力の把握については、基礎学力試験を実施して、その結果を学生にフィードバックすることで、学修計画の立案や学習意欲の向上に資することが出来ました。

＜改善を要する点への発展計画＞

- ①基礎学力が十分でない学生に多く認められる学習技法の未習熟さを早い時期に改善し、中等教育型学修技法からの早期脱却、高等教育型の学修手法の早期習得を目指して、新たな学習支援方法の模索が必要と考えます。

⇒要支援学生への取り組みをより強化し、生物系科目および英語系科目については組織的かつ体系的な支援を実施しました。

## 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①学習意欲の向上、要支援学生への組織的な支援の継続により、各科目の学修成果が確実に得られるように引き続き取り組んでいます。

## 「3. 令和7年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

①基礎学力試験および各科目成績について、平均点・得点分布に関する情報をフィードバックすることで学習意欲が向上しています。また、生物系科目・英語系科目についての支援を継続した結果、基礎力不足の学生の到達度が向上しています。

## 「4. 令和7年度の現状に対する評価＜改善を要する点＞」

①準備が不足している内容についての授業を行う科目について、学生の現状把握を精密化する必要があります。

## 「5. 評価を踏まえた発展計画＜効果が上がっている点への発展計画＞」

①今後、入学時の基礎学力がより多様化するため、各科目の理解度、到達度を全体として正確に把握することが必要であり、各学部教育委員と連携してその方策を検討していきます。

## 「6. 評価を踏まえた発展計画＜改善を要する点への発展計画＞」

①基礎学力が不足している学生の情報を各科目で共有するための仕組みを検討していきます。

(富士吉田教育部長 倉田 知光)

## 【研究科】

### 1-6 医学研究科

#### ア. 単位認定、卒業認定、修了認定

## 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

＜効果が上がっている点への発展計画＞

①学位取得までのフローや学位取得の利点を具体的にわかりやすく説明し、学部生を含む潜在的進学希望者が抱いているキャリアの不安や疑問を解消します。  
⇒7月の「大学院なんでも相談会」と「マルチドクタープログラムなんでも相談会」で解消に努めました。

- ②修了延期となっている大学院生を対象として、研究分野責任者と協力した個別の研究状況確認等による研究進捗管理の充実を図ります。  
⇒在学年限が迫っている学生を優先的に抽出し、研究分野責任者と協力して個別の研究状況確認を実施しました。
- ③休学制度の周知と活用を継続し、さらなる修了延期者数の減少に努めます。  
⇒大学院入学者オリエンテーション（4月、10月）と「大学院なんでも相談会」（7月）で周知しました。

#### <改善を要する点への発展計画>

- ①特別奨学金制度とマルチドクタープログラムを併用しての大学院進学を促進するために、説明内容の一層の充実を図ります。  
⇒「マルチドクタープログラムなんでも相談会」と「同説明会」を双方向性で実施しました。
- ②修了延期となっていない大学院生を対象として、研究進捗管理の新しい方法を検討します。  
⇒進捗管理方法の改善に向け、課題と改善の方向性を検討し、次年度以降の実施に向けた準備を進めました。

### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①令和6年度同様に令和7年度も在学年限超過による除籍者はなく、修了延期者数も令和6年3月1日時点59名、令和7年同日38名、令和8年同日32名と減少しています。
- ②修了者数（春季・秋季合計）は令和5年度34名、6年度46名、7年度41名で推移し、早期修了者も同1名、5名、4名と3年連続で輩出しました。
- ③大学院入学者オリエンテーション（4月、10月）や「大学院なんでも相談会」（7月）等を通じて休学制度や早期修了の利点・要件を周知し、休学制度の活用が進んでいます。
- ④大学院課と人事課の連携のもと3・4年次休職制度を開始し、資料「大学院医学研究科各種制度について」の配布を通じて周知を図りました。
- ⑤修了延期となっていない大学院生も対象とした研究進捗管理の新たな方法について、課題整理と改善の方向性を検討し、導入準備を進めました。

### 「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①除籍者が2年連続で出ず修了延期者数も減少しているのは、研究分野責任者と大学院課の連携による個別の進捗確認体制と、休学制度の定着・活用が主たる要因と判断します。
- ②修了者数は令和6年度に46名へ増加し7年度も41名を維持しており、休学制

度の活用や研究分野責任者との連携強化が修了促進に寄与していると判断します。

- ③3・4年次休職制度の開始により、研究に専念できる環境整備が進んだと考えられます。
- ④早期修了者が3年連続で輩出されており、オリエンテーションや各種説明会・相談会での早期修了の利点と要件の周知が成果につながっています。

#### 「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①修了年限内での修了をさらに促進するため、修了延期に至っていない大学院生も含めた研究進捗管理の仕組みを構築する必要があります。

#### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①在学年限が迫っている学生の優先的な抽出と、研究分野責任者との連携による個別の研究状況確認を継続します。
- ②休学制度の成果を踏まえ、入学希望者および新規入学者に対する情報提供をさらに充実し、制度活用を一層促進します。
- ③3・4年次休職制度を広く周知し、研究と臨床の両立を支援する学修環境の充実に努めます。
- ④早期修了のメリットと基準の周知を継続し、さらに多くの早期修了者の輩出を目指します。

#### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①修了年限内での修了を促進するため、全大学院生を対象とした研究進捗管理の新たな方法を検討・導入します。

### イ. 教育課程及び教授方法

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

- ①資格基準に基づき、適切な研究指導教員の配置を継続的に行います。  
⇒大学院研究指導資格申請書を用い、適切な研究指導教員の配置を継続的に行いました。
- ②学内、学外の専門家の継続的な協力を得ながら、急速に進化するAI分野に対応します。  
⇒学外専門家によるオンライン授業で、生成AIの研究活用をテーマに双方向講義を行いました。
- ③研究所教育職員による指導の現状を調査し、さらなる拡充を図ります。  
⇒研究所教育職員の研究領域調査は継続しましたが、指導活用状況の調査は未実

施でした。

④英語演習授業の内容・方法の点検・評価を行います。

⇒英語演習授業の内容・方法の点検・評価は実施に至りませんでした。

<改善を要する点への発展計画>

①共通科目の内容を点検し、最新の研究動向や社会的ニーズを反映させるよう、定期的な見直しを行います。

⇒共通科目を点検し、授業担当者に更新を依頼し、さらに生成 AI の研究活用のオンライン授業を導入しました。

②各研究所の教育職員に兼担制度の活用を促すことで医学研究科における研究テーマの選択肢拡大を図り、大学院志願者数の増加を図ります。

⇒兼担制度の活用が浸透してきており、医学研究科ホームページにて研究テーマを広く周知しました。

## 「2. 令和 6 年度の改善結果を踏まえた令和 7 年度の現状の説明」

①教育職員に対する研究指導資格認定が、採用・昇任時に確実に実施される体制が定着しました。

②共通科目の内容について授業実施者および学外の専門家と点検を行い、特に「研究倫理・教育・AI」を最新の知見に基づき更新しました。

③入学希望者に対して学内研究所等での研究指導が可能であることを周知し、研究テーマの選択肢の拡大を図りました。

④兼担制度の活用は着実に浸透しており、医学研究科教授会において研究所の教育職員が指導に参画した学位論文がコンスタントに審議・承認されています。

⑤対面による 5 コマの英語演習授業を前期・後期それぞれ 1 クール、主として 1 年生を対象に開講しました。

## 「3. 令和 7 年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

①研究指導資格認定が確実に実施されているのは、人事課・大学院課・医学研究科の三者が採用・昇任時に適切に連携しているためと判断します。

②共通科目「研究倫理・教育・AI」の更新においては、医療 AI 研究に精通した教育職員と学外の生成 AI 専門家の協力を得ており、教育内容の質的向上に寄与しています。

③兼担制度を通じて研究所の教育職員が学位論文指導に参画することで、研究テーマの多様性の拡大につながっています。

## 「4. 令和 7 年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

①共通科目の内容は今後も最新の研究動向や社会的ニーズを反映し、継続的にアップデートしていく必要があります。

- ②各研究所に所属する教育職員の兼担制度の活用には、さらに促進する余地があります。
- ③英語演習授業の内容・方法の点検・評価が未実施のままであり、早期に着手する必要があります。

「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①資格基準に基づく適切な研究指導教員の配置を継続します。
- ②学内・学外の専門家の協力を得ながら、急速に進化する AI 分野に対応し、共通科目の内容に反映します。
- ③研究所の教育職員による指導の活用状況を調査し、さらなる拡充を図ります。

「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①共通科目の内容を定期的に点検し、最新の研究動向や社会的ニーズを反映した見直しを行います。
- ②研究所の教育職員に対し兼担制度の活用を促し、医学研究科での研究テーマの選択肢を拡大します。
- ③英語演習授業の内容・方法の点検・評価を実施します。

ウ. 学生の受入れ

「1. 令和 6 年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

- ①共通科目の内容について、最新の学術動向を反映した継続的なアップデートを推進します。

⇒学内の教育職員、外部の専門家とともに、共通科目の内容の継続的なアップデートを行いました。

- ②秋季入学者の中核を占める臨床研修医・専攻医に対し、大学院進学の評価と意義を積極的に発信し、優秀な人材確保に努めます。

⇒研修医オリエンテーションと専攻医オリエンテーションにて臨床研修と学位取得までのフローを説明しました。

- ③休学制度の成果を踏まえ、入学希望者および新規入学者に対するさらなる情報提供の充実を図り、制度活用を促進いたします。

⇒大学院オリエンテーションや資料配布で周知しました。

- ④令和 7 年度より開始する 3・4 年次休職制度について広く周知し、研究と臨床の両立を支援する先進的な学修環境の実現に努めます。

⇒大学院課・人事課と連携して制度を開始し、大学院オリエンテーションや資料配布で周知しました。

＜改善を要する点への発展計画＞

- ①マルチドクタープログラムの周知方法を見直すとともに、説明会の内容を充実させ、履修者数の増加を目指します。  
⇒従来の説明会に加え、「マルチドクタープログラムなんでも相談会」を新設し、履修者増加を図りました。
- ②春季入学の多くを占める医学部卒業直後の入学者増加を図るため、医学部在学中の学生へのアプローチを強化します。  
⇒従来の大学院説明会を双方向の「大学院なんでも相談会」とし、活発な質疑応答で情報提供を強化しました。

「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①秋季志願者数は令和5年度5名、6年度18名、7年度20名と増加、春季は同40名、36名、42名と横ばいです。令和8年度入学の志願者は秋季20名、春季Ⅰ期16名、Ⅱ期26名でした。
- ②入学者数（春季・秋季合計）は令和5年度49名、令和6年度58名、令和7年度56名で推移しており、令和6年度に増加した水準を維持しています。
- ③マルチドクタープログラム試験の志願者数は、秋季で前年の8名から5名に減少しましたが、次年度から学部2～6学年を対象を拡大する春季で2名から27名に増加しました。
- ④4月の研修医・専攻医オリエンテーションで臨床研修と大学院並行履修のフローを説明しました。また「大学院説明会」を「大学院なんでも相談会」にリニューアルしました。
- ⑤「マルチドクタープログラムなんでも相談会」（7月）と「マルチドクタープログラム説明会」（1月）で進学希望者と活発な質疑応答を行い、ホームページも活用して幅広い層への周知を進めました。

「3. 令和7年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

- ①秋季入学志願者の多くは研修医・専攻医であり、4月のオリエンテーションでの説明が志願者数増加に寄与した一因であると考えられます。
- ②入学者数は令和6年度に49名から58名へ増加し、令和7年度も56名と同水準を維持し、説明会・相談会のリニューアルや多様な情報発信の取組みの効果と考えられます。
- ③マルチドクタープログラム春季試験の志願者数が飛躍的に増加した背景には、説明会・相談会での充実した説明に加え、対象学年の拡大が効果を発揮したものと考えられます。

「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

①春季入学の志願者数は横ばいで推移しており、春季入学の多くは医学部卒業直後の学生であることから、在学中のより早い段階から働きかけることが重要です。

「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

①秋季入学者の中核を占める臨床研修医・専攻医に対し、大学院進学の評価と意義を積極的に発信し、優秀な人材の確保に努めます。

②特別奨学金制度とマルチドクタープログラムの併用による大学院進学を促進するため、説明会の充実を継続するとともに、マルチドクタープログラムそのものの拡充を図ります。

③マルチドクタープログラムを経た大学院入学から学位取得・専門医取得までの流れやキャリアパスをわかりやすく提示し、キャリアへの不安や疑問の解消に努めます。

「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

①医学部在学中の早い段階から大学院進学に関する情報発信の機会を増やし、春季入学志願者の拡大を図ります。

エ. 学修成果の点検・評価

「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

①マルチドクタープログラムの成果を積極的に発信し、履修人数の増加と取得単位数のさらなる向上を目指します。

⇒マルチドクタープログラム関連の情報を積極的に発信し、マルチドクタープログラム志願者数が増加しました。

②令和2年度以降の入学者より3年次、4年次は研究に専念する体制が整備されており、休職制度の周知を含め標準修業年限内での修了を促します。

⇒大学院課・人事課と連携して制度を開始し、大学院オリエンテーションや資料配布で周知しました。

③在学年限を超える可能性のある7年目、8年目の学生については、研究分野責任者との連携のもと、期限内学位論文提出に向けた支援体制を強化します。

⇒在学年限が迫っている学生を優先的に抽出し、研究分野責任者と協力して個別の研究状況確認を実施しました。

④早期修了のメリットと基準を周知することにより、さらに多くの早期修了者の輩出を目指します。

⇒大学院およびマルチドクタープログラム関連のオリエンテーション・説明会・相談会において周知しました。

＜改善を要する点への発展計画＞

- ①医学研究科運営委員会の機能と役割の明確化に向けた具体的検討を進めます。  
⇒医学研究科運営委員会の機能を検討しましたが、委員会規則の再整備には至らず、今後の課題としました。
- ②修了生へのアンケート調査を実施し、教育プログラムの有効性と学修成果の評価を行い、さらなる教育改善に活用します。  
⇒修了生を対象に、教育内容・指導体制・生活全般に関するアンケート調査を開始しました。

「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①マルチドクタープログラムの履修者は32名（令和7年度新規履修者7名を含む）であり、令和8年4月には新たに27名が履修を開始する予定です。
- ②マルチドクタープログラム修了生16名中、共通科目上限6単位の取得者は7名（44%、例年半数前後）、うち2名は専攻科目上限4単位を含む10単位に到達しました。
- ③大学院早期修了者は令和5年度の2名、令和6年度の6名に続き、令和7年度は5名を輩出しました。
- ④大学院修了者数（春季・秋季合計）は令和5年度34名、令和6年度46名、令和7年度41名であり、在学年限を超えたことによる除籍者はありませんでした。
- ⑤令和7年度秋季の修了者より大学院修了生アンケートを開始しました。

「3. 令和7年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

- ①マルチドクタープログラムの成果を積極的に発信してきたことが、履修者の増加と制度活用の促進に寄与していると考えられます。
- ②大学院早期修了者が3年連続で輩出されており、オリエンテーションや説明会・相談会を通じた早期修了の利点と要件の周知が着実に成果を上げています。
- ③大学院修了者数は令和6年度の46名に続き、令和7年度も41名と同水準を維持しており、除籍者も生じていないことから、修了への支援体制が機能していると判断します。
- ④大学院修了生アンケートを開始したことにより、教育プログラムの有効性を体系的に評価する基盤が整いました。

「4. 令和7年度の現状に対する評価＜改善を要する点＞」

- ①医学研究科運営委員会の機能と役割の明確化が引き続き課題であり、委員会規則の再整備に着手する必要があります。

## 1. 教育【研究科】

1-6 医学研究科/

1-7 歯学研究科

②大学院修了生アンケートは開始段階にあり、回答の蓄積と分析結果の教育プログラムや指導体制の改善への反映が今後の課題です。

### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①マルチドクタープログラムの成果を積極的に発信し、履修人数の増加と取得単位数のさらなる向上を目指します。
- ②大学院早期修了のメリットと基準の周知を継続し、さらに多くの早期修了者の輩出を目指します。
- ③大学院修了生アンケートを継続し、教育プログラムの有効性と学修成果の評価を行い、さらなる教育改善に活用します。

### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①医学研究科運営委員会の機能と役割の明確化に向け、委員会規則の再整備を行います。
- ②大学院修了生アンケートの集計・分析を進め、その結果を教育プログラムや指導体制の改善に反映します。

(医学研究科長 泉崎 雅彦)

## 1-7 歯学研究科

### ア. 単位認定、卒業認定、修了認定

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

##### <効果が上がっている点への発展計画>

- ①中間報告会の評価項目をブラッシュアップし、より積極的に評価教員の研究計画への参画を図ります。  
⇒主査・副査（予定者）による適切な研究進捗状況の評価を実施しました。
- ②教室紹介のWebコンテンツを活用することより学外へも広く大学院の募集を行います。  
⇒各講座・部門が研究内容を紹介する動画または資料を作成し、学内外に配信しました。
- ③乙号の申請者の研究環境を整備します。  
⇒乙号の申請者状況は多岐にわたるため、研究環境整備には至りませんでした。

##### <改善を要する点への発展計画>

- ①学部学生の研究入門においてMDプログラム参加者、ひいては大学院入学者の増員につなげます。  
⇒研究入門の参加者は2年次5名、3年次5名となり昨年度より増加しました。

②綿密な研究計画を立てるとともに、中間報告における提案を積極的に受け入れ早期投稿を行うことにより修了延期となることがないように指導します。

⇒修了延期者は昨年度同様、少数に留まりました。

## 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①修了延長者は1～2割程度です。

②中間報告会を継続しています。

③大学院説明会など、大学院生増加に向けた取り組みを継続しています。

## 「3. 令和7年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

①動画配信や学部生への説明などにより、大学院説明会の方法と内容が改善されました。

②アンケートから、中間報告会は大学院生の研究促進に役立っていることがわかりました。

③選択科目の分類により、大学院生の教育の質が向上しました。

## 「4. 令和7年度の現状に対する評価＜改善を要する点＞」

①配信した動画の視聴数を増加させる必要があります。

②アンケート結果を精査し、問題点を検討する必要があります。

③大学院生の研究や社会状況に則して、カリキュラムをさらに改善する必要があります。

## 「5. 評価を踏まえた発展計画＜効果が上がっている点への発展計画＞」

①大学院説明会の内容や方法を改善します。

②中間報告会の実施方法や評価方法を検討します。

③選択科目をさらに増やします。

## 「6. 評価を踏まえた発展計画＜改善を要する点への発展計画＞」

①配信動画の内容や配信方法が適切か否か検討します。

②アンケート内容を再検討します。

③研究倫理などを含め、カリキュラムを再検討します。

## イ. 教育課程及び教授方法

### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

＜効果が上がっている点への発展計画＞

①研究入門を介してMDプログラムへの参加を促し、学部学生の研究志向を醸成することにより大学院の志願者の増加を図ります。

⇒研究入門および歯学部2, 3, 4年生のオリエンテーションにおいてMDプログラ

ムについて紹介しました。

②若手の研究指導教員の研究環境を整備することにより、より学生を指導しやすい環境を整えます。

⇒新規の研究機器の導入、研究費獲得促進を実施しました。

③選択科目の内容の見直しをさらに進め、より効率よく学生が学修できるよう整えます。

⇒選択科目を内容に基づいてカテゴリーに分類し、履修方法を改善しました。

#### ＜改善を要する点への発展計画＞

①選択科目を基礎・臨床に分類し、更に細分化することにより、学生が選択しやすいように整理します。

⇒選択科目を内容に基づいて分類し、学生の知識向上を図りました。

②各教室で受け入れ可能な学生数を調査することにより、実際に研究を指導する学生数の適正化を図ります。

⇒調査を実施し、現在データを整理・解析中です。

③学生個別にアンケート調査を実施し、臨床と研究に従事する時間の割合に極端な偏りがある場合は必要に応じて指導を行います。

⇒アンケート調査を実施しました。現在、整理・解析中です。

#### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①修了延長者は約1割でした。

②研究機器の導入などにより研究指導環境が改善されました。

③カリキュラムおよび開講科目を再検討しました。

#### 「3. 令和6年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

①中間報告会などの実施により、修了延期者数は少なく抑えられています。

②開講科目が増加し、科目の選択肢の幅が広がりました。

③新たな研究機器の導入により研究の質が向上しました。

#### 「4. 令和7年度の現状に対する評価＜改善を要する点＞」

①各研究分野における大学院生の指導状況を把握する必要があります。

②臨床と研究の時間的なバランスなど、研究状況の調査と解析が必要です。

③上條賞などの業績評価方法について再検討が必要です。

#### 「5. 評価を踏まえた発展計画＜効果が上がっている点への発展計画＞」

①中間報告会に使用する資料や運営などの改善に取り組みます。

②共通科目、選択科目および必修科目の在り方について再検討します。

③新規研究機器の導入に向けて、研究科内で検討します。

#### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

①大学院生の指導状況について調査し、そのデータを解析します。

②大学院生へのアンケート調査を継続します。

③上條賞などの評価表の内容やコンセプトについて再検討します

### ウ. 学生の受入れ

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

①学部生、保護者、学内外の研修医を対象とした大学院紹介を継続します。

⇒学部生、研修医のオリエンテーション、学生支援会で大学院紹介を実施しました。

②パンフレットやYouTubeの内容を見直し、大学院の特色が読者・視聴者に直感的に伝わりやすくします。

⇒新たに各部門・講座の紹介動画を作成し、配信しました。

<改善を要する点への発展計画>

①学外からの志願者・入学者数の増加を図るために、Youtubeなどの配信内容や配信対象者を見直します。

⇒Youtubeでの配信を実施しました。

②外国語試験の設問の難易度と量を見直します。また、試験時間を短縮します。

⇒大問を5問から3問に減らし、試験時間を3時間から2時間に短縮しました。

#### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①大学院生の増加を目的とした説明会や情報配信を実施しています。

②外国語試験の内容を英訳、和訳、長文読解、英作文とし、能力を総合的に評価しています。

#### 「3. 令和6年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

①マルチドクタープログラムの履修を2年次から可能としました。

②入試の採点・配点基準を明確にしました。

③学部生のオリエンテーションで大学院を紹介しました。

#### 「4. 令和6年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

①マルチドクターが2年次より履修可能なことを学生は知りません。

②入試問題とその模範解答を公表しなければなりません。

③学部生以外を対象とした大学院説明会が必要です。

**「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」**

- ①マルチドクタープログラムの履修状況を調査します。
- ②入試の試験問題と解答に瑕疵が無いように専門家のチェックを検討します。
- ③大学院進学の相談窓口を開設します。

**「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」**

- ①1年次または2年次からマルチドクターについて学生に周知します。
- ②入試問題とその模範解答の公表に向けた準備を開始します。
- ③学部生だけでなく、研究医を対象にした説明会を開催します。

**エ. 学修成果の点検・評価**

**「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」**

**<効果が上がっている点への発展計画>**

- ①中間報告会を継続し、主査・副査だけでなく一般の教員による研究のアドバイスを促進します。  
⇒中間報告会に主査・副査だけでなく、教員や大学院生も参加しました。
- ②大学院修了生へのアンケートを継続するとともに、質問内容について見直します。  
⇒アンケートを実施し、質問内容も確認・検討しました。
- ③アンケートの集計結果から、大学院運営の課題を抽出します。  
⇒経済的に困難な生活を送っている学生が複数いることがわかりました。

**<改善を要する点への発展計画>**

- ①大学院生の幅広い研究視野を養うために、選択科目をカテゴリ一別に分類し、複数のカテゴリから選択するよう履修要項を改めます。  
⇒履修科目を分類し、履修要項を改めました。
- ②歯学研究科のカリキュラムポリシーに研究倫理の学修を追加します。  
⇒現在検討中であり、次年度に追加する予定です。
- ③全ての科目において成績評価（優・良・可・不可）実施します。  
⇒現在検討中であり、次年度に実施する予定です。

**「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」**

- ①3月の大学院教授会では学位論文の審査に長時間を要しています。
- ②中間報告会での研究進捗状況の点検・評価を継続しています。
- ③単位の認定に評価をつけていない科目が多数あります。

「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①学位審査までに、中間報告会、学士会発表、主査・副査による段階的なプロセスを経ており、適正な学修成果の点検が行われています。
- ②英語による研究プレゼンテーションの授業（必修）を継続しています。
- ③修了延期者は少数に留まり、ほとんどが1年以内に修了しています。

「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①大学院教授会での学位審査が形骸化しています。
- ②成績評価（優・良・可・不可）が多くの科目で実施されていません。
- ③大学院修了者の表彰が上條賞しかありません。

「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①中間報告会や学士会をさらに活性化させる工夫を検討します。
- ②英語の授業や中間報告会などで大学院生のプレゼンテーション能力を高めます。
- ③学位論文の質が低下しない範囲で期限内修了を目指します。

「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①教授会での学位審査のあり方やコンセプトについて検討します。
- ②全ての科目において成績評価を実施するための検討を行います。
- ③上條賞以外の表彰等の可能性について検討します。

（歯学研究科長 高見 正道）

1-8 薬学研究科

ア. 単位認定、卒業認定、修了認定

「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

- ①社会人大大学院生を含むすべての大学院生に対し、研究スケジュールの策定支援を個別化・継続化することで、研究の遅延防止と早期修了をより確実に図る体制を整備します。  
⇒臨床研修薬剤師の大学院生を対象としてきた研究スケジュール作成や進捗確認の見直しを行い、令和8年度より大学院生全員を対象とする準備を進めました。
- ②学士会発表から1年以内申請の徹底に加え、論文採択の進捗に応じた柔軟な申請調整を検討し、事務的・技術的支援のさらなる充実を図ります。  
⇒大学院オリエンテーションや研究科教授会にて学士会発表や学位論文申請について周知することで審査準備や手続きが円滑に行われるようになりました。

- ③3年次後半の個別面談を前倒しし、2年次以降に段階的な進捗確認を行うことで、遅れの早期発見と的確な支援を実施する仕組みを導入します。  
⇒3年次の進捗確認に加えて、2、3年次にアンケート形式の進捗確認を行い、研究活動の遅れや研究活動に関する意見を把握できるようになりました。
- ④大学院生と指導教員とのフィードバック内容を記録・共有する仕組みを整え、継続的かつ効果的な指導の実施とその質の評価を可能とする体制を構築します。  
⇒指導の記録・共有する仕組みの構築について検討を進めました。研究内容に関わることが含まれるから、いくつかの今後解決すべき問題点が挙げられました。
- ⑤MDプログラムや奨学生制度の情報提供に加え、大学院生との交流の機会を増やすことで、大学院進学希望者の進学意欲をさらに高めるとともに、具体的な準備への支援を充実させます。  
⇒大学院に在籍する臨床研修薬剤師も同席して、学部生対象の進学説明会を複数回実施し、大学院生生活についての具体的なイメージを持つ機会としました。

<改善を要する点への発展計画>

- ①学位取得の遅れを防ぐため、大学院生と指導教員に対する進捗管理の重要性を周知し、定期的な進捗確認と記録の徹底、指導計画の見直しを含めた制度的支援を強化します。  
⇒3年次に5分程度のプレゼンテーションを実施し、進捗状況を大学院運営委員会にて精査しました。緊急に指導見直しを要する大学院生はおりませんでした。
- ②研究時間が限られる社会人大大学院生に対しては、入学初期に研究計画の立案を支援し、修了に向けた具体的なマイルストーンを早期に設定できるよう、個別指導と運営委員会による伴走型サポート体制を構築します。  
⇒臨床研修薬剤師の大学院生に対して研究スケジュール作成を徹底し、定期的に確認する事により、大学院生が自身の進捗について考える機会となりました。
- ③研究が停滞している大学院生に対しては、個別面談の実施や追加的な研究支援策を講じることで、研究の再始動を促し、修了可能性の向上を図ります。  
⇒入学時に研究スケジュールを作成することで、1~2年次の研究活動が活性化し、著しく研究活動が遅れる大学院生が見られなくなりました。
- ④制度の周知を徹底するために、学部生を対象とした説明会・相談会を定期的で開催し、申請時期や準備内容に関する情報提供・個別指導を通じて、申請機会の逸失を防ぐ体制を整備します。  
⇒大学院進学と進学後のキャリア形成について、場合分けをした説明コンテンツを作成し、学生の将来設計に合わせた大学院進学を提案しました。
- ⑤大学院4研究科合同セミナーの再開について、その可能性を探ります。

⇒研究科主催セミナーを複数回実施しました。特に、昭和医科大学学会や薬理科学研究センターなどの研究センターと連携したセミナーの開催が増えました。

## 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①令和7年度は19名が博士号(甲)、5名が博士号(乙)を取得しました。このうち11名の大学院生が学位(甲)を修業年限内で取得しました。
- ②MDプログラム履修希望者への試験を行い、令和7年度秋季には4年生5名、令和8年春季には4年生4名、3年生10名が合格しました。
- ③臨床研修薬剤師の大学院生2、3年生次に研究進捗アンケートを実施しました。顕著に研究が遅れている大学院生は認められませんでした。
- ④大学院3年次に研究進捗を確認するための中間報告を実施することにより、大学院生が修了に向けた準備を強く意識するようになりました。

## 「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①研究スケジュール作成により、1～2年次に全く研究活動が進まない、あるいはテーマが設定できない大学院生は認められなくなりました。これは研究スケジュールを大学院生と指導教員が共同で作成しているためです。
- ②MDプログラム履修希望者が増加することにより、大学院進学後に受講の負担が軽減されました。これは、臨床研修や大学院研究活動により集中することに繋がりました。
- ③令和7年度に薬学研究科としては初めてMDプログラムの履修による早期修了者が生まれました。学部在籍時から大学院での研究活動に向けた準備をすることの重要性とメリットが示されました。

## 「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①大学院進学に向けて用意されているシンシアー奨学生制度や特別奨学生制度の応募者が減少しています。
- ②大学院に進学せず特別研究生として学位(乙号)を目指すプログラムがスタートしたことから、臨床研修薬剤師の大学院進学者が減少する傾向にあります。
- ③4年次の学位申請時に、論文投稿中(採択前)のため学位審査を受けることができない大学院生が数名認められました。
- ④本学以外の大学からの大学院進学者は臨床研修薬剤師を含めて7名と少なくなっています。

## 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①令和8年度入学者より、全ての大学院生に対して、研究スケジュールの作成を

必須化し、大学院生と研究指導教員が共通の認識の下で研究活動が進められるようにします。

- ②大学院 2～3 年次に実施している研究進捗アンケートおよびプレゼンテーションを全ての大学院生を対象として実施します。
- ③MD プログラムの履修が 2 年次から開始となったことから、低学年の学部生に対しても MD プログラムの有用性を訴求します。併せて、2～3 年生の履修者専用のプログラムを立案し、早期より学部生の研究マインドを創成します。
- ④MD 履修者の早期修了制度を円滑に進めるために、早期修了要件について見直しを行い、基準を設けて運用をします。

#### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①シンシアー奨学生制度や特別奨学生制度の目的とその制度について薬学生に十分な説明を行い、将来のキャリア形成に役立ててもらいます。
- ②大学院進学による学位（甲号）取得と、特別研究生として学位（乙号）を目指すプログラムの目的と差異をきちんと訴求し、大学院進学者および臨床研修修了生が適切な選択ができるようにします。
- ③2 年次の学位申請までに論文採択が得られないケースがあることを大学院生に十分説明すると共に、医学誌によって採択までの時間が異なることを研究指導教員に説明し、投稿先の選択を慎重に行うよう指導します。
- ④本学以外から大学院への進学希望者を対象とした説明コンテンツの充実と、希望者への個別対応を実施し、積極的な大学院進学を促します。

### イ. 教育課程及び教授方法

#### 「1. 令和 6 年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

##### <効果が上がっている点への発展計画>

- ①大学院進学に関して、MD プログラム履修が効果的であることを具体的に示すために、これまでの履修生からの意見や情報収集を行い、今後の広報活動の参考とします。  
⇒MD プログラムを履修生からの「入学後の講義負担が軽減されるメリットが大きい」との意見が多数寄せられたことから、これを広報活動に活用します。
- ②令和 6 年度で 3 年目を迎える研究進捗確認制度について、令和 7 年度が完成年度となるため、大学院 4 年生からの本制度に関する意見を聴取します。  
⇒修了を迎える大学院生からは進捗確認が学位取得に役立ったとの意見が多く寄せられたことから、その効果をより高めるために時期や進捗確認方法についての検討を重ねます。
- ③学位論文作成時のオーサーシップの重要性について、大学院生の理解が得られていますが、定期的にその重要性や意義、ルールなどについて再確認をする必

要性を含めて検討します。

⇒大学院入学時のオリエンテーションなどで、オーサーシップや研究倫理の重要性について繰り返し説明を行うと共に、学位申請時に確認を行います。

④TA 制度については、終了時に実績報告書とアンケートによる確認を行っていますが、教育職員からの評価や指導を受けた学部学生からの意見聴取は行われていないため、その必要性について検討します。

⇒TA を採用した科目責任者からは、採用について概ね高い評価を得ておりますが、大学院生の教育目的としての評価方法についてはさらなる検討が必要です。

⑤SURAC が企画する大学院生を含めた研究サポートについて周知を続けるとともに、修了後本学の教育職員への採用予定者（特別奨学生や助教（病院直属）など）に対しては、若手研究者向けの公的研究費（科研費スタートアップ支援など）への申請セミナーについても参加を推奨します。

⇒SURAC が実施する「大学院カフェ」には多くの大学院生、教育職員が参加しています。これらを積極的に利用することを引き続き推奨していきます。

#### <改善を要する点への発展計画>

①MD プログラム履修生に対して、研究と輪講の単位をどのようなスケジュールで取得することが有効であるか、具体例を示して説明します。

⇒MD プログラムにおける単位履修のコツを説明会等で紹介していますが、より具体的なプランを掲示する必要性について、引き続き検討します。

②大学院 3 年時に実施する研究進捗確認のプレゼンテーションにおいて、確認項目やフィードバックについて担当者間で共通できるような仕組みを検討します。

⇒進捗確認は研究内容ではなく、スケジュールに従って進められているかを主に評価しています。基準についてはその都度大学院運営員会にて討議しています。

③学位申請時に、申請に含まれない研究成果公表の有無を確認します。加えて、そのオーサーシップについても確認します。

⇒学位論文と直接関係しない研究業績についても確認をしておりますが、該当する事例はほとんどありません。継続して確認を行います。

④TA の採用に関して、選考理由や採用に偏りが認められないか、現状把握に務め、対応策の必要性についても検討します。

⇒TA 採用について、事前に大学院運営員会で確認を行っており、大きな偏りが無いように配置しています。大学院生がより高い教育スキルを身につけるような配置を工夫します。

⑤SURAC が提供する研究サポートについて、利用した大学院生から意見を聴く機

会を設けます。

⇒一部の大学院生に対して、有用性を確認しております。大学院生の交流の機会や統計解析についてのサポートの評価が高く、今後も利用を推奨します。

## 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①MD プログラム履修生が講義の単位だけでなく研究、輪講の単位を取得する数が増加しました。履修生として継続的に研究活動に関わることの重要性を伝えるようにします。
- ②大学院生の研究進捗確認制度を続けることにより、大きく研究活動が停滞するような大学院生は見られなくなりました。さらに進捗確認の方法などを工夫してその効果を高めます。
- ③全ての大学院生が学位申請時に、オーサーシップに関する確認書を作成しました。学位論文の共著者の貢献度についても把握できるようになりました。

## 「3. 令和7年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

- ①新任の大学院研究指導教員による新たな講義科目、研究科目、輪講科目を設定しました。これにより大学院生の講義選択の幅が広がりました。
- ②講義形式は対面講義とライブ配信、オンデマンド配信の3つの形式が用いられ、教育目的に合わせて活用されています。
- ③多くの大学院生が1～2年次の間に修了に必要な講義科目の単位を取得しています。修了要件を越える単位数を取得する大学院生も見られます。

## 「4. 令和7年度の現状に対する評価＜改善を要する点＞」

- ①一部の大学院生について、選択する講義科目が本人の専門科目に偏っている場合が散見されます。講義の受講しやすさを優先させた科目選択と思われます。
- ②学士会セミナーなどの講演会への大学院生の参加数が少なくなっています。
- ③他研究科では、講演会、セミナーへの参加も講義科目の一部として認められますが、薬学研究科では認められていません。
- ④MD プログラム修了証は、学部の卒業式にて授与されますが、卒業証書と合わせた授与のため、その存在が希薄となっています。

## 「5. 評価を踏まえた発展計画＜効果が上がっている点への発展計画＞」

- ①新任の研究指導教員には、積極的に講義科目を新規開講することを推奨します。また、それぞれ先端的な内容を含めた講義となるよう依頼します。
- ②大学院の講義形式について、学習効果を考慮した形式となるよう、講義担当者に依頼します。また、複数の形式を組み合わせることも提案します。
- ③MD プログラムを含めて、大学院の低学年で修了要件の講義単位数を満たせるよ

うに引き続き指導します。

#### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①大学院オリエンテーションなどで、講義科目を選択する際には、できるだけ広い領域に渡って科目を選択する事を推奨します。これにより、大学院生としての知識の幅が広がることを期待します。
- ②学士会セミナー等への積極的な参加は、幅広い知識や先端の知見を得るための重要な機会であることを大学院生に訴求します。
- ③セミナー、講演会への参加が講義単位の一部となるような取り組みが実施できるか、他研究科の例を参考にその可能性を探ります。
- ④MDプログラム修了証が授与できる新たな機会を設けることができないか、検討を行います。

#### ウ. 学生の受入れ

##### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

- ①臨床研修薬剤師として勤務しながら大学院に進学する大学院生について、修了後の昭和医科大学附属病院への勤務を約束する者については、奨学金などのサポートを拡充します。  
⇒令和7年度より臨床研修薬剤師の学位取得支援制度が開始され、11名の大学院生がこの制度を利用しました。
- ②受験生の負担軽減のために、適切な評価基準を維持しながら入学試験の英語筆記試験の問題数と試験時間（120分）に関して再検討を行います。  
⇒入学試験における英語筆記試験について、試験時間を180分から120分に短縮し、それに合わせて問題するも減らしました。
- ③MDプログラムの履修がもたらすメリットについて、実際に履修を行った大学院生から直接話を聴く機会を設けます。  
⇒大学院進学説明会には、一般および臨床研修を行う大学院生にも参加いただき、学部学生からの質問に直接回答し、意見の交換を行いました。
- ④学外から本学大学院に進学を希望する薬学生に対して、配信するコンテンツをアップデートします。特に、臨床研修薬剤師の学位取得をサポートする制度について訴求します。  
⇒大学院薬学研究科の取り組みや、臨床研修薬剤師の学位取得支援制度に関する新たな配信コンテンツを作成しました。
- ⑤本学にて、臨床薬剤師および博士（薬学）を目指す際の教育システムおよび奨学金に関するサポート制度が極めて充実していることを、高校生や中学生に対して訴求する方法を検討します。

⇒薬学部を目指す中高生に対する大学院のアピール方法を継続して検討しております。

＜改善を要する点への発展計画＞

①シンシアー奨学生が特別奨学生と連動していることを示すため、シンシアー奨学生採用学生は、特別奨学生への応募を原則とします。

⇒令和7年度より、シンシアー奨学生経験者は特別奨学生への応募が義務づけられました。

②MDプログラムにて受講できる大学院講義について、講義内容だけでなく、講義スタイル（対面・オンデマンド）、履修の機会（春期・秋期）など紹介を充分行います。

⇒MDプログラムの履修説明の際には、講義内容だけでなく講義形式が多様であることを伝えています。

③MDプログラム履修希望者への対応と指導について、大学院の教育職員が共通の認識と持てるように、定期的に教職員ガイダンスを実施します。

⇒MDプログラムや大学院制度について、教員向けの説明コンテンツを作成し、薬学研究科教育職員への視聴を案内しました。

④本学の臨床研修薬剤師や大学院進学に興味のある他大学の薬学生に対して、説明会を実施するなど、広報活動を充実させます。

⇒HP等を用いて、他大学の薬学生に向けた大学院進学案内のコンテンツを配信しました。また、個別な相談にも対応しています。

⑤他大学出身の大学院生に対して、研究テーマの紹介や大学院での受講に関する説明会を立案します。

⇒他大学からの応募が多い臨床研修薬剤師の説明会に合わせて、大学院進学の説明も実施できないか、その可能性を検討しています。

「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①大学院進学を推奨するコンテンツの視聴に加え、MDプログラムについての説明により、大学院への進学はMDプログラムから始まるという認識が定着してきました。

②入学試験の英語筆記試験の時間と問題数を変更し、受験者の負担が軽減されました。

③令和7年度において、MDプログラムを履修した早期修了生が初めて生まれました。

④研究指導教員の各研究テーマについて、年間2回の更新作業を行い、常に最新情報をホームページに反映させました。

**「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」**

- ①特別奨学生を採用枠が空いている場合に、薬学部6年進級時にも特別奨学生に採用できる制度が開始され、2名の希望者が応募しました。
- ②入学試験の英語筆記試験の解答時間と問題数を減らしましたが、平均点が合格基準を10点ほど上回る結果となり、適切な評価・選考が可能でした。
- ③令和7年度より開始した「臨床研修薬剤師の学位取得支援制度」による甲号での学位取得を目指す大学院生が11名ありました。

**「4. 令和6年度の現状に対する評価<改善を要する点>」**

- ①特別奨学生への応募が義務化されたことから、シンシアー奨学生への応募人数が減少しました。
- ②春期Ⅱ期の入学試験日程が、薬剤師国家試験の日程と重複しました。
- ③教育職員の定年・異動等による研究分野の変更・閉鎖に伴う大学院生の専攻分野変更の必要性が生じましたが、その対応に時間を要しました。

**「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」**

- ①6年次の特別奨学生募集は、臨床実習を経験した後に応募することができるメリットがありますが、募集がないことも想定されるので、これまで通り5年次からの応募を推奨します。
- ②令和7年度からの変更点を維持しながら、安定した入学者選抜が継続できるよう、内部検証を行います。
- ③本学附属病院での勤務を希望する大学院生に「臨床研修薬剤師の学位取得支援制度」を積極的に推奨します。

**「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」**

- ①学生課と共同してシンシアー奨学生制度の趣旨を学生に周知し、応募を推奨します。
- ②大学院入試日程と国家試験日程の決定時期に開きがあることから、今後も重複が予想されるため、可能な限り春期Ⅰ期入学試験への受験を推奨します。
- ③研究分野の変更・閉鎖が予想される場合には、早期より大学院生および指導教員と対応を協議し、速やかな対応を目指します。

**エ. 学修成果の点検・評価****「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」****<効果が上がっている点への発展計画>**

- ①アンケート結果を指導体制や講義内容の改善に活用してきた実績を踏まえ、今後は改善内容と成果の可視化を進めるとともに、継続的なフィードバック体制

- を整備し、効果検証の仕組みを導入して質の向上を持続的に図ります。
- ⇒学部生および大学院生の進級時に行うアンケート結果を解析し、学生受け入れや大学院生指導に役立てました。
- ②社会人大学院生への個別対応体制をより充実させるため、指導方針の明確化と共通ガイドラインの策定を検討し、すべての学生が同等の水準で継続的な支援を受けられる体制を整備します。
- ⇒社会人大学院生への対応を実施しました。その効果の検証が終了した後にガイドラインの作成等を予定しています。
- ③研究スケジュールとアンケートを用いた進捗確認の仕組みをさらに活用し、個別面談と連携させることで、研究の進捗状況に応じた具体的な指導内容の調整や助言が行えるよう運用を見直します。
- ⇒アンケートの回答より大学院生がどのようなサポートを求めているか検討を行いました。解析は複数回の解答で行うため、現在データを蓄積しています。
- ④MDプログラムの履修体制が整備されたことを踏まえ、今後は大学院進学の意義やMDプログラムの有用性を在学学生に明確に伝えるため、個別相談会や修了生の体験談を含めた情報発信の機会を拡充します。
- ⇒薬学部各学年におけるオリエンテーションおよび学年毎の進学説明会を複数回実施し、修了生との意見交換や個別相談の機会を作りました。
- ⑤上條奨学賞の応募条件改善により制度の公平性は高まりましたが、今後は応募者増加に向けて、ガイダンスや学内広報などを通じた周知を強化し、希望者が応募しやすい環境づくりを進めていきます。
- ⇒上條奨学賞の選考基準を基に候補者の選考を行いました。基準が明確化されたことで応募しやすくなりました。

<改善を要する点への発展計画>

- ①アンケートやスケジュール管理に加えて、論文執筆の進捗、発表経験、指導記録などを含めた多面的なモニタリング体制を構築します。
- ⇒指導記録を集約するためのプラットフォームについて検討行いました。
- ②指導体制の質を全体的に高めるため、教員に対して研究指導の基本方針や対応の在り方を明確に示し、共通理解を図ることで指導の一貫性を確保します。特に、社会人大学院生や臨床従事者に対する指導については、実務との両立を踏まえた柔軟かつ的確な支援が行えるよう、指導方針の徹底を図ります。
- ⇒大学院生を指導する指導教員向けの配信コンテンツで、大学院制度や指導に関する説明を行い、共通の認識にて指導ができるように周知しました。
- ③研究、履修、メンタルヘルス等の悩みに対応できるよう、大学院生が安心して相談できる窓口の存在を明示し、必要に応じて専門職との連携も図ります。
- ⇒大学院課を窓口として、研究科長および運営委員長が中心となり、大学院生の

研究活動やキャリアに関する相談や、指導者からの相談についても対応しました。

- ④研究発表会、学生フォーラムなどの大学院生主体の学修活動を充実させることで、主体的な学びを促進し、学年や専門分野を越えた学術的な交流と協働を生み出す教育環境の整備を通じて、大学院教育における学修の質と学術的コミュニティの形成を推進します。

⇒SURAC が主催する「大学院生カフェ」には多くの大学院生が参加し、研究やキャリアについての連携を深めています。薬学研究科からも参加を推奨しています。

- ⑤大学院修了後の多様な進路に関する情報提供を強化します。修了生の進路実績の収集と公開、分野別キャリアパスの紹介、OBOG との交流の機会などを通じて、大学院生の進路選択や研究の意義の理解を深める環境を整えます。

⇒大学院生のキャリアに関する情報開示は進路等のみでしたが、プライバシーに配慮しながら、詳細な情報開示ができるように検討を行います。

## 「2. 令和 6 年度の改善結果を踏まえた令和 7 年度の現状の説明」

- ①2, 3 年次の大学院生を対象に、研究課題および講義に関するアンケートを実施し、その結果よりフィードバックを行いました。

②大学院生による研究活動が複数の研究科による共同研究として実施される事例が増えており、研究領域が広がりました。

③社会人大学院生の修了延期が増加傾向であることから、対応の協議を始めました。

④上條奨学賞の選考基準を見直し、種別に関係なく全大学院生が応募できるようにしました。

⑤MD プログラムの最大取得単位数を 10 単位に拡充することにより、広い分野の知識を得る機会が増しました。

## 「3. 令和 7 年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

①助教（病院直属）で休職して研究に専念するための制度が運用され、その最初の学年が令和 7 年度末に大学院を修了し復職しました。

②複数の大学院生が学会で優秀発表賞を受賞しました。

## 「4. 令和 7 年度の現状に対する評価＜改善を要する点＞」

①大学院生が公的研究費や外部研究費に応募している実態が、把握できておりません。

②大学院生が国際学会で発表する機会が充分ではありません。

「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①臨床研修修了後に助教（病院直属）として休職し、研究活動に専念する大学院生の仕組みと目的をさらに周知し、年限内での学位取得を目指します。
- ②大学院生が学会で研究成果を発表する機会を増やすよう、研究指導教員に伝えると共に、大学院生への学会参加を推奨します。

「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①大学院生が公的研究費や外部研究費に応募している実態について、SURAC とともに現状を把握し、積極的な応募を推奨します。
- ②大学院生が国際学会に参加する機会を増やすよう、研究指導教員に伝えると共に、国際学会参加が将来の留学などのキャリアに繋がることを説明します。

（薬学研究科長 野部 浩司）

【研究科】

1-9 保健医療学研究科

ア. 単位認定、卒業認定、修了認定

「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

- ①学位審査において学位論文の質を担保できるようになったため、次年度は学位論文として公表した論文数の推移を研究科教授会で共有します。  
⇒本年度の学位論文の博士論文（学術論文）数は6編、修士論文は26編であり、令和8年3月の研究科教授会で共有しました。

<改善を要する点への発展計画>

- ①神奈川県内大学院学術交流協定で協働できそうな大学と、科目互換について意見交換を行います。  
⇒協定に参加している他大学看護系大学院も、社会人の大学院生が多く科目互換をする余裕がない状況で本学と同じ状況であることを共有しました。

「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①博士論文は一年間で5編から10編、修士論文は10編から30編で推移しており、本年度も安定した数値です。
- ②神奈川県内大学院学術交流協定での科目互換が難しい状況は、他大学大学院と類似していることが分かりました。

「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①大学院生が順調に学修を進めて学位論文として公表ができています。論文の質と数も良好です。指導教員の安定した教育力によると考えます。

「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①神奈川県内大学院学術交流協定の科目互換の制度の利用について検討が必要です。

「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①論文数の推移を確認して全体に報告をします。  
②大学院生が質の良い学術論文を作成できるよう指導を継続します。

「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①大学院生の担当していない教員にも大学院生の指導ができることを伝え、大学院生の指導を勧めます。

イ. 教育課程及び教授方法

「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

- ①今後も研究指導資格のある教員を増やします。  
⇒研究資格の上位資格申請でマル合の認定は29件でした。

<改善を要する点への発展計画>

- ①研究者情報・業績集に保健医療学研究科の全教員が登録しており、研究業績の推移が確認可能なため、論文数の推移を確認し教員間で共有します。  
⇒増加傾向にありますが、研究業績のシステムでの論文数のカウントに至らず、増加の数が不明確な状況です。

「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①研究指導ができる教員は増加しています。  
②業績数についてはリポジトリからのカウントが不完全で不明確です。

「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①業績を積み上げることで上位資格の認定を受ける教員が増えました。

「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①業績数の推移をリポジトリから確認する方法の検討が必要です。

「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

①論文数が増えた教員はマル合教員として研究指導ができることを周知します。

「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

①研究科全体での研究および研究指導の活性化のために、業績数の推移を確認して共有します。

ウ. 学生の受入れ

「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

①様々な研究テーマを持っている教員が存在することを広報します。  
⇒ホームページ、パンフレットで様々なコースや領域があることを広報しました。その結果、限定された指導教員に多くの進学希望者が来ました。

<改善を要する点への発展計画>

①ライセンスの有無にとらわれずに、研究テーマに向き合うことが重要であると考えます。自由で想像的な発想で保健医療学に関連した研究ができる大学院であることをアピールしたいと考えています。  
⇒アスレティックトレーニング分野では医療資格が不必要であるという広報によって、医療ライセンスを持たない方が2名受験しました。

「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①医療のライセンスの有無に関わらず、また論文作成のみならず資格取得もできる大学院であることが進学希望者に伝わっている部分がありました。

「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

①アスレティックトレーニング分野では、ソーシャルメディアで広報を行っており、多くの視聴者がいます。ソーシャルメディアを通じた広報が効果をあげています。

「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

①ホームページで情報の公開をしていますが、教員の研究テーマや科目内容についてのインパクトが弱いといえます。

「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

①研究科全体でソーシャルメディアを活用した広報をすることが効果的であると考えています。

**「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」**

- ①ホームページ等での情報公開は、分かりやすい構成を検討する必要があります。ホームページに加えてソーシャルメディアでインパクトのある情報発信することを目指します。

**エ. 学修成果の点検・評価****「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」****<効果が上がっている点への発展計画>**

- ①授業アンケートを引き続き実施し、その結果を基にPDCAサイクルを回すことで、授業の質をさらに向上させていくことができると考えています。  
⇒授業アンケートを継続し、PDCAサイクルによって大学院生のニーズを踏まえた指導を継続できています。

**<改善を要する点への発展計画>**

- ①令和9年の研究センター化を見据えて、前期課程と後期課程の科目の整理をすることが将来の教育課程につながると考えています。これまでの前期過程と後期課程の科目を単に合せることよりも、研究領域毎に科目を整理することが優先されるべきであると考えます。  
⇒前期課程の科目については、開講実績がない科目の削除を依頼しましたが、一部において整理が十分に進んでいない状況がみられます。

**「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」**

- ①授業アンケートを活用したCAPDサイクルによる授業の質の向上は継続して行いました。  
②研究センター化を鑑みた科目整理について、開講実績がない科目や科目責任者が不明確な科目を洗い出し、整理をすることができましたが、まだ不十分です。

**「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」**

- ①授業アンケートを継続して行うことで修学成果の点検ができました。修正を繰り返しながら教授内容がブラッシュアップされています。

**「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」**

- ①科目の整理が進んでいない部分があるため、進める順序を決める必要があります。

「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①授業アンケートを継続します。
- ②科目整理を引き続き行い、研究センター化した後に大学院生が系統的に科目選択ができるように進めます。

「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①研究センター化を鑑みた科目の整理については、2つの研究センターのうちヘルスサイエンス研究センターの部分の整理を先行します。

(保健医療学研究科長 三村 洋美)

## 2. 学生

### 2-1 学修支援

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

①学生相談室の相談予約枠の増加、保健管理センターとのさらなる連携強化など相談体制の充実を図ります。

⇒木曜日の相談予約枠を増設し、学生相談室の予約待ち学生を減少させました。相談事例に応じて、保健管理センターとの情報共有に努めました。

②学生向けアンケートの定期的な実施、学生代表との定期的な意見交換会の開催を進めていきます。

⇒学生連絡会との連携や学修支援に関するアンケート、学生懇談会を実施し、意見収集を行いました。

<改善を要する点への発展計画>

①相談内容の分析と傾向把握、対応マニュアルの改訂を行います。

⇒指導担任向けガイドラインを改正し、相談事案共有の徹底を図る動画を配信しました。

②幅広い学生からの意見収集、学生代表との定期的な意見交換会の開催、意見反映状況の可視化を行います。

⇒学生意見箱の運用を継続し、学生懇談会を定期的に実施し、学生の意見を幅広く収集する体制を維持しました。

#### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①学生相談室における木曜日の予約枠新設により、学生の心理的負担の軽減と待機者減少を実現しました。

②発達障害等に伴う合理的配慮の申請書や計画書を整備し、障がい学生支援委員会と連携し支援しました。

#### 「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

①学生相談室の予約枠拡大により、学生の悩みに早期に対応できる体制が整いました。

②合理的配慮の計画書に沿った運用により、支援を要する学生の学修環境が改善しました。

#### 「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

①発達障害、特別な配慮を要する学生が増加傾向にあり、教職員の専門的な対応力向上が急務です。

- ②一部の指導担任において学生の相談事案が大学窓口へ適切に共有されない事例があり、改善が必要です。

#### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①修学支援教員や指導担任間の意見交換会で事例を深く共有し、全学的な修学支援体制を一層強化します。

#### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①指導担任向け説明動画等を通じて相談事案の報告義務を周知徹底し、情報共有の漏れを未然に防ぎます。
- ②鷺沼キャンパス移転を見据え、各キャンパスにおける学生相談室の運用体制を整備します。

(昭和医科大学学生部長 砂川 正隆)

## 2-2 キャリア支援

### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

#### <効果が上がっている点への発展計画>

- ①歯科医マッチング活動を始める時期や対策方法だけでなく、具体的な病院ごとの試験内容・面接で聞かれたことなどを具体的に調査します。  
⇒歯学部6年生にアンケート調査を実施し、結果を次年度新6年生にフィードバックします。
- ②企業研究会の開催前に各社・各病院からアピール文を回収し、参加企業・参加学生からの満足度をさらに向上させます。  
⇒参加企業のアピール文一覧表を参加学生に事前配布し、企業訪問の満足度を向上することができました。

#### <改善を要する点への発展計画>

- ①大学院生や臨床研修薬剤師の連絡先として、個人メールだけではない連絡方法を検討し、各種イベント等への参加を促します。  
⇒学内情報共有基盤の併用により参加者は増加しました。
- ②キャリア支援室の利用者増に向けて、ポータルからの定期的な案内をします。  
⇒「求人情報、提出書類の添削、説明会」情報をポータルから発信し、利用を促しました。

### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①歯学部6年生の面接練習や年度末のアンケート調査から、試験内容・小論文タイトル、後輩へのアドバイスを聴取し、来年度6年生オリエンテーションで伝

えます。

- ②企業研究会参加施設の協力で 50 文字以内のアピール文を学生に事前配布しました。学生だけでなく対応した参加企業からも好評でした。
- ③「談話会」開催直前に学内情報共有基盤で情報を発信した結果、数名ですが、大学院生、臨床研修薬剤師、教員の参加が増えました。
- ④医・歯学部 6 年生にはマッチング対策のため、保健医療学部 3、4 年生や薬学部 5 年生には企業・病院の募集タイミングに合わせポータルサイトから情報を発信しました。

### 「3. 令和 7 年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①企業研究会での「アピール文」は事前に準備できなかった学生にも訪問する施設を決定するポイントになり、双方のアンマッチは少なく、満足度が向上したと考えられます。
- ②「談話会」情報を学内情報基盤から開催 1 週間前に発信したところ参加者が増加しました。リマインド効果もあることが分かりました。
- ③来室・メールでの問い合わせが増加しました。学生のニーズに合わせて情報を流したことで効果が上がったと考えられます。

### 「4. 令和 7 年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①本年度、歯学部 6 年生から情報を収集しましたが、十分ではありません。実際の試験や面接の状況や質問の内容を把握する必要があります。

### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①「談話会」はこれまで「〇〇で働く先輩にお話を伺う」でしたが、印象に残る具体的な仕事がイメージできるようなタイトルを付けることにします。

### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①医・歯学部 6 年生を対象に「初期研修医採用試験」終了後、面接練習・添削希望者へ個別にアンケート調査を実施し情報収集します。
- ②学生の利用者数は増加しましたが、「キャリアハンドブック」の活用を促すため、印刷物だけでなく、オンライン利用も可能な状況にします。

(キャリア支援室長 中西 孝子)

### 2-3 学生サービス

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

##### ＜効果が上がっている点への発展計画＞

- ①意見交換会で得られた学生の意見を、具体的な施策に反映させるための仕組みを検討します。また、意見の実現状況を学生にフィードバックすることで、学生の参画意識を高めます。
- ⇒学生の要望を的確に捉え、施設設備の修繕箇所選定、電子錠の施錠時間延長を実現しました。

##### ＜改善を要する点への発展計画＞

- ①クラブ活動の部員数回復に向け、部員数が少ないクラブの課題を把握、具体的な支援策を検討します。また、クラブ活動の魅力を発信する広報活動の強化など、クラブ活動の情報を積極的に発信します。
- ⇒部員数が少なくなり休部などで、存続が危ぶまれるクラブの状況を把握し、他学部学生との混成等の活動継続策を講じました。また、各クラブの活動について積極的に学内広報を行いました。

#### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①クラブ活動に安全管理担当を新設し、熱中症や落雷対策など有事における安全管理体制を強化しました。また、クラブ活動計画書に救急病院やAED設置場所の記入を義務付け、大学としての安全配慮義務を徹底しました。
- ②物価高騰に対する経済的支援として、日本学生支援機構の助成を活用した食の支援事業を展開しました。

#### 「3. 令和7年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

- ①安全管理担当者向け説明会の実施等を通じ、クラブ活動における学生の危機管理意識が大きく向上しました。
- ②食の支援事業など多角的な経済対策により、学生の生活負担が軽減され課外活動の活性化に寄与しました。

#### 「4. 令和7年度の現状に対する評価＜改善を要する点＞」

- ①活動計画書が未提出のまま遠方で合宿等を行うクラブが散見され、安全管理上の重大な課題が生じています。

#### 「5. 評価を踏まえた発展計画＜効果が上がっている点への発展計画＞」

- ①救急病院やAED設置場所の記入を義務付け、大学の安全配慮義務を徹底します。

「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①活動計画書未提出クラブに対する厳格な罰則規定を設け、提出の徹底による安全管理体制を確立します。

(昭和医科大学学生部長 砂川 正隆)

2-4 学生の意見・要望への対応

「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案(再掲)およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

- ①学生からの意見収集に加え、収集した意見の分析と活用に注力します。具体的には、学生の意見をデータ化し、部署間の連携を強化することで、より効果的な施策立案を目指します。  
⇒意見箱や各種アンケートで収集した情報を分析し、奨学金制度の周知や施設運用の改善に活用しました。

<改善を要する点への発展計画>

- ①サークル立ち上げのルールや学内施設使用のルールについての周知方法を抜本的に見直します。具体的には、学生連絡会の充実、新入生オリエンテーションでの説明会の実施などを検討します。  
⇒クラブ活動規程を抜本的に整備しました。また、新規サークル設立の申請において、既存クラブとの重複等がないよう調整を行いました。

「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①学生懇談会等での建設的な要望を踏まえ、旗の台キャンパスの講義室の電子錠の施錠時間を延長しました。  
②学生意見箱の継続運用に加え、修学支援や奨学金に関するアンケートを通じ、学生の真のニーズを把握しました。

「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①学生連絡会等を通じて要望を直接かつ迅速に吸い上げ、施設運用やルール改定への的確に反映できました。  
②学生の生の声をデータ化して分析することで、部署間連携が深まり、より実効性の高い施策が実現しました。

「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①病院実習中の不適切な動画撮影やSNS投稿など、医療従事者を目指す学生としての情報モラルが課題です。

**「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」**

- ①学生意見箱の運用を強化し、意見への対応状況を適宜フィードバックすることで学生の参画意識を高めます。
- ②学生連絡会、学生懇談会等と大学側の連携をさらに強化し、多様化する学生の声を多角的な学生支援施策へ着実に反映します。

**「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」**

- ①ソーシャルメディア利用の留意事項を具体的に改訂し、実習前オリエンテーション等で遵守を徹底させます。

(昭和医科大学学生部長 砂川 正隆)

### 3. 教育・学修環境

#### 3-1 校地、校舎、運動場、体育施設の整備と適切な運営・管理

##### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

①熱源、空調等の設定を状況に応じて変更し、更なる省エネを図ります。

⇒Life Cycle Cost（以下「LCC」という。）に基づき、建物・設備の改修・更新工事の際に省エネ化されたシステムへの改修・更新を行うことで、光熱水費等を削減しました。

②照明器具のLED化により、更なる省エネを図ります。

⇒旗の台キャンパス内の省エネ対策の一環として、照明器具のLED化を更に実施し、光熱水費等を削減しました。

<改善を要する点への発展計画>

①「昭和医科大学の建物維持・管理整備計画案」に基づき、計画的に外壁補修を実施します。

⇒「昭和医科大学の建物維持・管理整備計画案」に基づき、1号館・6号館・10号館・15号館・横浜北部南棟・第二旗の台寮・ハローウエスト藤が丘寮の外壁補修工事を実施しました。

②「学校法人昭和医科大学将来計画」に基づき、計画的にキャンパスの整備を実施します。

⇒「学校法人昭和医科大学将来計画」に基づき、令和8年1月に新たに富士吉田校舎新実習棟を竣工しました。

##### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①キャンパス全体の老朽化が進んでいることから、各建物のLCCを分析し、緊急性・安全性・必要性を最優先とした改修、更新工事等の整備を継続的に行い、運営・管理に努めました。

②「耐震診断状況および耐震補強等計画案」に基づき、更なる耐震補強工事として長津田寮耐震工事が令和8年度に着手できるよう計画しました。

③「学校法人昭和医科大学将来計画」に基づき、令和9年1月に向けて鷺沼キャンパス開校準備に努めました。

##### 「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

①LCCに基づき、建物・設備の改修・更新工事を行う際に省エネ化されたシステム改修・更新を行うことで、光熱水費等を削減しました。

②「学校法人昭和医科大学将来計画」に基づき、新たに富士吉田校舎新実習棟を竣工しました。

### 3. 教育・学修環境

3-1 校地、校舎、運動場、体育施設の整備と適切な運営・管理/

3-2 附属病院の教育施設としての整備と適切な運営・管理

#### 「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

①キャンパス全体の老朽化に関して、対応を検討する必要があります。

#### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

①熱源、空調等の設定を状況に応じて変更し、更なる省エネを図ります。

#### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

①「耐震診断状況および耐震補強等計画案」に基づき、計画的に耐震補強を実施します。

②「学校法人昭和医科大学将来計画」に基づき、計画的にキャンパス整備を実施します。

(施設部長 増田 滋)

### 3-2 附属病院の教育施設としての整備と適切な運営・管理

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案(再掲)およびその結果」

##### <効果が上がっている点への発展計画>

①引き続き、各学部 of 教育推進室と連携し、各臨床実習を実施して参ります。さらに保健医療学部の新学科設立を見据えて、新学科向けの臨床実習プログラムについて臨床側の受入体制の検討を行います。

⇒本学すべての学部の臨床実習を、各学部のカリキュラムに沿って全病院で受け入れました。

##### <改善を要する点への発展計画>

①年末年始に実施される電子カルテの入れ替え作業について、年明けからの臨床実習に支障のないような作業を実施いたします。さらに、最終的には学内全附属病院の電子カルテ統合が実現されることから、診療参加型臨床実習時に必要な電子カルテ操作の統一化を図ります。

⇒江東豊洲病院・烏山病院・歯科病院において電子カルテの更新作業を実施し、どの病院でも操作方法が統一されたシステムで診療参加型臨床実習を滞りなく実施しています。

#### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①大学病院・東病院および、横浜3病院の電子カルテ更新を見据え、今回更新した都内3病院と同様な操作方法が統一されたシステムを総合情報管理センターで検討しています。

「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①各学部の診療参加型実習はもとより、本学の特徴である学部連携病棟実習や初年次体験実習を、臨床教員を中心に行っています。

「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①令和9年度の新学科・新専攻設置を目前にして、臨床教員が不足している職種があり、充実した臨床実習のために増員の必要があります。

「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①新新カリキュラムの作成に伴い、今後は臨床実習の期間が延長される場合があることから、病院側での受け入れ態勢を整備します。

「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①新学科・新専攻が設置された後の安定した臨床実習体制を構築するために、コメディカル職員の大学院への進学を推進します。

(統括病院事務部長 田口 彰彦)

3-3 情報サービス施設の整備と適切な運営・管理

「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案(再掲)およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

- ①Microsoft365を用いた学内パソコンのセキュリティ機能の強化を図ります。  
⇒Microsoft365 Defender 機能を活用し、利用者のパソコンが脅威にさらされた時の検知を管理できる環境を整えました。
- ②既存キャンパスにおける鷺沼キャンパスとの関係性を踏まえたネットワーク装置の計画的な更新を行います。  
⇒鷺沼キャンパスのネットワーク設計作業と並行して、旗の台・横浜・富士吉田の各キャンパスにおいて、老朽化したネットワーク機器の更新を行いました。

<改善を要する点への発展計画>

- ①Microsoft365について利用可能な多種機能の学内展開を図ります。  
⇒Microsoft365を用いたファイル共有、オンラインWeb会議、セキュリティ対策などの各機能の学内展開を進めました。
- ②サポート用Webページの整備など利用者へのサポート体制を確立します。  
⇒本学Webページ内のMicrosoft 365 関連ページにおいて、各種機能の説明を充実させました。あわせて、専用メールアドレスによる問い合わせ対応を整備し、保守業者が運用サポートする体制を確立しました。

**「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」**

- ①Microsoft 365 は順調に利用が拡大しています。今後は、学部生等のオンライン学習基盤を、現在使用している Google (Classroom) から Microsoft 365 (Teams) へ移行することになりました。
- ②各キャンパスにおけるネットワーク維持のためのハードウェア更新は計画どおり進めています。一方で、事務システムの老朽化や、全学グループウェアのメーカーサポート終了など、システム関連の更新が新たな課題となっています。
- ③鷺沼キャンパスのネットワーク設計については、既存キャンパスとの連携を考慮した、長期利用を見据えながら検討を進めています。

**「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」**

- ①近年、セキュリティ対策の強化により、メールでのファイル添付を禁止する企業・団体や官公庁が増加しています。本学では、Microsoft 365 の OneDrive 機能を利用することで、これらの運用に対応する体制を整えました。
- ②既存キャンパスにおいて老朽化したネットワーク装置を更新し、装置故障に起因するネットワーク障害の発生リスクが低減し、安定性が向上しました。

**「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」**

- ①法人事務システムの老朽化対応
- ②全学グループウェアのメーカーサポート終了への対応

**「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」**

- ①Microsoft365 の機能活用拡大とその利用方法の周知
- ②既存キャンパスネットワークとの関連性を考慮しながら、鷺沼キャンパスネットワークに適した機器の導入・更新の実施

**「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」**

- ①法人事務システムの更新
- ②新たな全学グループウェア製品の選定と令和8年度内での導入

(総合情報管理センター長 中村 明央)

### 3-4 図書館の整備と適切な運営・管理

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

- ①学術業績リポジトリにおける研究データの公開に向けて、教育職員からの要望にスムーズに対応できるよう、統括研究推進センターとの連携を強化します。  
⇒統括研究推進センターと図書館との連携により研究データ公開希望者に対して、滞りなく対応できました。

<改善を要する点への発展計画>

- ①研究者情報・業績集における各部署の「業績一覧」を次年度以降も引き続き更新し、また「部局管理者」の操作における労力を軽減するために画面構成を変更いたします。  
⇒研究者情報・業績集上の「業績一覧」について、問題なく画面構成を変更することができました。
- ②Read & Publish モデル契約を継続し、より多くの論文の即時オープンアクセス化に繋がるよう学内の周知を強化します。  
⇒Read & Publish モデル契約（転換契約）について、図書館ホームページ上の案内に加え学内情報共有基盤より案内を配信しました。

#### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①統括研究推進センター策定の「昭和医科大学研究データポリシー」について、図書館が公表前に確認をし、運用の基準にすることができました。
- ②研究者情報・業績集上の「業績一覧」画面にあるリンクを経由して、部局毎の業績を部局ホームページにて公開することができました。
- ③Read & Publish モデル契約（転換契約）における論文掲載料や可読ジャーナルに関連して、統括研究推進センターと役割を相互に確認しました。

#### 「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①学術業績リポジトリ上に「昭和医科大学学術業績リポジトリ研究データ登録書」を置き、研究データ公開希望者が研究データの利活用や提供方針を理解できるよう対応しました。
- ②部局毎の業績を完成させるためには、教員が期日を守り各々の業績を登録することが必要で、その旨を「部局管理者」からも教員へ通達してもらうことができました。
- ③2社とのRead & Publish モデル契約（転換契約）締結により、個別タイトル購読からパッケージ購読に拡充され、可読ジャーナル数の増加に繋がりました。
- ④鷺沼キャンパスの図書室における書架の段数を基に、図書、雑誌の収容可能冊

数を割り出し、本館および長津田校舎図書室から移管する冊数の目安を立てました。

**「4. 令和7年度の現状に対する評価＜改善を要する点＞」**

- ①「部局管理者」が部局の業績を整理したのち、部局ホームページ担当者が公開するまでにタイムラグが発生することがありました。

**「5. 評価を踏まえた発展計画＜効果が上がっている点への発展計画＞」**

- ①本館および長津田校舎図書室から鷺沼キャンパスの図書室へ移管する図書、雑誌のタイトルを選別しました。

**「6. 評価を踏まえた発展計画＜改善を要する点への発展計画＞」**

- ①「部局管理者」による業績整理ののち、部局ホームページ担当者が円滑に部局毎の業績を公開できるよう、両者の連携を促進します。

(図書館長 長谷川 篤司)

## 4. 研究

### 4-1 研究環境の整備と適切な運営・管理

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

①科研費申請支援の更なる強化のため、オンデマンド配信も活用し、個別支援者のモチベーションアップを図るワークショップを企画する。

⇒3月・8月に説明会、5・7月に申請や基盤研究（B）等獲得に向けたワークショップを開催しました。

②共同研究機器の利用促進のため、具体的な研究事例を紹介するマッチングイベントを開催する。

⇒研究者ブースター交流会を2回開催し、その中で共同研究機器室の紹介を行いました。

<改善を要する点への発展計画>

①研究教育コンテンツの見直しを進め、SURAC内ワーキンググループで教材作成を開始し、具体的成果につなげる。

⇒継続して、ワーキンググループで内容の再検討を行いました。

②広報用リーフレットの配布スケジュールを早急に策定し、学内外での広報活動強化を推進する。

⇒学外における活動時、作成した広報用リーフレットを活用し、SURACの広報を行いました。

#### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①3月の説明会には延べ110人、5月のWSにも26名が参加し、科研費申請に向けた活動が活発化しました。

②学内研究機器検索等のWebページを作成・公開し、共同研究機器の活用促進が図られました。

③研究教育コンテンツはオンライン上の動画を整理し、youtubeで公開する準備を進めました。

④広報用リーフレットを活用した学外広報により、SURACの認知向上が図られました。

#### 「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

①幅広い周知と教員及びURAによる個別支援の強化が、説明会等への多数の参加や申請意欲の向上につながりました。

②研究機器関連のWebページを整備・公開したことで、研究者が学内の機器情報にアクセスしやすくなりました。

## 4. 研究

### 4-1 研究環境の整備と適切な運営・管理/

### 4-2 研究倫理の確立と厳正な運用

#### 「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①臨床系の科研費採択率向上や論文化に向け、診療科ごとの支援やAI活用を含めた体制構築が必要です。
- ②臨床系教員（認定看護師等）への研究支援ニーズが高まっており、具体的な支援体制を構築する必要があります。
- ③目標を数値化して、明確に研究科毎に支援策を考える必要があります。

#### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①説明会等は、学内ホームページに掲載し研究者がいつでも見られる環境を作ります。採択を強く希望する研究者や基盤研究(B)不採択者等、ターゲットを絞った支援も継続します。
- ②研究機器検索等のWebページを運用しながら利用状況を把握し、継続的に共同研究機器の利用促進を図ります。

#### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①診療科等から研究対象者を選出し、科研費調書作成等の重点的支援を実施します。
- ②学会発表から論文化に至っていないケースに対し、AIを活用して論文化へつなげる支援の仕組みを構築します
- ③認定看護師等を対象に、研究の進め方やテーマの見つけ方に関する全病院合同セミナー等を企画・配信します。

(統括研究推進センター長 三邊 武彦)

### 4-2 研究倫理の確立と厳正な運用

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

##### <効果が上がっている点への発展計画>

- ①研究計画書の説明文や記載例について、問い合わせ内容を考慮し、さらなる改善を行います。  
⇒問い合わせ内容などを考慮し、個別にメールおよび面談での対応を行いました。

##### <改善を要する点への発展計画>

- ①臨床研究アドバイザーとの情報共有頻度を増やし、研究者への迅速なサポート体制を強化します。  
⇒臨床研究アドバイザーと連携し、研究者へのサポートを実施しました。

## 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①前年度の臨床研究アドバイザーへの相談件数は累計411件に上り、研究計画書作成等の個別支援体制が充実しました。
- ②臨床研究申請システムの活用と、法改正に則った標準業務手順書（SOP）の見直しにより、審査手続の適正化を進めました。
- ③個人情報漏洩事案を契機に、再発防止策として30件の研究を対象とした自己点検票の回収や現地調査を実施しました。
- ④定期報告や終了報告の提出状況をシステムで管理し、未提出者への催促を行うことで研究データの管理を強化しました。

## 「3. 令和7年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

- ①臨床研究アドバイザーによる年間400件超の丁寧な個別相談対応が、研究計画書作成時の研究者の負担軽減につながりました。
- ②法改正に合わせたSOP見直しやシステム活用により、法令・指針を遵守した審査手続の適正化と支援の迅速化が図られました。

## 「4. 令和7年度の現状に対する評価＜改善を要する点＞」

- ①システム自動通知等を活用しても定期・終了報告の未提出が発生しており、データ提出に向けたフォロー強化が必要です。
- ②他機関が主となる多機関共同研究において、本学の機関長の実施許可手続きが漏れるケースがあり、周知の徹底が必要です。
- ③自己点検票や現地調査の結果を踏まえ、倫理指針不適合の再発防止と研究倫理の更なる徹底を図る必要があります。
- ④臨床研究アドバイザーの対応件数が増えてきている点と対応者が限られてきているので対応が遅くなる場合があります。

## 「5. 評価を踏まえた発展計画＜効果が上がっている点への発展計画＞」

- ①研究計画書の説明文や記載例を定期的に見直し、アドバイザーの相談実績を反映させることで、更なる負担軽減を図ります。
- ②自己点検票の回収や現地調査を継続し、倫理指針や各種法令に準じた臨床研究の適正な実施状況の確認を徹底します。

## 「6. 評価を踏まえた発展計画＜改善を要する点への発展計画＞」

- ①多機関共同研究時の機関長許可手続き等について、学内情報共有基盤を活用した定期的な注意喚起を行い、法令遵守を徹底します。
- ②システム自動通知や事務局からの予告メールを併用し、定期・終了報告及びデータ提出の期限遵守に向けた指導を強化します。

## 4. 研究

### 4-2 研究倫理の確立と厳正な運用

### 4-3 研究活動への資源配分

③臨床研究アドバイザーとの情報共有頻度を高め、研究倫理講習の徹底や研究者への迅速かつ的確なサポート体制を構築します。

④対応できるアドバイザーの教育を行い、人材を増やしていく取り組みに協力します。

(統括研究推進センター長 三邊 武彦)

### 4-3 研究活動への資源配分

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

①AMED等大型申請で不採択だった研究者に対し、より専門的な支援プログラムを提供します。

⇒不採択者へフォームで希望を確認し、希望者に対し面談等による調書支援を行いました。

②共同研究の成果をポスター掲示などで学内外に周知し、さらなる連携を促進します。

⇒研究ブースター交流会や他大学との共同研究マッチングイベントで事例を紹介しました。

<改善を要する点への発展計画>

①高額助成対象者へのコンサルティング周知率100%を目指し、個別面談を実施します。

⇒対象者への周知方法等の検討を進めましたが、個別面談の実施には至りませんでした。

②ベンチャー企業設立希望者の具体的ニーズ調査を実施します。

⇒大学発ベンチャー認定規程案の作成等、設立に向けた学内運用の検討を開始しました。

③論文投稿・掲載料助成制度の予算配分を見直し、効率的な資源活用を図ります

⇒助成制度の活用状況を考慮した予算配分の見直しや、オープンアクセス支援の運用を開始しました。

#### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①AMED不採択者への調書支援や交流会（54名参加）での成果周知を通じ、支援体制が充実しました。

②高額助成対象者へのコンサルティング等については、周知方法や実施体制の整備を進めています。

③大学発ベンチャー認定規程案の作成等、設立支援に向けた学内運用の検討を開

始しました。

- ④OA 論文掲載料の免除・割引を開始するなど、利用状況を踏まえ助成制度の充実を図りました。

### 「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①不採択理由に基づく調書支援を迅速に開始したことで、大型申請に向けた支援が充実しました。
- ②包括連携協定校との共同研究事例等を学内交流会等で周知し、学内外の連携促進につながりました。
- ③オープンアクセス支援の開始や制度の見直しにより、研究費の適正配分と資源活用が向上しました。

### 「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①高額助成対象者へのコンサルティングについて、周知方法の再検討と個別面談の実施が必要です。
- ②大学発ベンチャーの認定規程や相談窓口の整備を急ぎ、具体的な設立支援につなげる必要があります。
- ③論文投稿・掲載料やOA支援制度について、利用状況に応じた継続的な検証と予算見直しが必要です。

### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①AMED等不採択者へのフィードバックに基づく伴走型の調書支援を継続し、採択率向上を目指します。
- ②包括連携協定校等との共同研究の成果をオンデマンド配信や掲示で周知し、更なる連携を促進します。
- ③OA論文掲載料免除等の助成制度の利用実績を定期的に検証し、効果的な資源配分につなげます。

### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①高額助成対象者へのコンサルティングの周知方法を見直し、確実な個別面談の実施体制を構築します。
- ②2026年上半期の規程整備を目標に、大学発ベンチャー設立の手続きや相談窓口等の体制を構築します。
- ③利用状況を考慮した論文投稿・掲載料助成制度の継続的な予算配分見直しで、効率的な資源活用を図ります。

(統括研究推進センター長 三邊 武彦)

## 5. 教員・職員

### 5-1 教学マネジメントの機能性

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

①各学部で引き続き、アクティブ・ラーニング等を積極的に取り入れ、能動的に考え、学修する学生を育てます。また、学生からの意見等についても、教育委員会等を通して、速やかに各学部の教育職員間で共有し、授業内容の充実・改善に努めます。

⇒オンライン授業や効率的な時間割作成に取り組み、アクティブ・ラーニングの時間を確保できるよう努めました。また、教育委員会や学生懇談会、授業アンケートで学生からの意見を集め、講義に反映できるよう努めました。

②特別・包括連携協定校との取り組みをさらに充実させ、高大連携を推し進めます。また、様々な場所で開催される進学相談会への積極的な参加の他、出張講義や学校説明会、高校訪問等で、本学への興味・関心を高め、志願者の獲得に努めます。

⇒特別・包括連携協定校との連携をさらに深化させ、富士吉田オープンキャンパスの開催や各協定校の希望に沿った出張講義や体験授業の実施など、多様な取り組みを推進し、高大連携の強化を図りました。また、全国各地で行われた進学相談会や学校説明会への積極的な参加や高校訪問を通じて、本学への興味・関心を喚起し、志願者の獲得に努めました。

③学生ラウンジの利用状況を定期的に調査し、利用者の声に基づいた設備改善を実施します。学生連絡会と大学側との連携を強化し、学生の意見をより迅速かつ効果的に反映できる体制を構築します。

⇒定量的な調査に代わり学生意見箱や学生懇談会で利用者の声を把握しました。また、学生連絡会との連携事項は学生部長会にて共有し、設備改善へ反映させました。

<改善を要する点への発展計画>

①学生アンケートや教育委員会に出席している代表学生からの意見を通し、実際に授業を受ける学生の満足度や理解度を把握します。また、学生アンケートの回答率を向上させる方策を検討します。

⇒授業アンケートや学生懇談会、教育委員会にて収集した学生の意向に沿った講義・実習の実施に努めました。回答率の向上については、引き続き統括教育推進室会議で検討します。

②Microsoft Teams 運用検討WGにて教育上の運用を検討し、Microsoftへの移行に適切に対応します。

⇒Microsoft Teams 運用検討WGにて、授業利用を想定した教育上の運用の検討および検証を行いました。

③年内入試での受験（特別協定校・指定校・推薦）を意識する受験生は、高校の低学年（場合によっては中学3年）から志望校を検討しているため、早い段階でのアプローチや学生募集のあり方を検討します。

⇒学年の制限を設けずにオープンキャンパスや出張講義を実施し、若年層を対象とした段階的なアプローチを強化しました。これにより、年内入試を意識する受験生にも早期の段階から本学の教育内容や特色を理解してもらえるよう取り組みました。

④情報発信を今まで以上に強化し、より多くの学生に情報が届くようにします。

学生連絡会の意見収集範囲を拡大し多様な学生の意見を収集していきます。

⇒学内掲示やポータルでの視覚的な情報発信を強化。QRコードを用いた匿名目安箱の実施など、改善実績の可視化で多様な学生の参画意識を高めました。

## 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①アクティブ・ラーニングの時間を確保し、より良い講義・実習が行える体制を整えています。

②YouTube や LINE 等の SNS を活用した学生募集活動を推進しました。また、進学相談会や学校説明会への積極的な参加、高校訪問の実施を通じて、本学への興味・関心を喚起し、志願者の拡大に努めました。

③学生意見箱や学生懇談会で学生からの意見を把握し、設備改善を迅速的に実施しました。

## 「3. 令和7年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

①学生の要望に沿った講義・実習を展開することで、学生のモチベーションを維持することができました。

②一部の学部を除き、令和8年度入試の志願者数は前年度を上回り、全体として志願者数の増加傾向が見られました。

③学生の要望に対して可能な限り設備改善を行い、より快適な環境を提供することができました。

## 「4. 令和7年度の現状に対する評価＜改善を要する点＞」

①国家試験の合格率が低迷している学部が見受けられます。適切な進級判定や講義形態の検討が必要です。

②薬学部の志願者数は依然として伸び悩んでおり、学部の特性や教育内容への理解促進を含め、早急に志願者増加に向けた具体的な対策を検討する必要があります。

③設備の老朽化が進んでいる部分の把握ができていないため、計画的な設備改善案を作成する必要があります。

### 5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>

- ①全学部の志願者数のさらなる増加を図るため、オープンキャンパスの内容を一層充実させます。具体的には、病院見学や体験授業など、学部の特色を体感できる企画を拡大するとともに、SNSを活用した学生募集活動を強化します。
- ②学生意見箱を引き続き運用し、多くの利用者の意見を収集できる体制を継続します。

### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①学生の学習意欲を高め、結果につながる講義体制を整えます。
- ②薬学部においては、オープンキャンパスの開催回数を増やすとともに、内容の充実を図ります。さらに、新たな入試区分の導入を検討するなど、多様な志願者層を対象とした募集施策を推進し、志願者の確保と入学意欲の向上に努めます。
- ③鷺沼キャンパス移転を踏まえ、具体的な設備改善案を作成します。

(学事部長 石崎 兼司)

## 5-2 教員の配置・職能開発

### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案(再掲)およびその結果」

#### 1. 人員配置

##### <効果が上がっている点への発展計画>

- ①病院に勤務している教育職員(医師)の時間外労働時間数(外勤の労働時間を含む)は減少傾向にあるため、他職種へのタスクシフト・タスクシェアを推進する必要があると考えます。

⇒今後は、医師の業務内容について検証を行い、タスクシフト・タスクシェアが可能な業務を明確化した上で、他職種への円滑な移行を推進します。特に診療補助的業務や事務的業務については、関係部署と連携し、業務分担の見直しおよび運用ルールの整備を行うことで、医師の教育・研究・診療の質の維持向上と勤務環境の改善を図ります。

##### <改善を要する点への発展計画>

- ①病院に勤務している教育職員(医師)のタスクシフト・タスクシェアが可能な業務の洗い出しならびに看護師や薬剤師といった医療関係職種のほか、医師事務作業補助者や事務職員への分担を図っていく必要があると考えます。

⇒医師の業務負担軽減を目的として、関係職種と協議の上、タスクシフト・タスクシェアが可能な業務の洗い出しを体系的に実施します。あわせて、業務移管に必要な研修や支援体制を整備し、各職種が専門性を発揮できる環境づくりを進めることで、持続可能な教育・診療体制の構築を目指します。

## 2. 職能開発

### <効果が上がっている点への発展計画>

- ①教育者のためのワークショップ（ビギナーズコース）では、今後の学部教育の大きな進展を視野に入れて、新たな教育職員のカリキュラムプランニングの能力向上を行います。
- ⇒教育者のためのワークショップ（ビギナーズコース）では、昭和医科大学の教育職員としてカリキュラムプランニングのプロセスを学ぶことにより、能力向上を図りました。
- ②教育者のためのワークショップ（アドバンストコース）では、今後の大きな教育改革の情報と意識の共有をもとに、各学部と富士吉田教育部での具体的な教育プログラムの検討を進めます。
- ⇒教育者のためのワークショップ（アドバンストコース）では、令和8年度から開始となる新たなカリキュラムに関する情報と意識の共有を図り、各学部および富士吉田教育部において、具体的な教育プログラムの検討を進めました。
- ③本学の大きな特色である学部連携教育を、今後の新たな学修環境の下でさらに進展させ、円滑に実施するための検討を進め、必要な教員、指導者の育成を行います。
- ⇒教育者のためのワークショップ（アドバンストコース）にて、学部混合の検討グループを編成し、新たなカリキュラムにおける学部連携教育について検討しました。
- ④4 学部、富士吉田教育部の教育推進室の連携・協働のもと、教育改革の円滑に推進・実践するため、教育推進室が共同する体制と取り組みをさらに進展させます。
- ⇒各学部、富士吉田教育部で連携が必要な事項については、統括教育推進室会議にて協議し、各教育推進室が共同して教育改革の推進および実践に取り組みました。
- ⑤令和8年度からの各学部1年次の新カリキュラムの具体化の進捗に合わせ、円滑な運用のための4学部、富士吉田教育部の教員の情報共有と指導体制を検討します。
- ⇒各学部、富士吉田教育部の教育職員を構成員とする「新カリキュラム検討部会」にて、令和8年度1年生から開始する臨床教育を拡充する全学部の新たなカリキュラムについて検討するとともに、教員間の情報共有を図り、円滑な運用に向けた指導体制の検討を行いました。

### <改善を要する点への発展計画>

- ①Microsoft Teams を活用したカリキュラム運用を検討して新たな ICT 教育環境

を整備するとともに、その円滑な実施を推進する教職員を4学部と富士吉田教育部で養成します。

⇒Microsoft Teams 運用検討ワーキンググループにて、授業利用を想定した教育上の運用の検討および検証を行うとともに、円滑なカリキュラム運用を推進するため、教職員向けの運用マニュアル等の検討を進めました。

②カリキュラム移行を円滑に実施するために4学部と富士吉田教育部でワーキンググループを組織し、多様な変化に柔軟に対応できるよう準備を進めます。

⇒「新新カリキュラム検討部会」のもとにワーキンググループを組織し、新たなカリキュラムへの移行に伴う多様な変化に柔軟に対応できるよう準備を進めました。

## 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

### 1. 人員配置

①令和6年度の取組により、病院に勤務する教育職員（医師）の時間外労働時間は一定程度抑制されています。令和7年度においても、他職種との連携による業務分担の取組が継続されており、医師の業務負担軽減に向けた体制は一定の成果を上げています。

### 2. 職能開発

①教育者のためのワークショップ（ビギナーズコース）を開催し、昭和医科大学の教育職員としてカリキュラムプランニングのプロセスを学びました。

②教育者のためのワークショップ（アドバンストコース）を開催し、各学部における喫緊の課題について解決案を討論し、実施案を示しました。

③学内のIT環境の整備とICT教育拡充の必要性をもとに、全学的なICT教育の構築と整備、人材の育成を推進しました。

④令和9年度の鷺沼キャンパスへの移転に伴い、各学部のカリキュラム作成、シミュレータを含む実習や学部連携学修の実施、適切な教員配置など、円滑な学修のための準備を行いました。

## 「3. 令和7年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

### 1. 人員配置

医師の時間外労働時間が減少傾向にあります。これは、業務内容の見直しや、救急救命士の採用による医師の業務負担軽減や他職種との協働が進んだことによるものであり、勤務環境改善に寄与しています。

## 2. 職能開発

- ①各学部と富士吉田教育部がアドバンスト・ワークショップで作成したプロダクトをもとに、カリキュラムの修正、指導体制及び学修環境の整備を進めました。

### 「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

#### 1. 人員配置

タスクシフト・タスクシェアについては、個別の取組にとどまっており、全体的な整理やルール化には至っていないため、今後は、組織として一層の標準化と制度的対応を図ります。

#### 2. 職能開発

- ①全学的な Microsoft へのプラットフォーム移行に対応するため、全学的な ICT 教育環境の構築と整備、人材の育成を一層推進する必要があります。
- ②鷺沼キャンパスへの移転に加え、新たなカリキュラムの開始や新学科・新専攻の設置に伴うカリキュラム移行を円滑に実施するための準備が必要です。

### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

#### 1. 人員配置

現在の取組を継続しつつ、医師の専門性を最大限発揮できる業務環境の整備を進めます。業務効率化を通じて、教育・研究・診療の質の向上を図ります。

#### 2. 職能開発

- ①教育者のためのワークショップ（ビギナーコース）では、今後の学部教育の大きな進展を視野に入れて、新たな教育職員のカリキュラムプランニングの能力向上を行います。
- ②教育者のためのワークショップ（アドバンストコース）では、今後の大きな教育改革の情報と意識の共有をもとに、各学部と富士吉田教育部での具体的な教育プログラムの検討を進めます。

### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

#### 1. 人員配置

タスクシフト・タスクシェアの推進に向け、業務内容の整理および関係部署との協議を進め、持続可能な人員配置と業務分担体制の構築を目指します。

## 2. 職能開発

- ①MicrosoftTeams を活用したカリキュラム運用を検討して新たな ICT 教育環境を整備するとともに、その円滑な実施を推進する教育職員を各学部と富士吉田教育部で養成します。
- ②新たなカリキュラムへの移行を円滑に実施するために、引き続き「新たなカリキュラム検討部会」で多様な変化に柔軟に対応できるよう準備を進めます。

(人員配置：人事部長 大矢 敦、職能開発：統括教育推進室長 上條 由美)

## 5-3 職員の研修

### 「1. 令和 6 年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

- ①令和 6 年度に各部署で実施した研修については、他職種対象の研修内容ではなかったが、研修内容に興味を抱いた他職種も容易に参加できるように多岐にわたる周知および参加方法について検討する必要があると考えます。  
⇒今後は、研修情報の一元的な周知を行うとともに、対象職種を限定しない研修については、学内情報基盤等を活用し幅広く案内します。また、研修目的や内容を明確に提示することで、他職種の参加意欲を高め、職員全体の資質向上につなげます。

<改善を要する点への発展計画>

- ①他職種・他施設が容易に参加できる環境を整備し、大学の運営方針や職員の資質向上を目的とした興味を抱く有意義なコンテンツを準備する必要があると考えます。  
⇒対面形式に加え、オンライン配信やオンデマンド配信を活用した研修形態を導入し、時間や場所に制約されない参加環境の整備を進めます。あわせて、大学の運営方針や職員のキャリア形成に資する研修テーマを設定し、継続的かつ計画的な職員研修の充実を図ります。

### 「2. 令和 6 年度の改善結果を踏まえた令和 7 年度の現状の説明」

- ①令和 7 年度においても、各部署で研修が実施されているが、主として部署内向けの内容が中心となっています。

### 「3. 令和 7 年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①各部署において研修が継続的に実施され、職員の専門性向上に寄与しています。

「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①研修内容や参加対象が限定的であり、他職種・他施設への展開が十分とは言えない状況です。

「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①研修実施の継続に加え、研修内容の共有化を進め、職員全体の資質向上を図ります。

「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①職種横断的な研修やオンライン研修の導入を検討し、参加しやすい研修環境の整備と内容の充実を図ります。

(人事部長 大矢 敦)

## 6. 経営・管理と財務

### 6-1 経営の規律と誠実性

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

①将来計画の実現に向けて、組織の方向性を統一した状態に保つため、必要な情報共有を継続します。

⇒将来計画の実現に向けて、令和7年度に実施する内容を事業計画として掲げ、適宜、理事会および評議員会で説明・情報共有を行いました。

<改善を要する点への発展計画>

①将来計画の実現に向けて、組織の方向性を統一した状態に保つため、必要な情報共有のさらなる充実を図ります。

⇒各施設において理事長による運営方針説明会を開催し、将来計画の意義や内容、進行スケジュール等について説明・情報共有を行いました。

#### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①将来計画の進捗は、理事会から各会議体を通じて学内に周知しています。

#### 「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

①将来計画の実現に向けて、組織の方向性を統一した状態に保つため、必要な情報共有は実行できています。

#### 「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

①将来計画の実現に向けて、組織の方向性を統一した状態に保つため、必要な情報共有を継続する必要があります。

#### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

①将来計画の実現に向けて、組織の方向性を統一した状態に保つため、必要な情報共有を継続します。

#### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

①将来計画の実現に向けて、組織の方向性を統一した状態に保つため、必要な情報共有のさらなる充実を図ります。

(総務部長 飯田 誠)

## 6-2 理事会の機能

### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

＜効果が上がっている点への発展計画＞

①引き続き、本学における業務執行について、使命・目的に基づき、社会状況を踏まえて適正な意思決定を行います。

⇒本学における業務執行について、理事・監事による協議に基づき適正に意思決定を行いました。また、意思決定を行うに際し、評議員会への諮問が必要な事項については、寄附行為に従って適正に対応しました。

＜改善を要する点への発展計画＞

①本学における業務執行について意思決定を行うに際しては、引き続き、監事・評議員会に意見を聴くことにより、その適正性を確保します。

⇒本学における業務執行について意思決定を行うに際しては、監事・評議員会に意見を聴くことにより、その適正を確保しました。

### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①本学における業務執行について、使命・目的に基づき、社会状況を踏まえて適正な意思決定を行っています。

### 「3. 令和7年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

①本学における業務執行について、使命・目的に基づき、社会状況を踏まえて適正な意思決定を継続的に行うことができます。

### 「4. 令和7年度の現状に対する評価＜改善を要する点＞」

①本学における業務執行について意思決定を行うに際しては、引き続き、監事・評議員会に意見を聴くことにより、その適正性を確保する必要があります。

### 「5. 評価を踏まえた発展計画＜効果が上がっている点への発展計画＞」

①引き続き、本学における業務執行について、使命・目的に基づき、社会状況を踏まえて適正な意思決定を行います。

### 「6. 評価を踏まえた発展計画＜改善を要する点への発展計画＞」

①本学における業務執行について意思決定を行うに際しては、引き続き、監事・評議員会に意見を聴くことにより、その適正性を確保します。

（総務部長 飯田 誠）

### 6-3 管理運営の円滑化と相互チェック

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

①引き続き、監事が理事会および評議員会に出席して意見を述べる体制を継続します。

⇒監事が理事会および評議員会に出席して意見を述べる体制は継続できています。

<改善を要する点への発展計画>

①監事には本学の適正な運営のために、理事会や評議員会において引き続き必要な意見を述べてもらうように求めます。

⇒監事は理事会および評議員会に出席し、本学の管理運営が適正になされているか確認するために適宜理事に説明を求め、意見を述べました。

#### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①監事は理事会および評議員会に出席し、理事からの説明・報告により、本学における教育・研究や地域貢献、財産等の状況を確認し、適宜、意見を述べています。

#### 「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

①監事は理事会および評議員会に出席し、本学の管理運営が適正になされているか、継続的に確認しています。

#### 「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

①監事には、本学の適正な運営のために、理事会や評議員会において引き続き必要な意見を述べてもらう必要があります。

#### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

①引き続き、監事が理事会および評議員会に出席して意見を述べる体制を継続します。

#### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

①監事には本学の適正な運営のために、理事会や評議員会において引き続き必要な意見を述べてもらうように求めます。

(総務部長 飯田 誠)

## 6-4 財務基盤と収支

### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

#### <効果が上がっている点への発展計画>

①追加・変更する将来計画に対応する資金計画を再編しつつ、予算化された計画に基づく特定資産への組み入れを実行し、将来計画の実現に向けて安定した財務基盤の確立に努めます。

⇒将来計画については、関連部署と最新情報を共有しつつ、資金計画の再編を行いました。また、資金調達についても、検討を重ねたうえで予算化された計画に基づく特定資産への組み入れを実行しました。

②給付型奨学金制度のさらなる確立に向けて、計画的な基金への増資および効果的な資金運用に取り組み、継続的な安定した運用収入の確保に努めます。

⇒計画的な基金への増資に加え、運用資金の売却による売却益を基金へ組み入れ増資を行いました。また、リスクヘッジを目的に投資対象を分散した結果、運用収入が増加しました。

#### <改善を要する点への発展計画>

①私立大学等経常費補助金については、大学の特色を活かした取り組みに対し助成される特別補助金の獲得が必要となり、それぞれの項目に対し獲得に向け各部署と連携しつつ、大学全体で対策を講じていきます。

⇒組織横断的に協議するために財務担当理事協議会を中心にそれぞれ担当部署を管轄する会議体にて問題点や改善案等を協議した結果、それぞれの項目の点数が増加し、私立大学等経常費補助金の増収に繋がりました。

### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

①将来計画の実施に向け資金計画を再編しつつ特定資産の組み入れ等を行っていますが、年々、建築費や人件費等が高騰しており、借入の必要性についても引き続き検証しました。

②給付型奨学金制度へは計画的な基金への増資以外に運用資産の売却益を組み入れ、臨時的な増資を行いました。運用可能額が増額し安全かつ利率の比較的高い資産で運用し奨学金給付分を賄えています。

③財政基盤の安定に向けた外部資金の獲得について、国から交付される「私立大学等経常費補助金」は、財務担当理事協議会を中心に担当部署と組織横断的に協議・改善を続けた結果、全体の金額で増額の交付を受けています。

### 「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

①特定資産については目標額を組み入れ、将来計画の具体化に備えました。また、日々変更となる中長期計画に対応するため、借入れを含めた資金計画の立

案を行いました。

- ②運用資産の売却および運用収入の増収による計画以外の臨時的な増資では、運用の幅が広がり、運用収入の増収に繋がりました。

#### 「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①今般の社会情勢により将来計画に関する経費が高騰している状況の中、当初予定している資金計画より大幅に変更しなければならない可能性があるため、柔軟かつ迅速な対応が必須となります。

#### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①将来計画の具現化については、関連する部署と最新情報を共有し、資金計画の再編を行っていきます。また、資金調達についても予算化された計画に基づき、特定資産への組み入れを行い、将来計画の実現に向けて安定した財務基盤の確立に努めます。
- ②外部資金獲得による財政基盤の強化として、有価証券購入による資金運用や私立大学等経常費補助金などの外部資金獲得を積極的に行い、また、外部機関からの外部資金に係る情報も積極的に各部署に発信していきます。

#### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①あらゆる分析等を速やかに実施していくために財務情報を早期に作成し、継続的に提示できる体制を構築していきます。また、予算及び決算スケジュールを再考し、財務情報発信の早期化も図っていきます。

(資金課長 齋藤 州)

### 6-5 会計

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案(再掲)およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

- ①財務専門職の教育・育成

法人経理課・資金課・病院経理課・附属病院間にてジョブローテーションを行い、組織横断的な連携強化および人的支援が可能となる相互協力体制の構築を進めます。

⇒附属病院の一施設においては、協力支援体制を整えることができたが、その仕組みはまだ脆弱であるため、複数名での支援や複数施設での協力体制が必要である。

＜改善を要する点への発展計画＞

- ①請求書発行システムで入力した請求情報を基に入金データと照合し自動消し込みするシステムを構築し、発生源予算執行システム（収入部分）を完成させます。  
⇒入金データと照合した自動消し込みのシステムの内容を各部署から要望事項をヒアリングし構築案をブラッシュアップしましたので、この後、システム業者にて作業を行い、最終調整後、令和9年4月稼働予定となっています。
- ②将来構想実現に向けた資金確保のための予算編成の確立  
全体のバランスを考慮した予算編成スケジュールを再考し、資金確保を意識した編成の実現に向け進めます。  
⇒予算編成スケジュールについて、予算折衝前に各部署との内容確認を行うことにより予算折衝が効率よく改善できたが、全体的なスケジュールのバランスを再度見直す必要があり、改善を進める必要があります。

「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①期末決算業務のさらなる効率化・標準化を目指し、監査法人からの指摘事項の周知を行い、誤りやすい事例などを経理担当者と共有しアップデートを行いました。
- ②附属病院へのローテーションについては、実行するところまでは至っていませんが、附属病院間にて研修を実施し、業務手順の違いを洗い出しながら、さらなる業務の標準化に向け進めています。

「3. 令和7年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」

- ①財務専門職を積極的に採用し、教育要綱に連動したマニュアルを再編したことで業務手順の標準化および新入職員の育成、定着が進んでいます。

「4. 令和7年度の現状に対する評価＜改善を要する点＞」

- ①入金データと照合した自動消し込みのシステムの内容を各部署から要望事項をヒアリング、構築案をブラッシュアップし、現在、業者にてシステム変更中であるが、その後最終調整を行い、令和9年4月稼働を目指しています。
- ②予算編成スケジュールについて、予算折衝前に各部署との内容確認を行うことにより予算折衝が効率よく改善できたが、全体的なスケジュールのバランスを再度見直し、改善する必要があります。

「5. 評価を踏まえた発展計画＜効果が上がっている点への発展計画＞」

- ①請求書発行システムで入力した請求情報を基に入金データと照合し自動消し込みするシステムを構築し、発生源予算執行システム（収入部分）を完成しま

- す。
- ②法人経理課・資金課・病院経理課・附属病院間にてジョブローテーションを行い、組織横断的な連携強化および人的支援が可能となる相互協力体制を構築する。
  - ③専門職の教育として、専門書（会計監査六法、実務問答集等）の活用や外部研修を受講し、専門知識の向上およびスペシャリストの育成に努める。また、基本的事務能力の強化にも努める。

**「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」**

- ①あらゆる分析等を速やかに実施していくために財務情報を早期に作成し、継続的に提示できる体制を構築していきます。また、予算及び決算スケジュールを再考し、財務情報発信の早期化も図っていきます。

（資金課長 斎藤 州）

## 7. 内部質保証

### 7-1 内部質保証の組織体制

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案（再掲）およびその結果」

<効果が上がっている点への発展計画>

- ①今後も主体的な取り組みを後押ししつつ、学長主導のもとで全学的な方針共有を図ることで、組織全体におけるPDCAサイクルの精度をさらに高めます。  
⇒令和7年度においても、学長のリーダーシップのもと、内部質保証に関する全学的な方針の共有を継続し、各部局における自己点検・評価活動と改善活動が一体的に進められるよう運用体制の充実を図りました。

<改善を要する点への発展計画>

- ①PDCAサイクルの理解不足が見られる部局に対しては、状況に応じた研修の実施を行い、運用の質を底上げします。  
⇒各部局におけるPDCAサイクルの理解と実践状況を踏まえ、必要に応じて説明・助言を行うとともに、SD研修等を通じて内部質保証に関する意識の共有と運用水準の向上を図りました。

#### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①令和6年度においては、学長を中心とした内部質保証体制のもと、各部局が自己点検・評価を通じて課題を把握し、改善に向けた取り組みを進める体制が定着してきました。令和7年度は、これまでの運用実績を踏まえ、各部局における改善活動の進捗をより組織的に確認し、全学的なPDCAサイクルの実効性を高める取り組みを継続しています。

#### 「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①各部局において、自己点検・評価に基づく課題の把握と改善策の検討が継続的に行われるようになり、内部質保証活動が日常的な業務運営の中に浸透しつつあります。
- ②学長主導による方針共有が継続されていることにより、各部局の取り組みに一定の方向性が生まれ、全学的な改善・改革に向けた意識の共有が進んでいます。

#### 「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①内部質保証体制の運用は定着しつつあるものの、部局によってPDCAサイクルの理解度や改善活動への反映状況に差が見られるため、全学的な水準の均質化を図る必要があります。

## 7. 内部質保証

### 7-1 内部質保証の組織体制/

### 7-2 内部質保証のための自己点検・評価

#### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①今後も学長主導の内部質保証体制を維持し、各部局の主体的な取り組みを促進しながら、自己点検・評価の結果を大学全体の改善・改革に確実につなげる仕組みを強化します。

#### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①PDCA サイクルの運用状況を継続的に確認し、改善活動への反映が十分でない部局に対しては、研修や個別支援を通じて理解促進を図り、内部質保証体制のさらなる実質化を進めます。

(自己評価委員会委員長 上條 由美)

### 7-2 内部質保証のための自己点検・評価

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案(再掲)およびその結果」

##### <効果が上がっている点への発展計画>

- ①今後も IR 室と各学部 IR 委員会との連携を強化し、データ分析の精度と活用の幅を広げることで、自己点検・評価の質をさらに高めます。  
⇒IR 室と各学部 IR 委員会との連携を継続し、各部局の課題把握や改善策の検討に必要なデータの収集・分析を進めることで、エビデンスに基づく自己点検・評価の推進を図りました。

##### <改善を要する点への発展計画>

- ①IR 活動の理解促進とスキル向上を目的とした研修やワークショップを定期的実施し、各部局の担当者の能力強化を図ります。  
⇒IR 活動の目的や分析結果の活用方法について理解を深めるため、関係部署との情報共有を進めるとともに、各部局におけるデータ活用能力の向上に向けた支援を行いました。

#### 「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」

- ①令和6年度においては、IR 室と各学部 IR 委員会との連携により、データに基づく課題の抽出と改善策の検討が進められました。令和7年度は、これらの取り組みを継続し、自己点検・評価の結果を各部局の改善活動へよりの確に反映させるため、分析結果の共有と活用体制の強化を図っています。

#### 「3. 令和7年度の現状に対する評価<効果が上がっている点・理由>」

- ①IR 室による調査・分析結果を活用することで、各部局における課題の把握がより具体的になり、自己点検・評価における根拠資料の整理や改善策の検討が進

みました。

- ②各学部 IR 委員会との連携が継続されていることにより、部局単位の課題だけでなく、全学的な視点から改善に取り組む意識が高まっています。

#### 「4. 令和7年度の現状に対する評価<改善を要する点>」

- ①IR 活動によって得られた分析結果を、各部局の具体的な改善計画や実施状況の検証に結びつけるためには、引き続きデータ活用に関する理解促進と支援体制の強化が必要です。

#### 「5. 評価を踏まえた発展計画<効果が上がっている点への発展計画>」

- ①今後も IR 室と各学部 IR 委員会との連携を継続し、データの収集・分析・共有の流れをより明確にすることで、自己点検・評価の客観性と実効性をさらに高めます。

#### 「6. 評価を踏まえた発展計画<改善を要する点への発展計画>」

- ①IR 活動の成果を各部局の改善活動に確実に反映させるため、分析結果の読み取り方や活用方法に関する研修・説明の機会を設け、担当者の理解と実践力の向上を図ります。

(自己評価委員会委員長 上條 由美)

### 7-3 内部質保証の機能性

#### 「1. 令和6年度報告書記載の改善・改革案(再掲)およびその結果」

##### <効果が上がっている点への発展計画>

- ①今後も、自己点検・評価の結果を基にした改善活動を継続的に推進し、各部局での PDCA サイクルの精度をさらに高めます。  
⇒各部局において自己点検・評価の結果を踏まえた改善活動を継続し、課題の把握、改善策の検討、実施状況の確認を行うことで、PDCA サイクルの実質的な運用を進めました。

##### <改善を要する点への発展計画>

- ①自己点検・評価の結果を効果的に活用するため、各部局への支援体制を強化し、改善活動の進捗状況や成果を全学的に共有する仕組みを整備します。これにより、組織全体での質保証体制の一体感と実効性を高めていきます。  
⇒各部局における改善活動の状況を把握し、必要に応じて助言や情報共有を行うことで、自己点検・評価の結果を改善活動へつなげる体制の強化を図りました。

**「2. 令和6年度の改善結果を踏まえた令和7年度の現状の説明」**

- ①令和6年度においては、自己点検・評価の結果を踏まえた改善活動が各部局で継続的に行われ、PDCAサイクルの運用が定着しつつあります。令和7年度は、改善活動の進捗状況や成果をより明確に把握し、全学的な内部質保証体制の機能性を高めるため、情報共有と確認体制の充実を図っています。

**「3. 令和7年度の現状に対する評価＜効果が上がっている点・理由＞」**

- ①自己点検・評価の結果を基に、各部局が課題を整理し改善策を検討する流れが継続されており、内部質保証の仕組みが実際の改善活動に結びついています。
- ②改善活動の状況を全学的に共有する意識が高まり、部局ごとの取り組みを大学全体の質保証活動として位置づける体制が強化されています。

**「4. 令和7年度の現状に対する評価＜改善を要する点＞」**

- ①自己点検・評価の結果を改善活動に結びつける取り組みは進んでいるものの、改善状況や成果の共有方法については、部局間でばらつきが見られるため、継続的な確認と共有の仕組みをさらに整備する必要があります。

**「5. 評価を踏まえた発展計画＜効果が上がっている点への発展計画＞」**

- ①今後も自己点検・評価の結果を活用した改善活動を継続し、各部局におけるPDCAサイクルの運用状況を確認することで、内部質保証体制の機能性をさらに高めます。

**「6. 評価を踏まえた発展計画＜改善を要する点への発展計画＞」**

- ①各部局における改善活動の進捗状況や成果をよりの確に把握し、全学的に共有する仕組みを整備します。また、必要に応じて各部局への支援を行うことで、自己点検・評価の結果が継続的な改善・改革につながる体制を強化します。

(自己評価委員会委員長 上條 由美)

# データ集

資料－1	志願者・合格者・入学者数、学生定員、在籍学生数	(医学部)
資料－2	〃	(歯学部)
資料－3	〃	(薬学部)
資料－4	〃	(保健医療学部)
資料－5	〃	(医学研究科)
資料－6	〃	(歯学研究科)
資料－7	〃	(薬学研究科)
資料－8	〃	(保健医療学研究科)
資料－9	〃	(助産学専攻科)
資料－10	国家試験結果	(医学部)
資料－11	〃	(歯学部)
資料－12	〃	(薬学部)
資料－13	〃	(保健医療学部)
資料－14	〃	(助産学専攻科)
資料－15	国際交流の促進状況	
資料－16	公開講座の実施状況	

【志願者数、合格者数、入学者数】	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
入学定員数	119	128	129	131	131
志願者数	4,773	4,212	4,009	3,582	4,397
合格者数	304	293	283	268	269
入学者数	116	128	134	129	131

【学生数の状況】	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
入学定員数	119	128	129	131	131
収容定員数	718	726	735	746	757
現員数	712	731	746	749	

【卒業・修了者数】	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
卒業生数	109	120	123	107	123

【進級状況】	年次	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
在籍学生数	1	116	128	134	132	131
	2	126	129	142	138	142
	3	113	119	116	133	128
	4	126	109	124	115	133
	5	122	124	105	124	115
	6	109	122	125	107	123
	合計		712	731	746	749
進級・卒業生数	1	116	128	130	131	131
	2	113	116	132	127	135
	3	107	119	115	132	127
	4	124	104	124	114	132
	5	122	123	105	123	114
	6	109	120	123	107	123
	合計		691	710	729	734
		令和3年4月から 令和4年3月末	令和4年4月から 令和5年3月末	令和5年4月から 令和6年3月末	令和6年4月から 令和7年3月末	令和7年4月から 令和8年3月末
休学者数(-)	1					
	2	3	2	1	1	1
	3			1	1	
	4					1
	5				1	1
	6		1	1		
	合計	3	3	3	3	3
復学者数	1					
	2	1	3	2		1
	3	1			1	1
	4					
	5					2
	6			1	1	
	合計	2	3	3	2	4
退学者数(-)	1			1	1	
	2	3	2	2		1
	3					
	4					
	5					1
	6					
	合計	3	2	3	1	2
留年者数(-)	1			3		
	2	7	9	7	10	6
	3	6				1
	4	2	5		1	1
	5		1			1
	6		1	1		
	合計	15	16	11	11	9

【志願者数、合格者数、入学者数】		R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
入学定員数		105	105	105	105	105
志願者数		840	854	779	471	753
合格者数		226	209	178	180	164
入学者数		96	96	96	99	100

  

【学生数の状況】		R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
入学定員数		105	105	105	105	105
収容定員数		630	630	630	630	630
現員数		598	588	590	589	603

  

【卒業・修了者数】		R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
卒業者数		96	89	94	87	93

  

【進級状況】	年次	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
在籍学生数	1	97	98	96	100	100
	2	104	108	111	105	114
	3	98	88	93	104	103
	4	95	99	90	91	101
	5	100	95	99	92	86
	6	104	100	101	97	99
	合計		598	588	590	589
進級・卒業者数	1	94	95	93	98	98
	2	83	92	97	95	103
	3	94	87	86	96	97
	4	90	96	85	84	96
	5	95	90	91	90	84
	6	96	89	94	87	93
	合計		552	549	546	550
		令和3年4月から 令和4年3月末	令和4年4月から 令和5年3月末	令和5年4月から 令和6年3月末	令和6年4月から 令和7年3月末	令和7年4月から 令和8年3月末
休学者数(-)	1			1		1
	2	2	3	1	2	2
	3	2			1	
	4		2	1		
	5		1	1		2
	6		1		4	2
	合計		4	7	4	7
復学者数	1			1		
	2	1	1	2		1
	3		1			1
	4			1	1	
	5				1	
	6			1		4
	合計		1	2	5	2
退学者数(-)	1	1	3	0	2	1
	2	3	1	4	1	4
	3	1			1	2
	4		1		1	1
	5		1	1		
	6	3		1	1	1
	合計		8	6	6	6
留年者数(-)	1	2		1		1
	2	14	12	9	8	5
	3	2	1	7	7	4
	4	5	1	4	6	4
	5	5	3	6	2	
	6	5	10	6	5	3
	合計		33	27	33	28

【志願者数、合格者数、入学者数】	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
入学定員数	200	200	200	200	200
志願者数	1,067	1,282	1,213	615	894
合格者数	403	389	402	333	362
入学者数	200	200	220	208	209

【学生数の状況】	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
入学定員数	200	200	200	200	200
収容定員数	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200
現員数	1,175	1,162	1,181	1,190	1,200

【卒業・修了者数】	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
卒業者数(※9月卒含む)	181	172	169	178	168

【進級状況】	年次	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
在籍学生数	1	213	206	227	217	217
	2	218	230	231	244	231
	3	207	182	190	195	225
	4	173	197	176	183	182
	5	173	166	185	167	173
	6	191	181	172	184	172
	合計	1,175	1,162	1,181	1,190	1,200
進級・卒業者数	1	200	193	207	200	213
	2	176	178	180	205	191
	3	191	167	173	172	197
	4	166	185	164	172	172
	5	172	166	182	166	173
	6	174	166	169	178	168
	9月卒	7	6			
	合計	1,086	1,061	1,075	1,093	1,114
		令和3年4月から 令和4年3月末	令和4年4月から 令和5年3月末	令和5年4月から 令和6年3月末	令和6年4月から 令和7年3月末	令和7年4月から 令和8年3月末
休学者数(-)	1	1	1		1	2
	2	3	2	3	3	1
	3	1			3	
	4			1	1	1
	5					
	6	1		1		1
	合計	6	3	5	8	5
復学者数	1					1
	2	1	2	1	2	3
	3	3		2		3
	4				1	1
	5					
	6	2			1	
	合計	6	2	3	4	8
退学者数(-)	1	7	6	11	9	2
	2	11	14	13	8	8
	3	10	3	2	3	5
	4	1	3	2	1	1
	5	1				0
	6	1	3	1		1
	合計	31	29	29	21	17
留年者数(-)	1	5	6	9	7	
	2	28	36	35	28	31
	3	5	12	15	17	23
	4	6	9	9	9	8
	5			3	1	
	6	8	6	1	6	2
	合計	52	69	72	68	64

(保健医療学部)

【志願者数、合格者数、入学者数】	R3年度				R4年度			
	看護学科	理学療法学科	作業療法学科	計	看護学科	理学療法学科	作業療法学科	計
入学定員数	95	30	30	155	95	30	30	155
志願者数	773	209	80	1,062	633	114	43	790
合格者数	248	89	49	386	241	62	33	336
入学者数	105	35	17	157	103	37	17	157

【学生数の状況】	R3年度				R4年度			
入学定員数	95	30	30	155	95	30	30	155
収容定員数	400	120	120	640	400	120	120	640
現員数	411	150	79	640	416	146	68	630

【卒業・修了者数】	R3年度				R4年度			
卒業者数	97	40	24	161	105	35	15	155

【編入学者数(3年次)】		R3年度				R4年度			
		看護学科	理学療法学科	作業療法学科	計	看護学科	理学療法学科	作業療法学科	計
編入学者数	合計	2	0	0	2	4	0	0	4

【進級状況】	年次	R3年度				R4年度			
		在籍学生数	1	106	35	17	158	103	37
	2	99	40	23	162	114	37	17	168
	3	107	35	15	157	94	37	19	150
	4	99	40	24	163	105	35	15	155
	合計	411	150	79	640	416	146	68	630
進級・卒業者数	1	105	35	17	157	103	34	15	152
	2	88	37	19	144	106	34	16	156
	3	104	35	15	154	90	37	19	146
	4	97	40	24	161	105	35	15	155
	合計	394	147	75	616	404	140	65	609

		令和3年4月から令和4年3月末				令和4年4月から令和5年3月末			
休学者数(-)	1				0			1	1
	2	4			4	1			1
	3				0				0
	4	1			1				0
	合計	5	0	0	5	1	0	1	2
復学者数	1				0				0
	2				0	4			4
	3				0				0
	4				0				1
	合計	0	0	0	0	4	0	0	5
退学者数(-)	1	1			1				1
	2	2	1	3	6	3	1		4
	3	1			1	4			4
	4	1			1				0
	合計	5	1	3	9	7	1	1	9
留年者数(-)	1				0		3		3
	2	5	2	1	8	4	2	1	7
	3	2			2				0
	4				0				0
	合計	7	2	1	10	4	5	1	10

(保健医療学部)

【志願者数、合格者数、入学者数】		R5年度						R6年度					
		看護学科	理学療法学科	リハビリテーション学科理学療法学専攻	作業療法学科	リハビリテーション学科作業療法学専攻	計	看護学科	理学療法学科	リハビリテーション学科理学療法学専攻	作業療法学科	リハビリテーション学科作業療法学専攻	計
入学定員数		95		35		25	155	95		35		25	155
志願者数		586		151		61	798	451		126		36	613
合格者数		218		67		44	329	237		77		30	344
入学者数		101		35		15	151	101		39		11	151
【学生数の状況】		R5年度						R6年度					
入学定員数		95		35		25	155	95		35		25	155
収容定員数		400	90	35	90	25	640	400	60	70	60	50	640
現員数		410	110	35	52	15	622	428	71	74	32	25	630
【卒業・修了者数】		R5年度						R6年度					
卒業者数		90	36		19		145	110	35		16		161
【編入学者数(3年次)】		R5年度						R6年度					
		看護学科	理学療法学科	リハビリテーション学科理学療法学専攻	作業療法学科	リハビリテーション学科作業療法学専攻	計	看護学科	理学療法学科	リハビリテーション学科理学療法学専攻	作業療法学科	リハビリテーション学科作業療法学専攻	計
編入学者数	合計	5	0	0	0	0	5	9					9
【進級状況】		R5年度						R6年度					
在籍学生数	1	101	3	35	1	15	155	101		42		14	157
	2	108	36		16		160	102	4	32		11	149
	3	111	34		16		161	115	32		16	163	
	4	90	37		19		146	110	35		16	161	
	合計	410	110	35	52	15	622	428	71	74	32	25	630
進級・卒業者数	1	100	3	32	0	11	146	101		42		13	156
	2	106	32		16		154	100	3	32		11	146
	3	110	34		16		160	115	32		16	163	
	4	90	36		19		145	110	35		16	161	
	合計	406	105	32	51	11	605	426	70	74	32	24	626
		令和5年4月から令和6年3月末						令和6年4月から令和7年3月末					
休学者数(-)	1						0					1	1
	2	2					2	2	1				3
	3						0						0
	4						0						0
	合計	2	0	0	0	0	2	2	1	0	0	1	4
復学者数	1						0						0
	2	1					1	2					2
	3						0						0
	4						1						0
	合計	1	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	2
退学者数(-)	1	1			1	1	2						0
	2		3				3		1				1
	3	1					1						0
	4						0						0
	合計	2	3	0	1	1	6	0	1	0	0	0	1
留年者数(-)	1			3			3						0
	2		1				1						0
	3						0						0
	4		1				1						0
	合計	0	2	3	0	3	8	0	0	0	0	0	0

(保健医療学部)

【志願者数、合格者数、入学者数】		R7年度					
		看護学科	理学療法学科	リハビリテーション学科 理学療法専攻	作業療法学科	リハビリテーション学科 作業療法専攻	計
入学定員数		95		35		25	155
志願者数		656		171		35	862
合格者数		204		82		30	316
入学者数		106		44		12	162

  

【学生数の状況】		R7年度					
		看護学科	理学療法学科	リハビリテーション学科 理学療法専攻	作業療法学科	リハビリテーション学科 作業療法専攻	計
入学定員数		95		35		25	155
収容定員数		400	30	140	30	25	625
現員数		429	35	118	16	37	635

  

【卒業・修了者数】		R7年度					
		看護学科	理学療法学科	リハビリテーション学科 理学療法専攻	作業療法学科	リハビリテーション学科 作業療法専攻	計
卒業者数		115	29		16		160

  

【編入者数(3年次)】			R7年度					
			看護学科	理学療法学科	リハビリテーション学科 理学療法専攻	作業療法学科	リハビリテーション学科 作業療法専攻	計
編入者数	合計							0

  

【進級状況】		R7年度					
		看護学科	理学療法学科	リハビリテーション学科 理学療法専攻	作業療法学科	リハビリテーション学科 作業療法専攻	計
在籍学生数	1	106		44		13	163
	2	103		42		13	158
	3	105	3	32		11	151
	4	115	32		16		163
	合計	429	35	118	16	37	635
進級・卒業者数	1	106		44		12	162
	2	101		41		12	154
	3	104	3	32		11	150
	4	115	29		16		160
	合計	426	32	117	16	35	626

  

令和7年4月から令和8年3月末							
休学者数(-)	1						0
	2						0
	3						0
	4		1				1
	合計	0	1	0	0	0	1
復学者数	1						0
	2						0
	3						0
	4						0
	合計	0	0	0	0	0	0
退学者数(-)	1					1	1
	2	1		1		1	3
	3						0
	4					0	0
	合計	1	0	1	0	2	4
留年者数(-)	1						0
	2	1					1
	3	1					1
	4		2			0	2
	合計	2	2	0	0	0	4

【志願者数、合格者数、入学者数】	R3年度						R4年度					
	生理(系)	病理(系)	社会医学(系)	内科(系)	外科(系)	計	生理(系)	病理(系)	社会医学(系)	内科(系)	外科(系)	計
入学定員数	10	12	4	16	18	60	10	12	4	16	18	60
志願者数	28	17	6	1	5	57	13	13	14	7	4	51
合格者数	27	17	6	1	5	56	11	13	13	7	4	48
入学者数	27	17	6	1	5	56	11	13	13	7	4	48

【学生数の状況】	R3年度						R4年度					
	生理(系)	病理(系)	社会医学(系)	内科(系)	外科(系)	計	生理(系)	病理(系)	社会医学(系)	内科(系)	外科(系)	計
入学定員数	10	12	4	16	18	60	10	12	4	16	18	60
収容定員数	40	48	16	64	72	240	40	48	16	64	72	240
現員数	89	99	29	53	18	288	87	95	31	55	18	286

【卒業・修了者数】	R3年度						R4年度					
	生理(系)	病理(系)	社会医学(系)	内科(系)	外科(系)	計	生理(系)	病理(系)	社会医学(系)	内科(系)	外科(系)	計
修了者数	11	9	5	14	4	43	15	6	1	15	3	40

【進級状況】	年次	R3年度						R4年度					
		生理(系)	病理(系)	社会医学(系)	内科(系)	外科(系)	計	生理(系)	病理(系)	社会医学(系)	内科(系)	外科(系)	計
在籍学生数	1	26	19	8	3	5	61	18	16	11	6	2	53
	2	12	17	4	4	3	40	24	18	7	3	5	57
	3	17	31	6	11	4	69	16	32	2	7	5	62
	4	34	32	11	35	6	118	29	29	11	39	6	114
	合計	89	99	29	53	18	288	87	95	31	55	18	286

【志願者数、合格者数、入学者数】	R5年度			R6年度		
			計			計
入学定員数	60			60		
志願者数	51			60		
合格者数	49			58		
入学者数	49			58		

【学生数の状況】	R5年度			R6年度		
			計			計
入学定員数	60			60		
収容定員数	240			240		
現員数	291			289		

【卒業・修了者数】	R5年度			R6年度		
			計			計
修了者数	34			46		

【進級状況】	年次	R5年度			R6年度		
		生理(系)	病理(系)	社会医学(系)	内科(系)	外科(系)	計
在籍学生数	1	56			47		
	2	49			57		
	3	95			97		
	4	91			88		
	合計	291	0	0	0	0	289

【志願者数、合格者数、入学者数】	R7年度	
		計
入学定員数	60	60
志願者数	57	57
合格者数	56	56
入学者数	56	56

【学生数の状況】	R7年度	
		計
入学定員数	60	60
収容定員数	240	240
現員数	285	285

【卒業・修了者数】	R7年度	
		計
修了者数	41	41

【進級状況】	年次	R7年度	
		生理(系)	計
在籍学生数	1	56	56
	2	52	52
	3	108	108
	4	69	69
	合計	285	285

## (歯学研究科)

## 資料－6

【志願者数、合格者数、入学者数】	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
入学定員数	18	18	22	22	22
志願者数	34	29	31	23	38
合格者数	32	27	30	23	35
入学者数	31	27	29	22	33

【学生数の状況】	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
入学定員数	18	18	22	22	22
収容定員数	72	72	76	88	88
現員数	100	109	113	108	109

【卒業・修了者数】	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
修了者数	19	22	25	26	25

【進級状況】	年次	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
在籍学生数	1	30	28	29	23	29
	2	19	30	27	29	21
	3	26	20	30	26	29
	4	25	31	27	30	30
	合計	100	109	113	108	109

## (薬学研究科)

## 資料－7

【志願者数、合格者数、入学者数】	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
入学定員数	12	12	12	15	15
志願者数	24	27	32	25	20
合格者数	23	23	31	25	16
入学者数	20	21	30	25	16

【学生数の状況】	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
入学定員数	12	12	12	15	15
収容定員数	36	40	44	60	60
現員数	86	90	102	108	103

【卒業・修了者数】	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
修了者数	17	13	18	17	19

【進級状況】	年次	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
在籍学生数	1	22	22	24	30	14
	2	20	21	21	24	30
	3	15	20	22	21	24
	4	29	27	32	33	35
	合計	86	90	99	108	103

(修士・博士 前期・後期)	R3年度		R4年度		R5年度	
	博士前期 (修士)	博士後期	博士前期 (修士)	博士後期	博士前期 (修士)	博士後期
【志願者数、合格者数、入学者数】						
入学定員数	20	4	20	4	20	6
志願者数	25	10	27	10	22	5
合格者数	23	9	19	8	19	2
入学者数	23	9	19	8	19	2

【学生数の状況】	R3年度		R4年度		R5年度	
入学定員数	20	4	20	4	20	6
収容定員数	30	12	40	12	40	18
現員数	33	26	42	30	39	28

【卒業・修了者数】	R3年度		R4年度		R5年度	
修了者数	17	5	16	5	18	9

【進級状況】	年次	R3年度		R4年度		R5年度	
		在籍学生数					
	1	16	10	26	9	14	4
	2	17	6	16	10	25	9
	3		10		11		15
	4						
	合計	33	26	42	30	39	28

(修士・博士 前期・後期)	R6年度		R7年度	
	博士前期 (修士)	博士後期	博士前期 (修士)	博士後期
【志願者数、合格者数、入学者数】				
入学定員数	20	6	20	6
志願者数	32	5	29	7
合格者数	24	4	22	6
入学者数	24	4	22	6

【学生数の状況】	R6年度		R7年度	
入学定員数	20	6	20	6
収容定員数	40	18	40	18
現員数	44	22	51	17

【卒業・修了者数】	R6年度		R7年度	
修了者数	15	10	25	4

【進級状況】	年次	R6年度		R7年度	
		在籍学生数			
	1	25	4	22	5
	2	19	4	29	4
	3		14		8
	4				
	合計	44	22	51	17

	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
【志願者数、合格者数、入学者】	助産学専攻科	助産学専攻科	助産学専攻科	助産学専攻科	助産学専攻科
入学定員数	15	15	15	15	15
志願者数	52	88	75	76	87
合格者数	15	15	15	15	14
入学者数	13	14	14	14	14

【学生数の状況】	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
入学定員数	15	15	15	15	15
収容定員数	15	15	15	15	15
現員数	13	14	14	14	14

【卒業・修了者数】	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
修了者数	13	13	13	14	14

【進級状況】	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
在籍学生数	13	14	14	14	14
進級・卒業者数	13	13	13	14	14
	令和3年4月から 令和4年3月末	令和4年4月から 令和5年3月末	令和5年4月から 令和6年3月末	令和6年4月から 令和7年3月末	令和7年4月から 令和8年3月末
休学者数					
復学者数					
退学者数(-)		1	1		
留年者数(-)					

## (医学部)

## 資料－10

【国家試験結果】		R3年度 (116回)	R4年度 (117回)	R5年度 (118回)	R6年度 (119回)	R7年度 (120回)
		(令和4年3月16日発表)	(令和5年3月16日発表)	(令和6年3月16日発表)	(令和7年3月14日発表)	
受験者数	新卒	109	120	123	107	123
	既卒	7	5	6	6	11
	総数	116	125	129	113	134
合格者数	新卒	107	117	121	99	116
	既卒	4	2	2	3	7
	総数	111	119	123	102	123
合格率	新卒	98.2%	97.5%	98.4%	92.5%	94.3%
	既卒	57.1%	40.0%	33.3%	50.0%	63.6%
	総数	95.7%	95.2%	95.3%	90.3%	91.8%

## (歯学部)

## 資料－11

【国家試験結果】		R3年度 (115回)	R4年度 (116回)	R5年度 (117回)	R6年度 (118回)	R7年度 (119回)
		(令和4年3月16日発表)	(令和5年3月16日発表)	(令和6年3月16日発表)	(令和7年3月14日発表)	
受験者数	新卒	96	89	94	87	93
	既卒	22	21	24	12	7
	総数	118	110	118	99	100
合格者数	新卒	85	72	89	85	88
	既卒	11	13	15	7	2
	総数	96	85	104	92	90
合格率	新卒	88.5%	80.9%	94.7%	97.7%	94.6%
	既卒	50.0%	61.9%	62.5%	58.3%	28.6%
	総数	81.4%	77.3%	88.1%	92.9%	90.0%

## (薬学部)

## 資料－12

【国家試験結果】		R3年度 (第107回)	R4年度 (第108回)	R5年度 (第109回)	R6年度 (第110回)	R7年度 (第111回)
		(令和4年3月24日発表)	(令和5年3月22日発表)	(令和6年3月22日発表)	(令和7年3月25日発表)	
受験者数	新卒	173	166	169	178	168
	既卒	37	26	17	25	21
	総数	210	192	186	203	189
合格者数	新卒	163	158	148	161	144
	既卒	28	17	10	19	13
	総数	191	175	158	180	157
合格率	新卒	94.2%	95.2%	87.6%	90.4%	85.7%
	既卒	75.7%	65.4%	58.8%	76.0%	61.9%
	総数	91.0%	91.1%	84.9%	88.7%	83.1%

【国家試験結果】		R3年度看護師 (第111回) (令和4年3月25日発表)	R3年度理学療法士 (第57回) (令和4年3月23日発表)	R3年度作業療法士 (第57回) (令和4年3月23日発表)	R3年度保健師 (第108回) (令和4年3月25日発表)	R3年度助産師 (第105回) (令和4年3月25日発表)
受験者数	新卒	95	40	24	24	13
	既卒		2			
	総数	95	42	24	24	13
合格者数	新卒	95	39	23	24	13
	既卒		1			
	総数	95	40	23	24	13
合格率	新卒	100.0%	97.5%	95.8%	100.0%	100.0%
	既卒	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	
	総数	100.0%	95.2%	95.8%	100.0%	

【国家試験結果】		R4年度看護師 (第112回) (令和5年3月24日発表)	R4年度理学療法士 (第58回) (令和5年3月23日発表)	R4年度作業療法士 (第58回) (令和5年3月23日発表)	R4年度保健師 (第109回) (令和5年3月24日発表)	R4年度助産師 (第106回) (令和5年3月24日発表)
受験者数	新卒	103	35	15	24	13
	既卒	0	1	1	0	0
	総数	103	36	16	24	13
合格者数	新卒	100	35	15	24	13
	既卒	0	1	1	0	0
	総数	100	36	16	24	13
合格率	新卒	97.1%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	既卒	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	
	総数	97.1%	100.0%	100.0%	100.0%	

【国家試験結果】		R5年度看護師 (第113回) (令和6年3月24日発表)	R5年度理学療法士 (第59回) (令和6年3月23日発表)	R5年度作業療法士 (第59回) (令和6年3月23日発表)	R5年度保健師 (第110回) (令和6年3月24日発表)	R5年度助産師 (第107回) (令和6年3月24日発表)
受験者数	新卒	87	36	19	20	13
	既卒	3	0	0	0	0
	総数	90	36	19	20	13
合格者数	新卒	87	36	19	20	13
	既卒	2	0	0	0	0
	総数	89	36	19	20	13
合格率	新卒	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	既卒	66.7%	0.0%	0.0%	0.0%	
	総数	98.9%	100.0%	100.0%	100.0%	

【国家試験結果】		R6年度看護師 (第114回) (令和7年3月24日発表)	R6年度理学療法士 (第60回) (令和7年3月21日発表)	R6年度作業療法士 (第60回) (令和7年3月21日発表)	R6年度保健師 (第111回) (令和7年3月24日発表)	R6年度助産師 (第108回) (令和7年3月24日発表)
受験者数	新卒	105	35	16	20	14
	既卒	1	0	0	0	0
	総数	106	35	16	20	14
合格者数	新卒	105	34	13	20	14
	既卒	1	0	0	0	0
	総数	106	34	13	20	14
合格率	新卒	100.0%	97.1%	81.3%	100.0%	100.0%
	既卒	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	総数	100.0%	97.1%	81.3%	100.0%	

【国家試験結果】		R7年度看護師 (第115回) (令和8年3月24日発表)	R7年度理学療法士 (第61回) (令和8年3月23日発表)	R7年度作業療法士 (第61回) (令和8年3月23日発表)	R7年度保健師 (第112回) (令和8年3月24日発表)	R7年度助産師 (第109回) (令和8年3月24日発表)
受験者数	新卒	106	29	16	20	13
	既卒		1	1		
	総数	106	30	17	20	13
合格者数	新卒	99	29	15	16	13
	既卒		1			
	総数	99	30	15	16	13
合格率	新卒	93.4%	100.0%	93.8%	80.0%	100.0%
	既卒	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	
	総数	93.4%	100.0%	88.2%	80.0%	

【国家試験結果】		R3年度助産師 (第105回) (令和4年3月25日発表)	R4年度助産師 (第106回) (令和5年3月24日発表)	R5年度助産師 (第107回) (令和6年3月24日発表)	R6年度助産師 (第108回) (令和7年3月24日発表)	R7年度助産師 (第109回) (令和8年3月24日発表)
受験者数	新卒	13	13	13	14	13
	既卒					
	総数	13	13	13	14	13
合格者数	新卒	13	13	13	14	13
	既卒					
	総数	13	13	13	14	13
合格率	新卒	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	既卒					
	総数	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

## ＜協定校一覧＞

	大学名	国名	提携開始月
大学間協定校	カイロ大学	エジプト	平成12年11月
	ローマ大学	イタリア	平成12年11月
	慶熙大学	韓国	平成12年5月
	ポートランド州立大学	アメリカ	平成20年7月
	台北医学大学	台湾	平成30年2月
	クロード・ベルナール・リヨン第1大学	フランス	令和5年11月
	センメルワイズ大学	ハンガリー	令和6年4月
医学部間協定	チューレン大学	アメリカ	平成15年7月
	ミネソタ大学	アメリカ	平成16年11月
	ウイーン医科大学	オーストリア	平成17年9月
	ハワイ大学	アメリカ	平成18年2月
	天津医科大学	中国	平成20年10月
	フィリピン大学	フィリピン	平成21年7月
	台北医学大学	台湾	平成24年10月
	アンタナナリボ大学	マダガスカル	平成27年11月
	UCLA(臨床実習協定)	アメリカ	平成29年10月
	タイ王国中央胸部疾患研究所	タイ	平成31年3月
	サラゴサ大学	スペイン	令和3年3月
	ロンドン大学クイーン・メアリー校	イギリス	令和4年11月
	マヒドン大学(ラマティボディ病院医学部)	タイ	令和5年8月
	カロールダビラ大学	ルーマニア	令和6年10月
	マヒドン大学(シリラート病院医学部)	タイ	令和7年12月
	ワライラック大学	タイ	令和7年12月
	プリンス・オブ・ソクラー大学	タイ	令和7年12月
歯学部間協定	大連医科大学	中国	平成15年9月
	天津医科大学	中国	平成16年10月
	アテレード大学	オーストラリア	平成17年3月
	上海交通大学医学院	中国	平成17年4月
	南カリフォルニア大学	アメリカ	平成18年2月
	チュービンゲン大学	ドイツ	平成18年4月
	台北医学大学	台湾	平成18年12月
	香港大学	中国	平成19年2月
	トロント大学	カナダ	平成21年9月
	モンゴル国立医科大学	モンゴル	平成22年3月
	アリイッシュコピア大学	カナダ	平成23年12月
	マハサラスワティ大学	インドネシア	平成25年11月
	トリサクティ大学	インドネシア	平成29年2月
	北京大学	中国	平成29年5月
	チュラロンコン大学	タイ	平成29年12月
	マジュンガ大学	マダガスカル	平成30年1月
	ウイーン医科大学	オーストリア	平成30年3月
	DA・バンドゥ・メモリアル・RV 歯科大学	インド	平成31年3月
	ホーチミン市医科薬科大学	ベトナム	令和元年10月
薬学部間協定	嶺南大学	韓国	平成19年10月
	マハサラカム大学	タイ	平成20年8月
	オルバニー薬科大学	アメリカ	平成21年12月
	台北医学大学	台湾	平成29年3月
	フロリダ大学	アメリカ	令和2年1月
	マヒドン大学	タイ	令和6年2月
	フィリピン大学	フィリピン	平成21年7月
保健医療学部協定	サンゼ州立大学	アメリカ	令和2年4月
	ワライラック大学	タイ	令和5年10月
	プリンス・オブ・ソクラー大学(医学部)	タイ	令和7年12月

## ＜海外留学者数＞

	医学部	歯学部	薬学部	保健医療学部	その他	計
令和3年度	9	3	0	0	2	14
令和4年度	10	1	1	0	1	13
令和5年度	14	1	2	0	0	17
令和6年度	8	0	3	0	0	11
令和7年度	4	1	1	0	0	6

(※当該年度に留学を開始した件数)

## ＜海外渡航件数＞

	医学部	歯学部	薬学部	保健医療学部	教育部	その他	計
令和3年度	2	0	0	0	0	3	5
令和4年度	94	26	5	5	0	18	148
令和5年度	274	37	14	11	2	35	373
令和6年度	288	46	9	23	0	51	417
令和7年度	309	51	16	23	50	1	450

(※その他：先端がん治療研究所、臨床薬理研究所、発達障害医療研究所、スポーツ運動科学研究所、国際交流センターの教育職員、及び、看護師、放射線技師、事務等)

## ＜学生海外実習・研修件数＞

	医学部	歯学部	薬学部	保健医療学部	看護専門	計
令和3年度	0	0	0	0	0	0
令和4年度	15	7	2	0	0	24
令和5年度	28	12	22	22	0	84
令和6年度	36	17	19	17	0	89
令和7年度	36	24	15	18	2	95

## ＜学部・大学院留学生 受入件数＞

	医学部	歯学部	薬学部	保健医療学部	計
令和3年度	0	0	0	0	0
令和4年度	23	5	0	0	28
令和5年度	37	11	7	0	55
令和6年度	42	11	12	0	65
令和7年度	43	15	8	14	80

(※当該年度に受入れた件数)

## ＜公開講座テーマ一覧＞

(令和4年度)

■旗の台キャンパス &lt;暮らしと健康～新型コロナウイルス感染症への備え/アレルギー性疾患の最新情報～&gt;

月日	テーマ
WEB開催 5月1日 ～5月31日	おとな世代に必要なワクチンと予防できる感染症とがん 新型コロナウイルス感染症パンデミック、これまでの総括と今後の課題 新型コロナウイルス感染症の検査と治療薬 コロナ禍で自宅待機中にできる運動療法
WEB開催 11月23日 ～12月23日	気管支ぜん息 ～症状と診断、最新の治療について その咳、大丈夫？ 成人の食物アレルギー及びアナフィラキシー ～症状と診断、対処方法について アナキスアレルギーを知っていますか？

■藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院 &lt;暮らしと健康&gt;

月日	テーマ
WEB開催 7月14日 ～8月12日	昭和大学におけるロボット支援下直腸手術 ～昭和大学藤が丘病院で導入して～ 熱中症 ～救命医が伝えたい命を守る対策～
WEB開催 12月22日 ～1月19日	昭和大学藤が丘病院におけるロボット支援下前立腺全摘除術～初期導入経験～ 1人でもできるリハビリテーション

■江東豊洲病院 &lt;暮らしと健康～人生100年時代の心臓を診る/知って備える「あたま」の病気～&gt;

月日	テーマ
WEB開催 7月1日 ～9月30日	心臓手術で脳梗塞を予防する 心臓の声を聴く
WEB開催 12月1日 ～2月28日	脳卒中になったら こわい頭痛・つらい頭痛 脳卒中予防10カ条～生活習慣を見直してみませんか？ 脳血管疾患のリハビリテーションについて

■歯科病院 &lt;暮らしと健康～お口の健康～&gt;

月日	テーマ
10月15日	体の病気と歯科治療 専門医が診る入れ歯外来 お口の健康を育む方法

(令和3年度)

■旗の台キャンパス

&lt;暮らしと健康～医療機関と上手な付き合い方/心の健康&gt;

月日	テーマ
WEB開催 5月1日 ～5月31日	正しい病院のかかり方～かかりつけ医制度、選定療養費、セカンドオピニオンについて～ 今、飲んでいる薬、多いと感じませんか？ ～ポリファーマシーとかかりつけ薬局について～ コロナ禍に病院とどう付き合うか ～新型コロナウイルスは今～ 歯科医院でお口年齢を若返らせ健康長寿を
WEB開催 11月1日 ～11月30日	うつ病とうつ状態～症状と診断～ 物忘れと認知症 ～診断や治療、周辺症状、接し方について～ うつ病とうつ状態への対処と予防 高齢者に対する支援について(認知症を中心に)

■藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院 &lt;暮らしと健康&gt;

月日	テーマ
WEB開催 7月26日 ～8月31日	新型コロナウイルスについて ポリファーマシーについて
WEB開催 2月14日 ～3月14日	ロボット手術について 心臓カテーテルについて

■江東豊洲病院 &lt;暮らしと健康～今気になる医療トピックス&gt;

月日	テーマ
WEB開催 10月27日 ～12月31日	現代人と不妊症 赤ちゃんが生まれたら・・・子育て世代に伝えたいこと 無痛分娩について コロナ禍における在宅での運動と過ごし方に 関する注意点について

■歯科病院 &lt;暮らしと健康～お口の健康～&gt;

月日	テーマ
WEB開催 12月1日 ～1月20日	睡眠時無呼吸症候群のマウスピースによる治療 睡眠時無呼吸症候群(SAS) お口の健康を保つために ～気づいてますか？お口の変化～

■横浜キャンパス &lt;暮らしと健康&gt;

月日	テーマ
WEB開催 6月25日	生活の中で感じる手の痛み、どうしていますか？～その原因と手の動かし方～
WEB開催 11月8日	イマドキの子育て、孫育て～子育て、孫育てで世代に知って欲しい、子どもの健康と安全を守るためのコツ

■富士吉田キャンパス &lt;暮らしと健康&gt;

月日	テーマ
ケーブルテレビ 放送 6月18・19日	最新の認知症医療～「共生」と「予防」を両輪として～ 認知症予防-看護の視点から- 認知症予防-作業療法の視点から-
11月12日	日本語の不思議・ことばの不思議 レッツ喉トレ！～話す・食べるに必要な筋肉を鍛えよう～

■横浜市北部病院 &lt;暮らしと健康&gt;

月日	テーマ
WEB開催 (LIVE配信) 5月28日	がんリハビリテーション～がんになっても自分らしい生活を 送るために～ がん治療における心のケア～がんの告知・治療にともなう 心の痛み～
WEB開催 (LIVE配信) 11月26日	ロボット支援手術ってなに？ 私はこれでタバコをやめました。 ～やめたい人の禁煙外来～

■烏山病院 &lt;暮らしと健康&gt;

月日	テーマ
7月9日	発達障害と仕事～受診から就労に至るまで～ ピアサポートプログラムの紹介～治すから治し支え合う ダイケアへ～ 汎用性ADHDプログラムの紹介～サポートを全国へ広げて いくために～
11月12日	ダイケアにおけるグループワークの効果 ダイケアと私の思い出

■横浜キャンパス &lt;暮らしと健康&gt;

月日	テーマ
WEB開催 6月12日	女性のための尿もれケアと骨盤底筋エクササイズ
WEB開催 11月28日	中高年に生じる肩痛は五十肩と腱板断裂！ ～原因、治療、予防の実践～

■富士吉田キャンパス &lt;暮らしと健康&gt;

月日	テーマ
ケーブルテレビ 放送 6月19日・20日	オリンピックの起源と本質 ～オリンピックをより深く楽しむために～ 日常生活の運動と健康～姿勢に注目～
ケーブルテレビ 放送 12月4日・5日	新型コロナウイルス感染 これまでにわかったこと、 これから予想されること イネ・米・ごはん！ ～おいしいごはんをつくる品種・栽培・調理の技術～

■横浜市北部病院 &lt;暮らしと健康&gt;

月日	テーマ
WEB開催 5月29日	当院における新型コロナウイルス感染症対策とがん診療について コロナ禍でのがん治療で患者さんに 知っておいていただきたいこと
WEB開催 10月9日	病診連携～北部病院の取り組み 病診連携～診療所の上手なかかり方～

■烏山病院 &lt;暮らしと健康&gt;

月日	テーマ
Web開催 7月17日	依存症総論 烏山病院で行える依存症治療 ～入院加療・外来加療～ 依存症総論 烏山病院で行える依存症治療 ～烏山病院での入院治療～ 依存症総論 烏山病院で行える依存症治療 ～ゲーム依存症に対するの試み～ 依存症と地域連携 ～断酒会とは～ 依存症と地域連携 ～DARやNAとは～ 依存症と地域連携 ～グレイスロードやGAとは～ 依存症と地域連携 ～依存症とは 啓発について～ ダイケアにおける学生グループの活動 発達障害における不安と抑うつ
10月23日	

＜公開講座テーマ一覧＞  
(令和6年度)

■旗の台キャンパス <暮らしと健康>

月日	テーマ
5月11日	最新の認知症医療 ～予防と治療の調和が拓く新たな道～ 認知症の理解と予防～日々の生活の工夫から～
5月25日	認知症の人とその家族が生き生きと暮らすために ～看護の視点から～ 認知症は薬で治る？ ～認知症治療薬の違いと使い分け～
11月9日	健康寿命を伸ばす「賢い生活の知恵」 健康で長生きするための運動について～自宅内でのトレーニングからウォーキングのコツまで～ 生活習慣病を防ぐ健康的な食生活 ～今日から実践できる食生活の工夫～

■藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院 <暮らしと健康>

月日	テーマ
11月23日	知ることを守る！フレイルなんて怖くない！ 毎日の生活で避退！ フレイルによる転倒を防ごう！ ～転ばない身体づくり～ 食べて守る健康！フレイル予防の栄養法
2025年 3月1日	お口の元気が全身を救う 歯医者がささやく健康の秘訣 運動で心臓を守る・心臓病を治す

■江東豊洲病院 <暮らしと健康>

月日	テーマ
6月8日	飲み込みに大事な歯とお口の健康 のどを鍛えて誤嚥を防ぐ
10月14日	からだのサインを見逃さない！ 手足の症状からわかる脳神経疾患 手は症状を映す鏡

■歯科病院 <暮らしと健康>

月日	テーマ
10月12日	精密な根管治療で歯を残そう 歯周病って、治るんですか？ 健康な歯を目指して ～歯磨きで知っておきたい10のこと～

(令和5年度)

■旗の台キャンパス <暮らしと健康>

月日	テーマ
5月13日	食道がんに対する最新の低侵襲外科治療について 体にやさしいがん放射線治療の最前線
5月27日	がんを薬で治す、がん免疫療法の最前線 がんゲノム医療の最前線
11月11日	オーラルフレイル対策で食べる楽しみいつまでも レッツ喉トレ！～食べる・話すに必要な筋肉を鍛えよう～
11月18日	いつまでも元気な体づくり～「その1食」がポイント～ 美味しく食べ続けるための付き合い方 ～処方薬・市販薬・サプリメント～

■藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院 <暮らしと健康>

月日	テーマ
WEB開催 8月15日～9月 12日	遺伝性乳癌 認知症の考え方、付き合い方
3月16日	腰痛を克服しよう！～腰痛・神経痛をきたす疾患～ 免疫カアップのための腸活術～編る

■江東豊洲病院 <暮らしと健康>

月日	テーマ
6月3日	なかなか聞けない トイレのお悩みスッキリ解決！
10月26日	知っておきたい認知症

■歯科病院 <暮らしと健康>

月日	テーマ
10月14日	全身麻酔で歯科治療 矯正歯科治療と健康寿命 歯とお口の健康を守るには！

■横浜キャンパス <暮らしと健康>

月日	テーマ
6月15日	あれ？もしかして認知症？認知症でも安心して暮らすために
11月2日	シンプル思考で治す肩関節

■富士吉田キャンパス <暮らしと健康>

月日	テーマ
5月25日	当地区の医療状況と最高の人生を送るために 昭和大学周辺の植物 ～テンナンショウの不思議な生態～
11月9日	こころからだも健やかに！ ～ストレスとの付き合い方～ 暮らしの中の動物たち ～出会う喜び・知る楽しみ～

■横浜市北部病院 <暮らしと健康>

月日	テーマ
5月11日	自分のため、大切な人のために知っておきたい 乳がんに関心するための3つのコツ これからの認知症ケア
10月12日	白内障手術で、メガネ無し生活に！ ～老眼鏡もいらなくなる白内障手術～ サルコペニアとフレイルに立ち向かう 健康維持のためのセルフマネジメント

■鳥山病院 <暮らしと健康>

月日	テーマ
7月27日	心身の健康管理に関するセルフメンタルケア ストレスマネジメント ：心身の不調があってもイキイキ生活 災害が起きる前にできること ～もしもの時にどうする？基本の4つ～
11月9日	災害時のこころのケア

■横浜キャンパス <暮らしと健康>

月日	テーマ
6月17日	Exercise is medicine ー運動は良薬なり
11月4日	飲み込みのしくみ ～おいしく食事を楽しむために～

■富士吉田キャンパス <暮らしと健康>

月日	テーマ
5月27日	富士山噴火に備えるには？ 自分の足で避難するためには。
11月18日	身近にある危険？な植物 ケガの予防のために～効果的なストレッチングのポイント～

■横浜市北部病院 <暮らしと健康>

月日	テーマ
WEB開催 5月20日	前立腺がんでどんな病気？ 食は薬なり
WEB開催 10月28日	無痛分娩について正しく知ろう～メリットとデメリット～ 大腸がんリスクを減らす！～AIが見守る大腸内視鏡～

■鳥山病院 <暮らしと健康>

月日	テーマ
7月22日 中止	新型コロナウイルスにおける治療薬について 鳥山病院における新型コロナウイルス感染症治療について
11月25日	発達障害専門ケアの取り組みとその効果 ～一人ひとりのゴールを目指した支援～ 発達障害と依存症

＜公開講座テーマ一覧＞  
(令和7年度)

■旗の台キャンパス <暮らしと健康>

月日	テーマ
5月10日	ダビンチ・ヒトリによるロボット支援手術と安全性向上への工夫
	蛍光イメージング技術と人工知能技術を駆使した最新消化器外科治療 歩行再建を目指した最先端のリハビリテーション～ロボット技術の応用～
11月8日	食事とサプリメントについて(薬学的観点から)
	食事とサプリメントについて(栄養学的観点から)
	心のサプリメントについて(病気に対するレジリエンス:看護学的視点)

■藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院 <暮らしと健康>

月日	テーマ
6月28日	暑い夏を乗り切る！救命医が教える“熱中症予防のコツ” 遺伝医療のトピをひらく～遺伝学的検査と遺伝カウンセリング～
11月22日	べらぼう ～泌尿器科手術栄華乃夢断～
	その痛み・・・ひよとしてリウマチ？

■江東豊洲病院 <暮らしと健康>

月日	テーマ
6月7日	お尻と骨盤の異変に気づく！正しい知識と最新治療 —骨盤臓器脱(子宮脱)と脱肛(内痔核)を中心に— ①骨盤臓器脱の最新治療—身体に優しい低侵襲手術を目指して—
10月13日	今日からできる！健康対策 —寝たきりにならないための食事療法— ①自宅でできる褥瘡治療—それは予防—

■歯科病院 <暮らしと健康>

月日	テーマ
10月11日	さまざまな口腔粘膜疾患
	矯正歯科と健康寿命 ～いま、なぜ歯並びが大切なのか～
	今からできる！お口と身体の健康習慣

■横浜キャンパス <暮らしと健康>

月日	テーマ
6月15日	お子さんのちょっと気になる行動のあれこれ
10月25日	「いびき」や「日中の眠気」が気になる方へ～睡眠の悩みと上手に向き合う～

■富士吉田キャンパス <暮らしと健康>

月日	テーマ
5月31日	呼吸の力で整えるところからだ
	道端で楽しむ野草～ウォーキングをもっと楽しく！～
11月1日	人生がハッピーになる大人のためのオシッコ学
	“細長い町”からの復活～太宰治「富嶽百景」を読む～

■横浜市北部病院 <暮らしと健康>

月日	テーマ
5月24日	「肺がん治療の進歩」～免疫チェックポイント阻害薬からロボット支援手術まで～
	不眠症(睡眠障害)の対応の仕方
1月17日	心臓弁膜症を知ろう～僧帽弁・大動脈弁の病気と治療法～
	皮膚がんの基礎知識

■烏山病院 <暮らしと健康>

月日	テーマ
5月29日	依存症治療における医療の役割
	烏山病院から〇〇に繋がって
12月6日	対談:小説家 前川ほまれ氏と考えるヤングケアラーと家族について ～著書『藍色時刻の君たちは』を手掛かりに～

施設名	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
旗の台キャンパス	2回(8・839)・注1	2回(8・767)・注1	4回(8・429)	2回(7・398)	2回(6・274)
横浜キャンパス	2回(2・166)	2回(2・86)	2回(2・46)	2回(2・74)	2回(2・72)
富士吉田キャンパス	2回(4・注2)	2回(4・注4)	2回(4・101)	2回(4・175)	2回(4・141)
藤が丘病院、藤が丘リハビリテーション病院	2回(4・551)・注1	2回(4・684)・注1	1回(2・262)注1/1回(2・74)	2回(5・128)	2回(4・90)
横浜市北部病院	2回(4・187)・注1	2回(4・202)・注1	2回(4・141)注1	2回(4・169)	2回(4・102)
江東豊洲病院・豊洲クリニック	1回(4・349)・注1	2回(6・369)・注1	2回(2・195)	2回(4・229)	2回(4・224)
烏山病院	2回(9・注3)	2回(5・139)	1回(2・263)	2回(4・62)	2回(3・458)
歯科病院	1回(3・520)・注1	1回(3・15)	1回(3・18)	1回(3・34)	1回(3・15)

※( )内は、テーマ数・参加人数

注1:参加人数は、WEB開催による動画再生数

注2:ケーブルテレビ放送につき、視聴回数不明

注3:視聴回数272回(7/17Web開催)、参加者数111名(10/23対面開催)

注4:ケーブルテレビ放送につき、視聴回数不明(6/18,6/19)、参加者数55名(11/12対面開催)



昭和医科大学  
自己点検・自己評価報告書  
令和7年度

発行 昭和医科大学  
〒142-8555  
東京都品川区旗の台1-5-8  
TEL. 03-3784-8000 (代表)

発行日 令和8年5月

事務局 総務部企画課  
TEL. 03-3784-8387  
FAX. 03-3784-8012

